

函 館 市

西 桔 梗 1 遺 跡 (2)

一般国道228号函館江差自動車道函館茂辺地
道路改良工事用地内埋蔵文化財発掘調査報告書

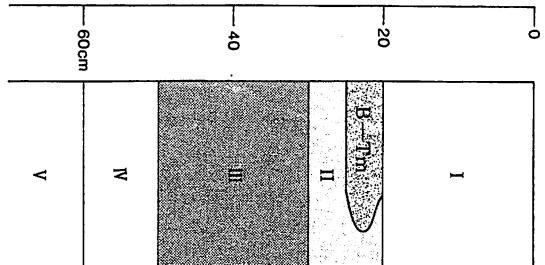
平 成 9 年 度

財団法人 北海道埋蔵文化財センター

西桔梗 1 遺跡(2) (北埋調査 122)

正誤表

頁	行	誤	正
目次	20	炭化した木材組織写真	炭化した木材の木材組織写真
表目次	18	表1 テフランの鉱物屈折率	表1 <u>テフラン</u> 中の鉱物屈折率
3	図I-2の基本土層名が欠落		右の「図I-2」の図を貼り込む
15	25	^{14}C 測定結果はB. P. 2610 ± 30	^{14}C 測定結果はB. P. 2570 ± 20
52	1	土層記 1 暗黄褐色土 (MH-2 覆土)	1 暗黄褐色土 (NH-2 覆土)
79	2	暗褐色土 (MH-2 覆土)	2 暗褐色土 (NH-2 覆土)
83	13	石 錐	11 石 錐
	11勝井ほか、1976。.....勝井ほか、1975。.....
	30江原幸雄 (19975) :江原幸雄 (1975) :
117	18	土壌 7	土壌 6



図I-2 土層模式図

函 館 市

西桔梗1遺跡(2)

一般国道228号函館江差自動車道函館茂辺地
工事用地内埋蔵文化財発掘調査報告書

平 成 9 年 度

財団法人 北海道埋蔵文化財センター



Tピットの分布状況（東から）



NH-2 焼土・炭化材検出状況(南から)



NP-4 土層断面 (西から)

例　　言

1. 本書は平成9年度に当センターが実施した一般国道228号函館江差自動車道函館茂辺地道路改良工事用地内の埋蔵文化財包蔵地の発掘調査報告である。
2. 本書の執筆は、I：佐藤和雄・広田良成、II：佐藤和雄、III：佐藤和雄・広田良成、IV：佐藤和雄・広田良成、V：広田良成・佐藤和雄、VI：花岡正光が担当した。
3. 各種測定、同定、分析等は下記に依頼した。

炭素年代測定 京都産業大学 山田 治氏

炭化物樹種同定 北海道開拓記念館 三野紀雄氏

テフラの鉱物組成 ジオサイエンス（株）

（株）古環境研究所

4. 石材鑑定は資料調査課 花岡正光による。

5. 調査報告終了後の出土遺物および記録類については函館市教育委員会が保管する。

6. 調査にあたっては下記の諸機関、各氏からご指導ご協力をいただいた。

文化庁、北海道教育委員会、函館市教育委員会、北海道開発局函館開発建設部函館道路事務所、
株式会社高橋組、函館市教育委員会 田原良信・中村公宣・佐藤智雄、市立函館博物館 長谷部
一弘、七飯町教育委員会 石本省三・横山英介・竹花和晴・菊池 博・山田 央、上磯町教育委
員会 森 靖裕、上ノ国町教育委員会 斎藤邦典、南茅部町教育委員会 阿部千春・福田祐二、
森町教育委員会 藤田 登、伊達市教育委員会 大島直行、青森市教育委員会 遠藤正夫・児玉
大成、平取町教育委員会 森岡健治、富良野市郷土館 澤田 健

凡　　例

1. 遺構の表記は、以下に示す記号を使用した。

NH：住居跡　　NP：土壙　　TP：Tピット　　ND：溝跡
HP：住居跡内柱穴

2. 遺構図の数値は、標高（単位m）である。

3. 遺物出土状況図は、以下に示す記号を使用した。

□：土器　　▲：石器　　●：礫

4. 遺構の規模は、「確認面での長軸長×単軸長／床（底）面での長軸長×単軸長／確認面からの最大深」の順で記した。一部破壊されているものは現在長を（ ）で示し、不明のものはーーで示した。

5. 実測図の縮尺は、原則として下記のとおりである。

遺構	1 : 40
復元土器	1 : 4
土製品	1 : 2
石斧	1 : 2
石皿	1 : 4
貨幣拓本	1 : 1
土器拓本	1 : 2
剝片石器	1 : 2
礫石器	1 : 3
石製品	1 : 2

6. 土層の表記は、基本土層についてはローマ数字で、遺構の層位についてはアラビア数字で示した。

目 次

口絵

例言

凡例

目次

I 調査の概要	1
1 調査要項	1
2 調査体制	1
3 調査にいたる経緯	1
4 調査の概要	2
(1)発掘区の設定	2
(2)調査の方法	3
(3)土層	3
5 遺物の分類	3
(1)土器	3
(2)石器・石製品	6
6 調査結果の概要	6
II 遺跡の概要	9
1 遺跡の位置と周辺の遺跡	9
2 遺跡の環境	9
III 遺構と遺構出土の遺物	13
1 住居跡	13
2 土壙墓	26
3 土壙	26
4 Tピット	32
5 Tピット列	50
6 溝跡	51
7 埋設土器1	52
IV 包含層出土の遺物	53
1 土器	53
2 石器・石製品	63
V 表土出土の遺物	70
VIまとめ	71
1 NH-2住居跡と埋設土器1について	71
2 I群Bx類土器について	73
引用参考文献	74
VII 自然科学的手法による分析結果	81

1 函館市西桔梗 1 遺跡出土の炭化した木材	三野 紀雄	81
2 西桔梗 1 遺跡のテフラ	花岡 正光	83
写真図版		
報告書抄録		117

挿図目次

図 I - 1 発掘区設定図	2
図 I - 2 土層模式図	3
図 I - 3 土層断面図	4
図 I - 4 土層断面図	5
図 I - 5 遺構位置図	8
図 II - 1 遺跡の位置と周辺の遺跡	10
図 II - 2 周辺の地形	11
図 III - 1 NH - 1	13
図 III - 2 NH - 1 出土遺物	14
図 III - 3 NH - 2	16
図 III - 4 NH - 2 炭化材出土状況	18
図 III - 5 NH - 2 出土遺物	19
図 III - 6 NH - 3・4	20
図 III - 7 NH - 5 (1)	22
図 III - 8 NH - 5 (2)	23
図 III - 9 NH - 5 (3) と出土遺物	24
図 III - 10 NH - 6 と出土遺物	25
図 III - 11 NP - 3 と出土遺物	28
図 III - 12 NP - 1・2・4	29
図 III - 13 NP - 4 出土遺物	30
図 III - 14 NP - 5・NP - 7 と出土遺物・NP - 8	31
図 III - 15 TP - 1・2・3	38
図 III - 16 TP - 4・TP - 5 と出土遺物・TP - 6	39
図 III - 17 TP - 7・8・9	40
図 III - 18 TP - 9 出土遺物・TP - 10 と出土遺物・TP - 11	41
図 III - 19 TP - 12 と出土遺物・TP - 13	42
図 III - 20 TP - 14・TP - 15 と出土遺物	43
図 III - 21 TP - 16 と出土遺物・TP - 17	44
図 III - 22 TP - 18・19 と出土遺物・TP - 20	45
図 III - 23 TP - 21・TP - 22 と出土遺物・TP - 23	46
図 III - 24 TP - 24・25・26	47
図 III - 25 TP - 27・28・29	48
図 III - 26 TP - 30・31・32	49
図 III - 27 T ピット配列図	50
図 III - 28 ND - 1 と出土遺物	51
図 III - 29 埋設土器 1 と出土遺物	52

図IV- 1 土器 1・2・3	53
図IV- 2 土器出土分布	54
図IV- 3 土器出土分布（I群）	54
図IV- 4 土器出土分布（II群）	55
図IV- 5 土器出土分布（III群A類・B類）	55
図IV- 6 土器出土分布（V群）	56
図IV- 7 土器出土分布（VI群）	56
図IV- 8 包含層出土の土器（1）	58
図IV- 9 包含層出土の土器（2）	59
図IV-10 包含層出土の土器（3）	60
図IV-11 包含層出土の土器（4）	61
図IV-12 包含層出土の土器（5）	62
図IV-13 石器出土分布	63
図IV-14 包含層出土の石器（1）	65
図IV-15 包含層出土の石器（2）	66
図IV-16 包含層出土の石器（3）	67
図IV-17 包含層出土の石器（4）	68
図IV-18 包含層出土の石器（5）	69
図V- 1 表土出土の遺物	70
VII章- 1 図- 1 炭化した木材組織写真	82
VII章- 2 図- 1 テフラ柱状図	84
図- 2 テフラの顕微鏡写真	86

表 目 次

表 1 遺構数一覧	7
表 2 出土遺物一覧	7
表 3 周辺の遺跡一覧	12
表 4 遺構一覧（住居跡）	75
表 5 遺構一覧（土壙）	75
表 6 遺構一覧（Tピット）	75
表 7 遺構一覧（溝跡）	75
表 8 遺構一覧（埋設土器）	75
表 9 遺構別出土遺物一覧	76
表10 遺構出土掲載土器一覧(実測図)	77
表11 遺構出土掲載土器一覧(拓影)	77
表12 遺構出土掲載石器一覧	77
表13 包含層出土掲載土器一覧(実測図)	77
表14 包含層出土掲載土器一覧(拓影)	78
表15 包含層出土掲載石器一覧	78
表16 表土出土掲載遺物一覧	78
VII章- 1 表 1 炭化した木材の樹種同定結果	82
VII章- 2 表 1 テフラの鉱物屈折率	85

図版目次

- | | | | |
|------|----------------------------------|------------------------------|--------------------|
| 図版 1 | 1 遺跡遠景（西から） | 図版12 | 1 埋設土器 1 土層断面(東から) |
| 図版 2 | 1 遺跡遠景（西から） | 2 土器 2 出土状況（南から） | |
| | 2 調査区全景（東から） | 3 土器 3 出土状況（南から） | |
| 図版 3 | 1 調査風景（北から） | 4 ND – 1 確認状況（南東から） | |
| | 2 調査風景（北から） | 図版13 1 NH – 1 出土の土器・石器・土製品 | |
| | 3 調査風景（北東から） | 図版14 1 遺構出土の土器・石器 | |
| 図版 4 | 1 NH – 1 全景（南西から） | 図版15 1 遺構出土の土器・石器 | |
| | 2 NH – 1 遺物出土状況（南から） | 図版16 1 NP – 3 出土の石器 | |
| | 3 NH – 1 遺物出土状況（南から） | 図版17 1 遺構出土の土器・石器 | |
| 図版 5 | 1 NH – 2 全景（東から） | 図版18 1 包含層出土の土器(I群B類・図IV – | |
| | 2 NH – 2 炭化材出土状況（東から） | 8 – 1) | |
| 図版 6 | 1 NH – 2 焼土確認状況（東から） | 2 包含層出土の土器(V群・図IV – 10 – | |
| | 2 NH – 2 焼土断面(東から) | 29) | |
| | 3 NH – 2 土器埋設炉（北東から） | 3 包含層出土の土器(V群・図IV – 10 – | |
| | 4 NH – 2 土器埋設炉断面（東から） | 28) | |
| 図版 7 | 1 NH – 2 ・ 3 全景（南東から） | 4 包含層出土の土器(V群・図IV – 10 – | |
| | 2 NH – 4 全景（北から） | 28) | |
| 図版 8 | 1 NH – 5 全景（北から） | 図版19 1 包含層出土の土器 (I群B類) | |
| | 2 HP – 5 断面（東から） | 図版20 1 包含層出土の土器 (II群・III群・IV | |
| | 3 HP – 5 全景（東から） | 群) | |
| | 4 HP – 1 全景（南から） | 図版21 1 包含層出土の土器 (V群) | |
| | 5 NH – 5 遺物出土状況（東から） | 図版22 1 包含層出土の土器 (VI群) | |
| 図版 9 | 1 NH – 6 全景（南東から） | 図版23 1 包含層出土の石器 | |
| | 2 NH – 6 土器出土状況（北から） | 図版24 1 包含層出土の石器 | |
| | 3 NH – 6 土器出土状況（東から） | 図版25 1 包含層出土の石器 | |
| | 4 NH – 6 土器出土状況（南から） | 図版26 1 包含層出土の石器 | |
| | 5 NP – 3 遺物出土状況（西から） | 図版27 1 包含層出土の石器 | |
| | 6 NP – 3 遺物出土状況（南から） | 図版28 1 包含層出土の石製品 | |
| 図版10 | 1 NP – 4 土層断面(東から) | 2 表土出土の遺物 | |
| | 2 NP – 4 全景（南西から） | | |
| | 3 NP – 5 ・ TP – 22土層断面（南西
から） | | |
| 図版11 | 1 TP – 12土層断面（北から） | | |
| | 2 TP – 12全景（南から） | | |
| | 3 TP – 16土層断面（南東から） | | |
| | 4 TP – 16全景（南から） | | |

I 調査の概要

1 調査要項

事業名 一般国道228号函館江差自動車道函館茂辺地道路工事用地内埋蔵文化財発掘調査
委託者 北海道開発局函館開発建設部
受託者 財団法人 北海道埋蔵文化財センター
受託期間 平成9年4月11日～平成10年3月31日
発掘期間 平成9年5月6日～平成9年8月9日
調査遺跡 西桔梗1遺跡（北海道教育委員会登載番号 B-01-130）
所在地 函館市西桔梗町704ほか
調査面積 5,000m²

2 調査体制

財団法人	北海道埋蔵文化財センター
理事長	伊藤一夫
専務理事	佐藤哲人
常務理事	柴田忠昭
常務理事	木村尚俊
業務部長	山内清志（5月31日付退任）
業務部長	北條雅洋（6月1日付就任）
第1調査部長	畠宏明
第2調査課長	佐藤和雄（発掘担当者）
主任	工藤研治
文化財保護主事	広田良成（発掘担当者）
文化財保護主事	立田理

3 調査にいたる経緯

一般国道228号線は一般国道227号線と共に函館と江差を結ぶ道南・函館圏の主要な道路網のひとつである。北海道開発局函館開発建設部（以下函館開建と記す）は国道228号線の交通渋滞緩和、観光交通の増加、都市間の流通の活性化などを目的に一般国道228号函館江差自動車道の建設を計画した。将来は、北海道縦貫自動車道に接続する函館新道との分岐が予定されている。

函館市内の工事区間は、サイベ沢遺跡、西桔梗遺跡などに近接しており、埋蔵文化財包蔵地の所在が予想された。そのため函館開建と北海道教育委員会（以下道教委と記す）との間でその取り扱いについて事前協議が行われ、道教委は埋蔵文化財包蔵地の所在確認調査・範囲確認調査を行った。

函館市内で確認された遺跡は6ヵ所で、順次範囲確認調査が行われている。この事業に伴う発掘調査は平成7年度に行われた西桔梗1遺跡が最初である。2回目の調査となる今年度で西桔梗1遺跡の発掘調査は終了した。

4 調査の概要

(1) 発掘区の設定

発掘区の設定にあたっては、工事用地の中心線杭 P = 2300 と E T C = 2265.037 を結ぶ直線 (L ライン) とこれに直交し R52 を通る直線 (9 ライン) を基線とし、5 m 間隔でそれぞれの基線に並行する各ラインを設定した。P = 2300 杭・E T C = 2265.037 杭・R52 杭の測量成果は次のとおりである。

$$\begin{array}{lll} P = 2300 & X = -240,110.809 & Y = +38,750.809 \\ E T C = 2265.037 & X = -240,136.029 & Y = +38,596.677 \\ R52 & X = -240,057.880 & Y = +38,750.659 \end{array} \text{ (平面直角座標系第 XI 系)}$$

区画線は縦線にアルファベット、横線にアラビア数字による呼称を与えた。

各発掘区の呼称は北西隅のラインの交点で表示した。例えば B ラインと 2 ラインの交点の南東側が B-2 区となる (図 I-1)。

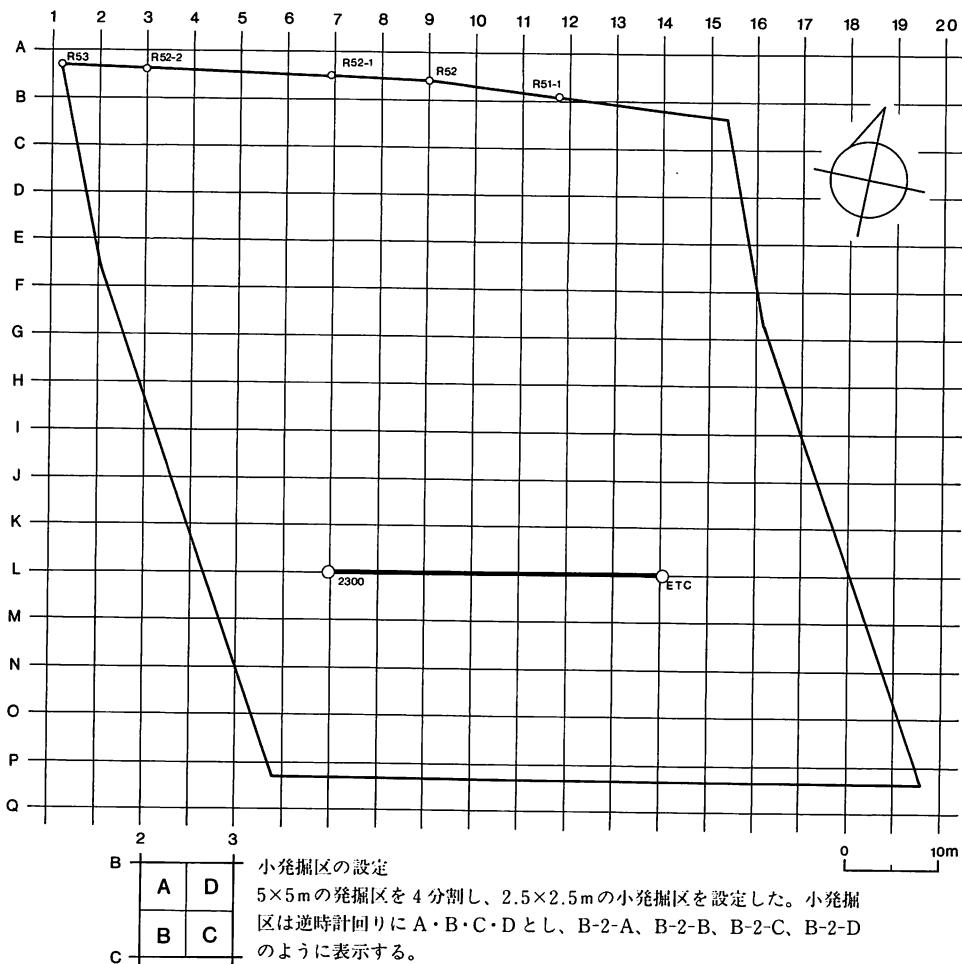


図 I-1 発掘区設定図

(2) 調査の方法

調査区の現況が畠地であったため、重機で耕作土を除去することから調査を開始した。人力による調査は始めに発掘区の設定をした後、トレンチ調査、包含層調査、遺構調査の順で調査を進めた。

包含層の遺物については、 $2.5 \times 2.5\text{m}$ の小発掘区ごとに取り上げた。住居跡・墓・埋設土器の遺物については、出土位置・高さ・層位を記録した。土壤・Tピットの遺物は、全て流れ込みあるいは混入したものとみられることから遺構ごとに一括して取り上げた。

(3) 土層

西桔梗1遺跡における基本的な層序は、図I-2のとおりである。耕作による削平や地形の変化により各層位の堆積状況に差がみられた。遺物包含層はIII層である。

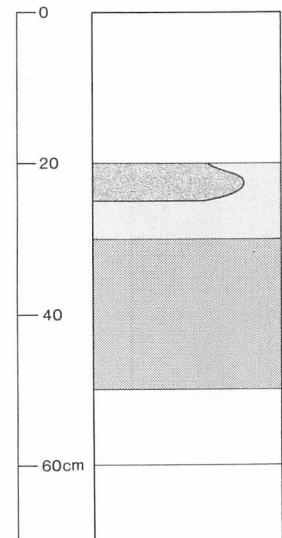
I層：耕作土

II層：黒色土(B-Tm-Ko-dの二枚の火山灰が認められる。)

III層：黒色土(腐植質土)

IV層：黒褐色土(漸移層)

V層：黄褐色土(部分的に礫が混じる粘土層で、上面では Ng-a・Ng-b火山灰が認められる。)



図I-2 土層模式図

5 遺物の分類

(1) 土器

土器の分類にあたっては平成7年度報告「西桔梗1遺跡」の「5 遺物の分類」に準拠した。今回の調査では縄文時代早期(I群)から続縄文時代(VI群)にかけてのものが出土している。

I群 縄文時代早期に属するもの。A類は出土していない。

A類 爪形文、貝殻文、条痕文の施された土器群。

A-1類 爪形文の施されたもの。

A-2類 貝殻文の施されたもの。

A-3類 住吉町式に相当するもの。

B類 縄文、撚糸文、絡条体圧痕文、組紐圧痕文、貼付文などの施された土器群。

B-1類 東鉋路II式、東鉋路III式に相当するもの。

B-2類 コッタロ式に相当するもの。

B-3類 中茶路式に相当するもの。

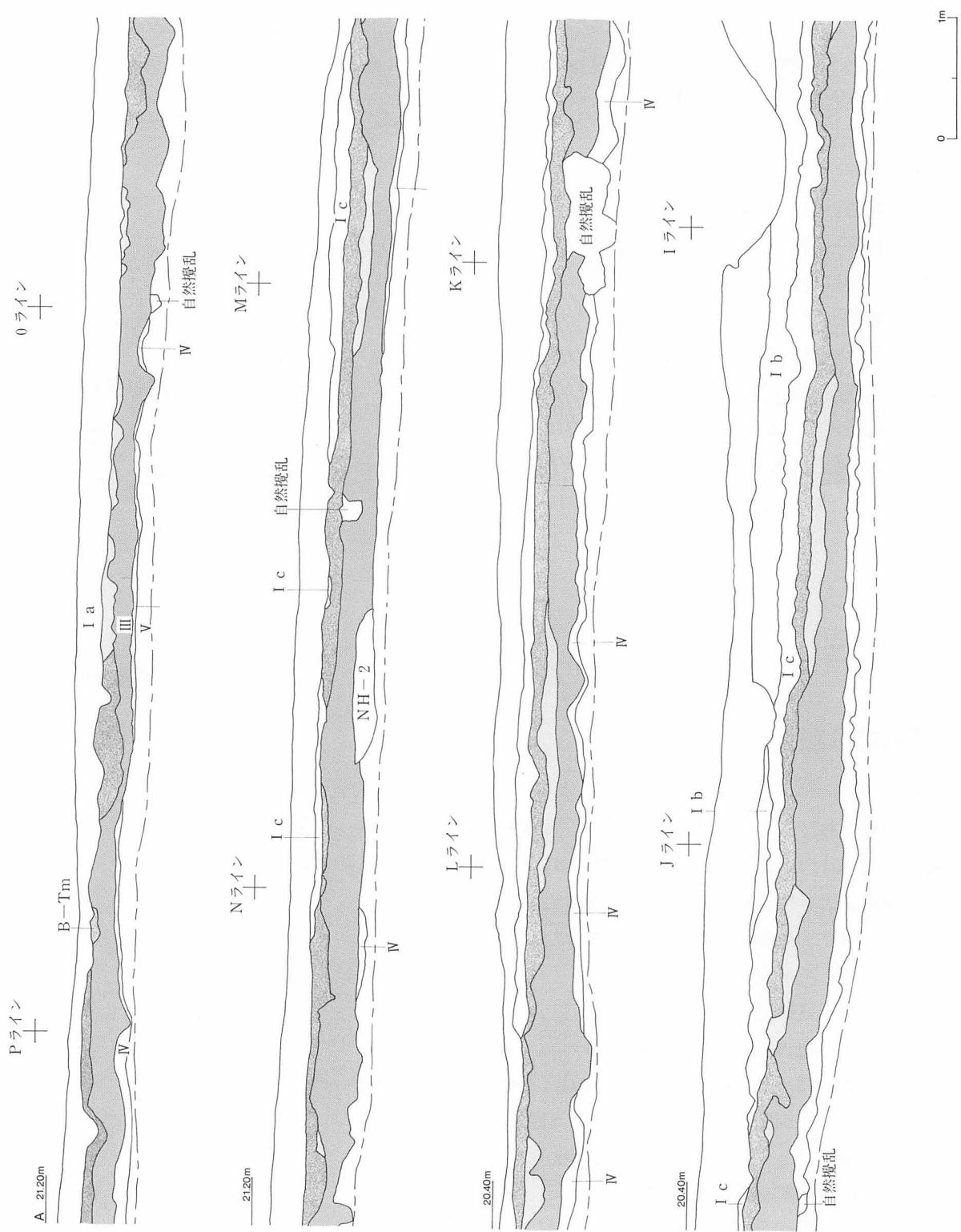
B-4類 東鉋路IV式に相当するもの。

B-X類 綾杉状の縄文の施されたもの及び近縁のもの。

II群 縄文時代前期に属するもの。

A類 縄文の施された丸底、尖底を特色とする土器群。桔梗野式、綱文式、石川野式、春日町

I 調査の概要



図I-3 土層断面図



図 I-4 土層断面図

I 調査の概要

- 式に相当するもの。
- B類 円筒土器下層式に相当するもの。
- III群 繩文時代中期に属するもの。
- A類 円筒土器上層式に相当するもの。
- B類 榎林式、大安在B式、ノダップII式、煉瓦台式に相当するもの。
- IV群 繩文時代後期に属するもの。A類、B類は出土していない。
- A類 天祐寺式、涌元式、トリサキ式、大津式、白坂3式に相当するもの。
- B類 ウサクマイC式、手稻式、鰐澗式に相当するもの。
- C類 堂林式、三ツ谷式、湯の里3式に相当するもの。
- V群 繩文時代晩期に属するもの。A類、C類は出土していない。
- A類 大洞B式、大洞B-C式に相当するもの。
- B類 大洞C₁式、大洞C₂式に相当するもの。
- C類 大洞A式、大洞A'式に相当するもの。
- VI群 続縄文時代に属するもの。恵山式が少量出土している。 (佐藤和雄)

(2)石器・石製品

石器は器種別に分類を行った。剝片石器には石鏃、石槍、石錐、つまみ付きナイフ、靴形石器、両面調整石器、鎧状石器、スクレイパー、抉入石器、剝片石器片がある。磨製石器は磨製石斧がある。礫石器はたたき石、すり石、砥石、台石・石皿、石錘、未分類礫石器、礫石器片がある。石製品には異形石器がある。このほかに加工痕のある剝片、(Rフレイク)、刃こぼれ状の使用痕のある剝片(Uフレイク)、剝片・碎片(フレイク・チップ)、石核、原石がある。

「両面調整石器」は明瞭な尖端部をもたず、ほぼ全面を加工されたものをさす。「未分類礫石器」は上記の礫石器の器種のいずれにもあてはまらないものである。「～片」は石器の破片で器種が不明のものを剝片石器、磨製石器、礫石器の中でそれぞれ一括したものである。 (広田良成)

6 調査結果の概要

検出された遺構は、竪穴住居跡6軒、土壙墓1基、土壙6基、Tピット32基、溝跡1ヵ所、埋設土器1基である。Tピットを除く遺構は調査区北東側と南西側の台地縁辺部から平坦部にかけてまとまっている。住居跡のうちN H-1・6は比較的小型の住居跡で床面から円筒土器下層式がまとまって出土している。N H-2は晩期の焼失家屋で土器埋設炉を伴っている。土壙墓の副葬品には靴形石器、スクレイパー、磨製石斧がある。土壙のうちN P-4は径約2.5m、深さ約2.6mの大型フラスコ状ピットである。Tピットは溝状で杭跡をもたないものである。数基単位で列をなしているのが確認された。

出土した遺物は、約4,600点で内訳は土器と石器等がともに約2,300点ずつである。土器は縄文時代早期後半の土器(I B)が半数を占め、縄文時代中期の円筒土器上層式土器(III A)、縄文時代晩期の土器(V)、続縄文時代の恵山式土器(VI)が順に次ぐ。これらに伴う石器は約100点に過ぎず、石器等の大半は剝片である。器種別には、スクレイパー、石鏃、石皿、石錘が多い。その他では、石核も多く出土している。 (佐藤和雄)

表1 遺構数一覧

住居跡	土 壤	T ピット	溝 跡	埋設土器
6	7	32	1	1

表2 出土遺物一覧

時 期	分 類	点 数		分 類	点 数		分 類	点 数	
		遺構	包含層		遺構	包含層		遺構	包含層
繩文早期	I		440	石 鏃	1	10	磨製石器片		2
	I B	78	506	石 槍		1	たたき石	1	5
	I B 3		29	石 錐	2		すり石		9
	I B 4		13	つまみ付きナイフ		3	砥 石		8
	II		4	靴形石器	1		台石・石皿	5	2
	II A	13	4	両面調整石器	1	11	石 錘	1	7
	II B	230	46	籠状石器		4	未分類礫石器		3
	III A	29	426	スクレイパー	4	10	礫石器片		3
	III B	2		抉入石器		2	原 石	1	2
	III B 3		2	剝片石器片	3	21	礫	21	7
後期	IV C			Rフレイク	2	87	焼 磕		24
晩期	V	86	332	Uフレイク		7	石 製品	1	
続繩文	VI		102	剝 片	241	1706	異形石器		1
その他			2	石 核		42	そ の 他	4	2
	磨製石斧				1	1			
計		438	1,906				計	288	1,982
土器計			2,344	石器等計					2,270
統計					4,614				

I 調査の概要

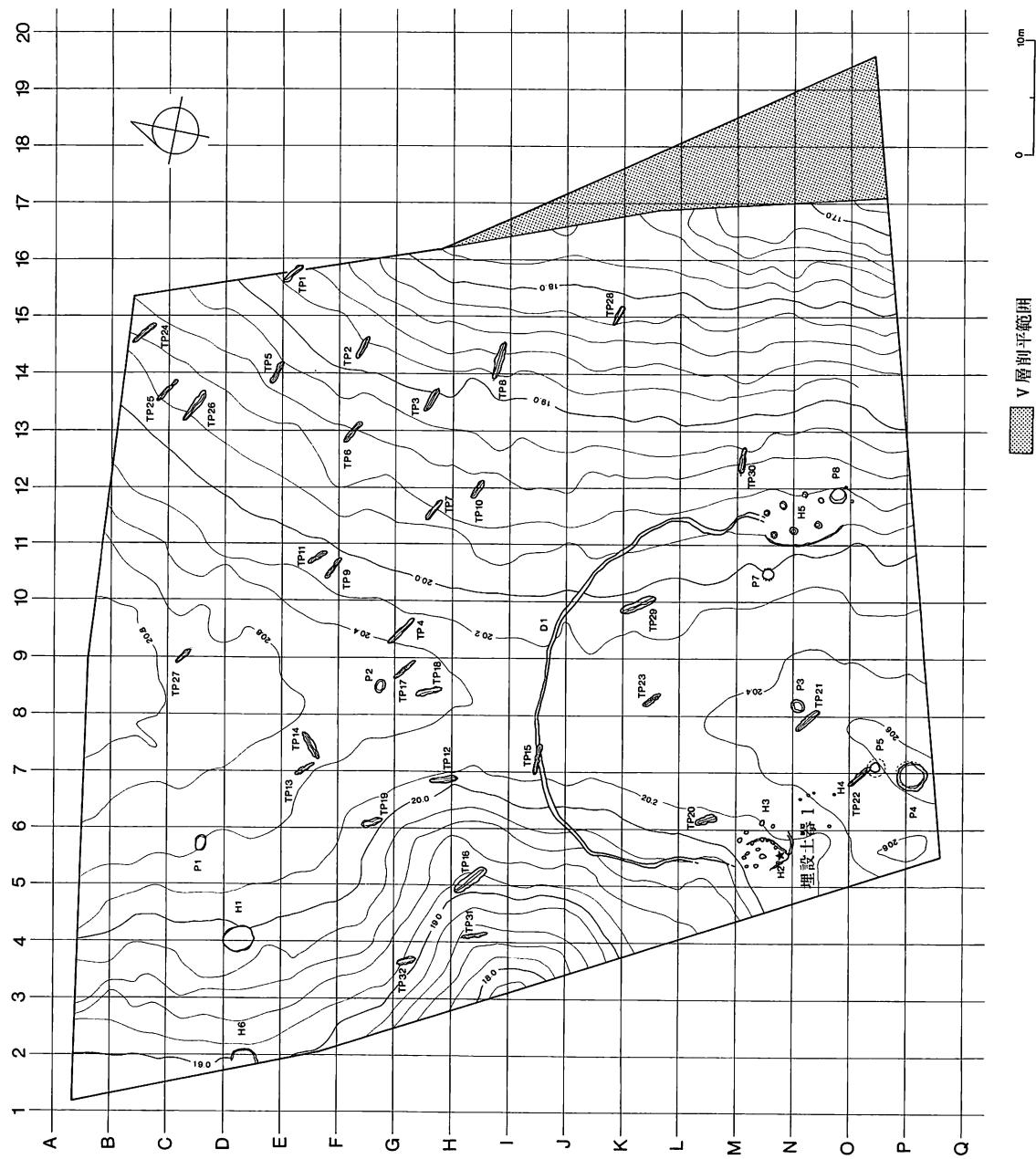


図 I - 5 遺構位置図

II 遺跡の概要

1 遺跡の位置と周辺の遺跡

西桔梗1遺跡は、JR北海道桔梗駅の西方約1km、標高約17~20mの台地とそれに続く斜面に位置する。

本遺跡の近くにはサイベ沢遺跡群や西桔梗遺跡群がある。サイベ沢遺跡群は西桔梗1遺跡の南東、約800mのところにある。このうちサイベ沢遺跡は、貝塚を伴う縄文時代前期~中期の集落遺跡として有名である。1957年に最初の発掘調査(児玉ほか 1958)が行われ、1966年(吉崎ほか 1967)、1984年・1985年(田原・鈴木 1986)などの調査が断続的に行われている。このほか、サイベ沢B遺跡(森田・高橋 1967)縄文時代中期、サイベ沢C遺跡(函館市教育委員会 1972調査)縄文時代早期・晩期などがある。西桔梗遺跡群は西桔梗1遺跡の南東、約1kmのところにある。函館流通センター建設に伴い1972年、B₁・B₂・C・D・E₁・E₂・Fの各遺跡が調査され、縄文時代早期から続縄文時代の遺構・遺物が発見されている(千代編 1974)。これらの遺跡の東方約1kmのところには、当センターによって発掘調査された石川1遺跡(1988a)と桔梗1遺跡(1988b)がある。石川1遺跡では旧石器時代及び縄文時代早期・中期の遺構・遺物が発見されている。桔梗1遺跡では旧石器時代の遺物と縄文時代中期の遺構・遺物が発見されている。

本遺跡の北東には函館市と七飯町の境界をなす蒜沢川がある。この流域には縄文時代や続縄文時代の遺跡である大中山6・8・11・12・13・14・15・16・桔梗6遺跡が分布する(図II-1、表-3)。

2 遺跡の環境

本遺跡は函館平野の東部に位置している。周辺には、横津岳から函館平野へかけて、山地斜面、山麓の緩斜面または扇状地、段丘、及び沖積低地が発達している。

山地部は標高1,100~150mで、横津岳を構成する安山岩の溶岩(鈴木ほか, 1969)と、これらの下位の峠下火山碎屑岩類(三谷ほか, 1966)から成っている。横津岳山頂付近は、溶岩流堆積面の保存が良い。

山麓部では、段丘との間(標高100~50m)に緩斜面が発達している。この緩斜面は、崖錐及び扇状地として記載されている(三谷ほか, 1966; 鈴木ほか, 1969)が峠下火山碎屑岩類の露出地域にも分布するので、一部には他の营力によって形成された緩斜面も含まれていると思われる。

段丘は標高50~15mに発達している。瀬川(1974・1975)によれば、函館付近の平坦面は、鳴川面(標高460~360m)、鰐川面(標高200m±)、赤川段丘(鈴蘭丘面: 標高170~100m、中野町面: 標高100~90m)、日吉町段丘(標高60~50m)、函館段丘(標高17~8m)、沖積段丘(標高5m±)に区分され、日吉町段丘は関東地方の下末吉段丘に、鈴蘭丘面は多摩丘陵のT₁面に、中野町面は同T₂面に対比されている。一般に、段丘面は降下火山灰起源のローム層に覆われる。

沖積低地は標高20~5m、函館から上磯、大野へかけて発達し、函館平野の大部分を占める。沖積層は砂礫・砂・粘土及び泥炭で構成され、その基底は、平野南部では海水準下40m±、南東部から中央部にかけては20m±、西部で10m±、北部で0~10m±と推定されている(三谷ほか, 1966)。

以上の地形を覆って、黒ボク土中に2~3枚の降下火山灰が認められる。

本遺跡は沖積低地寄りの、標高約17~14mの段丘面上に立地する。黒ボク土の下位はローム層及び

II 遺跡の概要

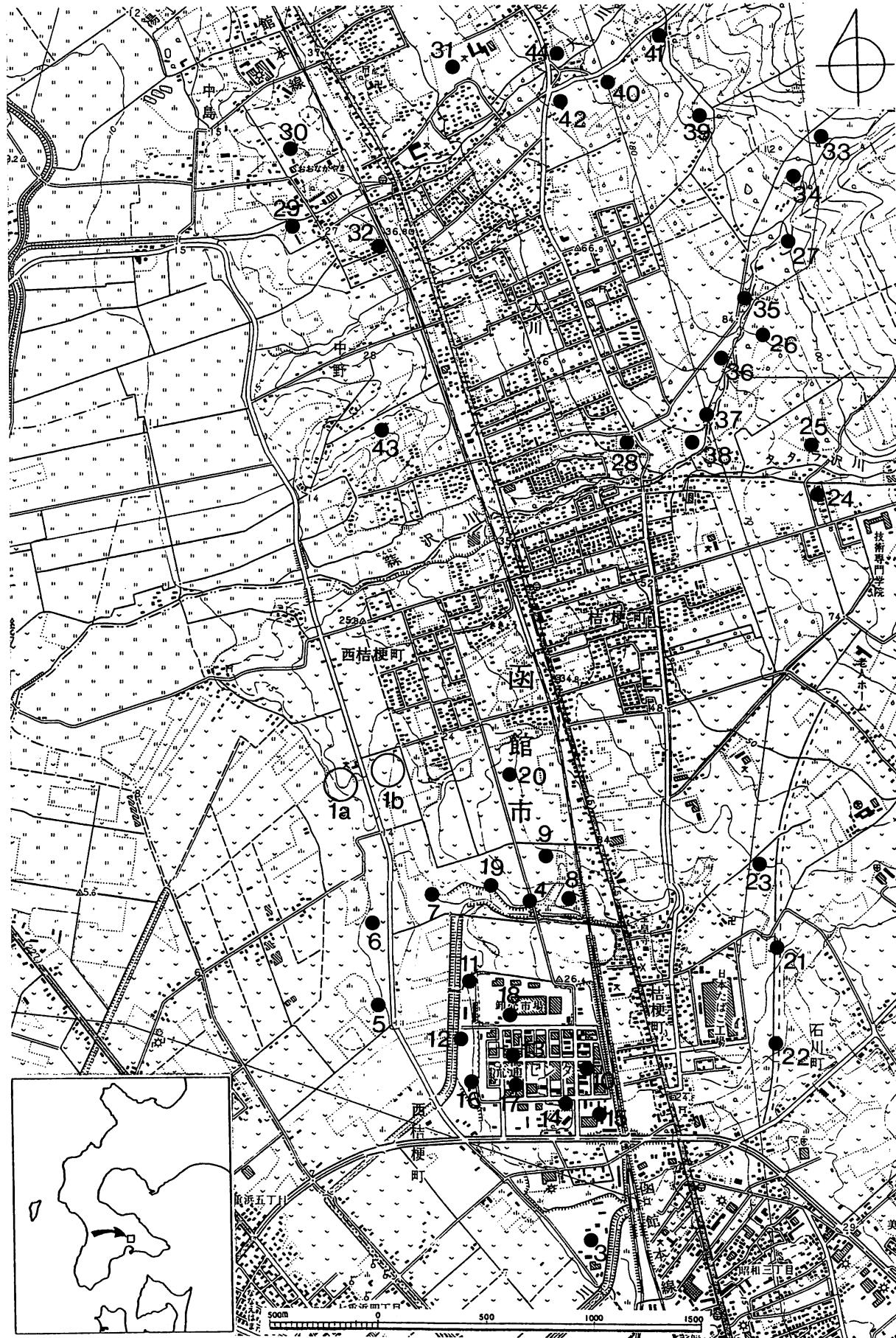
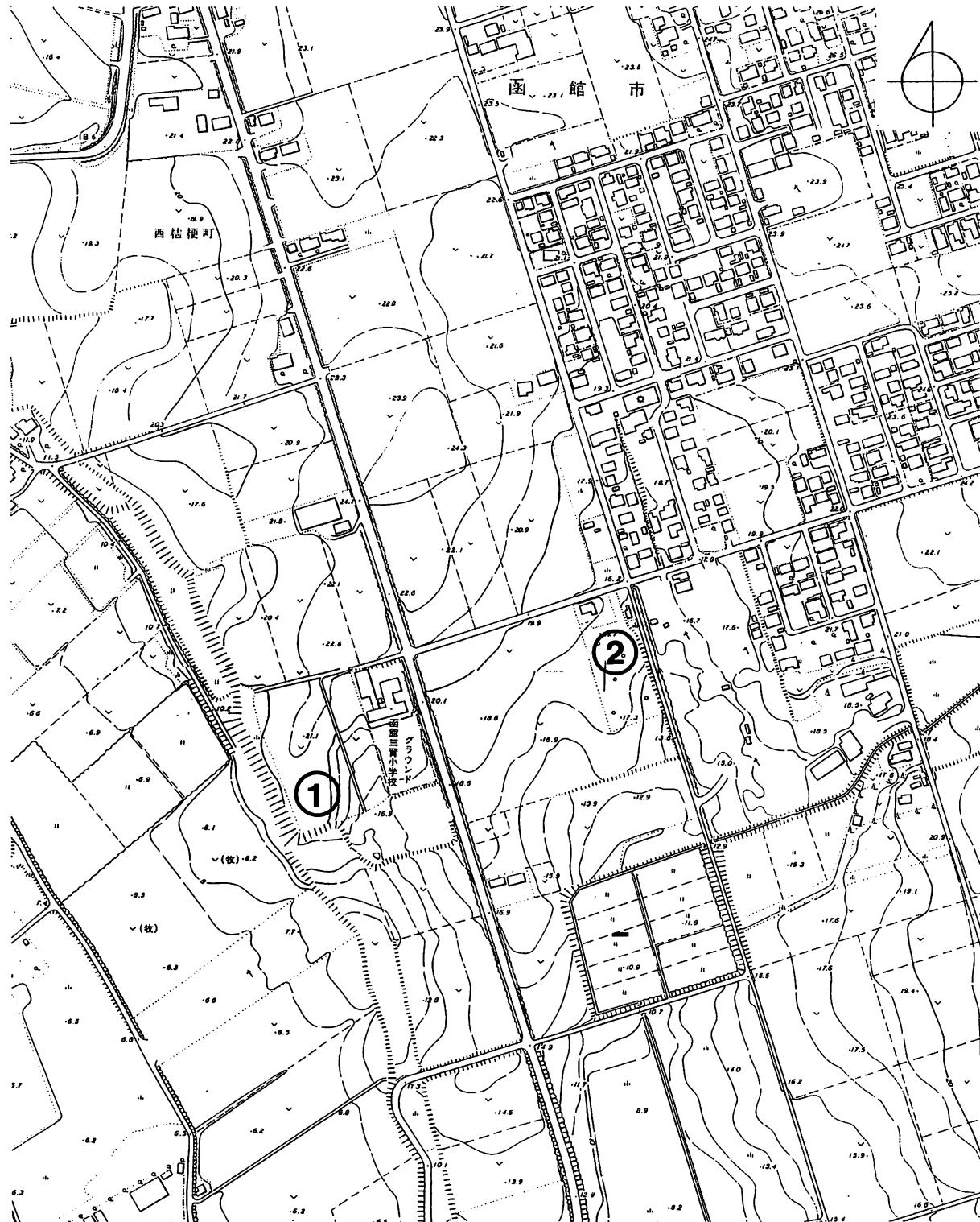


図 II-1 遺跡の位置と周辺の遺跡（1a 平成 9 年度・1b 平成 7 年度）

礫である。礫の多くは、めのう質頁岩や珪質頁岩である。径4cm~15cmの亜円~円礫で、偏平なものが多い。ローム層以下の層厚は不明である。

本遺跡が立地している段丘は、瀬川(1974・1975)の日吉町段丘に対比される。瀬川(1975)は、西桔梗高位面と西桔梗低位面に二分した。本遺跡が立地している段丘が、このどちらに対比されるのかは不明である。



図II-2 周辺の地形 (①平成9年度・②平成7年度)

表II-1 周辺の遺跡一覧

No.	名 称	搭載番号	所 在 地	時 代
1a	西桔梗1遺跡	B-01-109	函館市西桔梗町702-5	縄文(早~中期) 縦縄文
1b	〃	〃	〃	縄文(早~晚期) 縦縄文
2	サイベ沢遺跡	B-01-82	函館市西桔梗町26-1、3、4、5、6、27、610-27~34-36、611-3、5、6、16	縄文(前・中期)
3	石川野遺跡	B-01-84	函館市西桔梗町555-8、9、558、559、563、567、574、575	縄文(早・前期)
4	サイベ沢B遺跡	B-01-85	函館市西桔梗町614、640-1、2	縄文(前・中期)
5	西桔梗N-1遺跡	B-01-86	函館市西桔梗町246-24他	縄文(早~中期)
6	西桔梗N-2遺跡	B-01-87	函館市西桔梗町503-1他	縄文(早~中期)
7	西桔梗N-3遺跡	B-01-88	函館市西桔梗町622他	縄文(早・晚期)
8	西桔梗N-5遺跡	B-01-89	函館市西桔梗町36-1	縄文(晚期)
9	西桔梗N-6遺跡	B-01-90	函館市西桔梗町39-3、41-1	縦縄文
10	西桔梗N-7遺跡	B-01-91	函館市西桔梗町10-3	室町中期
11	西桔梗A遺跡	B-01-92	函館市西桔梗町607-1、7、12他	縄文(早・前期)
12	西桔梗B1遺跡	B-01-93	函館市西桔梗町604-6、9、605-7、8、9	縄文(前・中期)
13	西桔梗B2遺跡	B-01-94	函館市西桔梗町598-4、6、9	縦縄文
14	西桔梗C遺跡	B-01-95	函館市西桔梗町597-1、2、5	縄文(中・後期)
15	西桔梗D遺跡	B-01-96	函館市西桔梗町10-2	縄文(中~晚期) 擦文
16	西桔梗E1遺跡	B-01-97	函館市西桔梗町598-13、14、18、19、35	縄文(早~中期・晚期)
17	西桔梗E2遺跡	B-01-98	函館市西桔梗町598-19	縄文(中期・晚期) 縦縄文
18	西桔梗F遺跡	B-01-99	函館市西桔梗町607-12	縄文(中期)
19	サイベ沢C遺跡	B-01-100	函館市西桔梗町615-1他	縦縄文
20	桔梗1遺跡	B-01-105	函館市桔梗町44の1	縄文(中期)
21	石川1遺跡	B-01-109	函館市桔梗町172-2、169-8	旧石器・縄文(早~晚期) 縦縄文
22	桔梗2遺跡	B-01-110	函館市桔梗町408-6	旧石器・縄文(早~晚期) 縦縄文
23	桔梗3遺跡	B-01-111	函館市桔梗町418-16、17、37	縄文(中期)
24	桔梗4遺跡	B-01-112	函館市桔梗町435-130、131、62	縄文(早期・晚期) 縦縄文
25	桔梗5遺跡	B-01-113	函館市桔梗町528-1	縄文
26	桔梗6遺跡	B-01-114	函館市桔梗町440-14、15、31	縄文
27	大中山6遺跡	B-08-3	亀田郡七飯町字大川415、416	縄文
28	大中山8遺跡	B-08-5	亀田郡七飯町字大川245	縄文(早期・晚期) 縦縄文
29	大中山9遺跡	B-08-6	亀田郡七飯町字中野203、204、205-1・3・4	縄文(晚期)
30	大中山10遺跡	B-08-7	亀田郡七飯町字中島12-1~3、13-12、14-1・2、15、16、17-1・7~11	縄文(晚期)
31	大中山5遺跡	B-08-10	亀田郡七飯町字大中山316	縦縄文
32	大中山4遺跡	B-08-11	亀田郡七飯町字中野8-1	縄文(晚期)
33	大中山11遺跡	B-08-22	亀田郡七飯町字大川421	縦縄文
34	大中山12遺跡	B-08-23	亀田郡七飯町字大川421	縄文(中期)
35	大中山13遺跡	B-08-24	亀田郡七飯町字大川403、405~407、409、410、413、418	縄文(早~後期) 縦縄文
36	大中山14遺跡	B-08-25	亀田郡七飯町字大川273、275	縄文・縦縄文
37	大中山15遺跡	B-08-26	亀田郡七飯町字大川272、273、275	縄文
38	大中山16遺跡	B-08-27	亀田郡七飯町字大川269、271、275	縄文
39	大中山17遺跡	B-08-28	亀田郡七飯町字大川375	縦縄文
40	大中山18遺跡	B-08-29	亀田郡七飯町字大川363	縄文(晚期)
41	大中山19遺跡	B-08-30	亀田郡七飯町字大川355	縄文(中・後期)
42	大中山20遺跡	B-08-31	亀田郡七飯町字大川338	縄文(晚期)
43	大中山27遺跡	B-08-57	亀田郡七飯町字中野117、118~1~5、119-1~4	縦縄文
44	大中山3遺跡	B-08-1	亀田郡七飯町字大川343、346、347	縄文(晚期)

III 遺構と遺構出土の遺物

1 住居跡

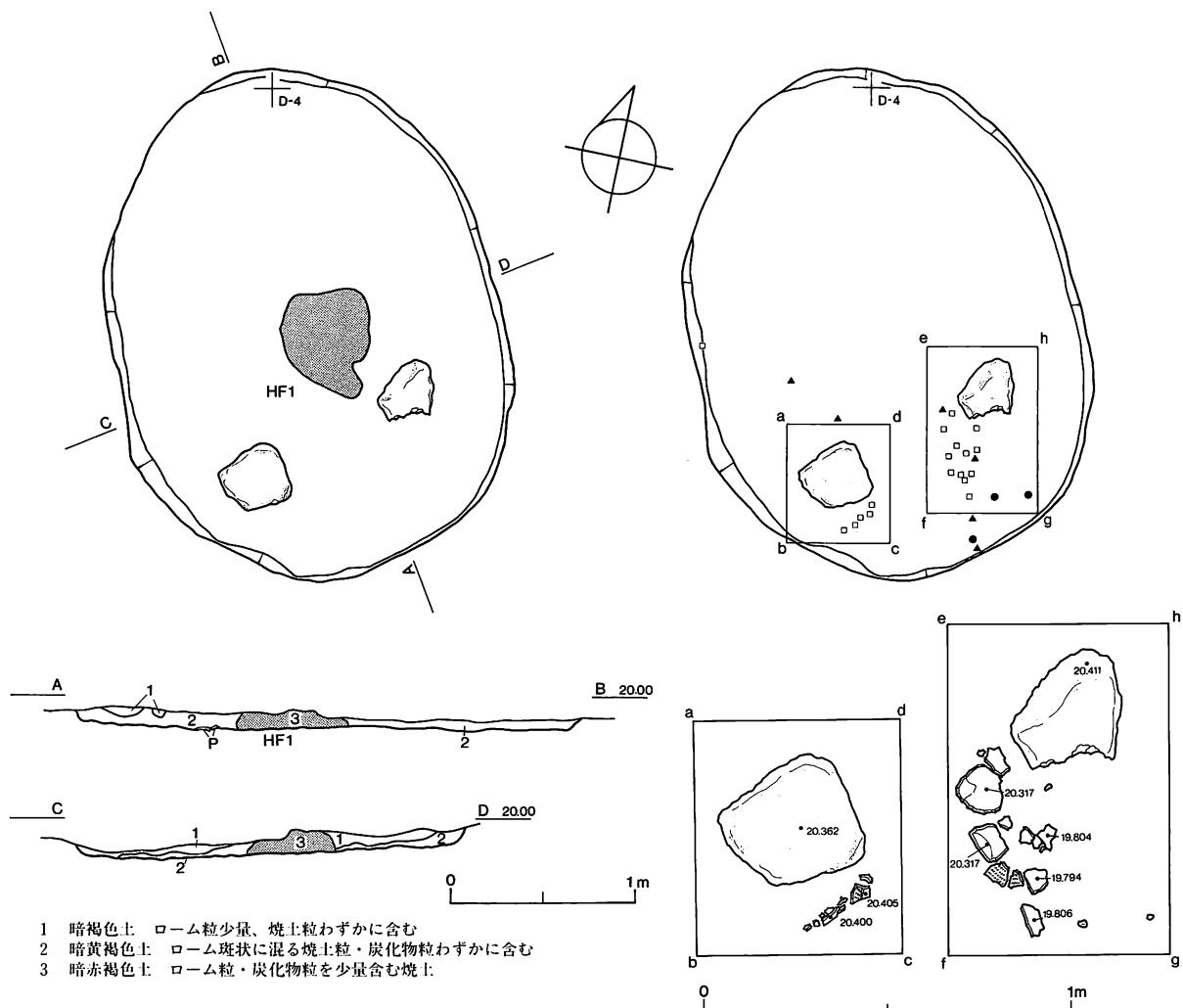
NH-1 (図III-1・2、図版4・13)

位置 D-3・4 規模 $2.78 \times 2.12 / 2.70 \times 1.96 / 0.12$

特徴 第V層上面で楕円形のプランを確認した。住居跡上部が耕作で削平されており、全体的に遺存状況は悪い。北西部は床面直上まで壊されている。残存している壁は全体的にやや緩やかに立ち上がる。覆土は2層からなる。床はほぼ平坦で、全体的に固く、よく締まっていた。炉は地床炉で中央よりやや南東に位置する。柱穴及び周溝は検出されなかった。

遺物 覆土からI群B類、II群B類土器が出土した。床面からII群B類、石皿、台石、剝片が出土

NH-1



図III-1 NH-1

III 遺構と遺構出土の遺物



図III-2 NH-1 出土遺物

した。住居跡の南側に遺物が多い傾向があり、石皿と台石の周辺で、土器がややまとまって出土している。
(広田良成)

1は頸部から外反し、口縁部はやや肥厚する。口縁部文様帶は口唇から下縁にかけて半截竹管状工具による刺突文がつき、間には2本一組の縄線が施される。文様帶の直下には斜行縄文が施され、体部には多軸絡条体の回転文が施される。2は胴部破片で、胎土には纖維が含まれる。3は底部で多軸絡条体の回転文が施されている。

(佐藤和雄)

4は石皿。すり面はよくすられており、すり面内にはたたき痕もみられる。また一側縁に打ち欠きによる落とし口が作り出されている。5は円盤状土製品。土器の底部を再利用している。

時期 床面出土の遺物からみて縄文時代前期後半II群B類土器の時期と考えられる。

(広田良成)

NH-2 (図III-3~5、図版5・6・14)

位置 M-5 規模 $(4.01) \times (2.78) / (3.94) \times (2.64) / 0.56$

特徴 B-Tm除去後に、III層上面の精査を行ったところ、焼土とその周辺に黒色土の落ち込みを確認した。焼土の精査を行ったところ、周辺から多量の炭化材が検出された。落ち込みの中心を通るように十字にトレーナーを設定し、V層まで掘り下げ壁と床を確認し、焼失住居であることがわかった。平面形は不整の長楕円形で、堀込みは浅い。北東側の壁は削平のため確認できなかった。壁は検出できた部分ではやや急角度に立ち上がる。床はほぼ平坦で、全体的に軟弱である。焼土は住居跡の中央で約2m×1mの範囲で分布し、床から約10cm浮いた状態で検出された。厚さは10~15cmで分厚く、全体的によく焼けている。焼土直下から多量の炭化材が出土している。柱状の炭化材が多く、外側から内側に向かって倒れている状況と考えられる。炭化材は実測後、樹種同定のため番号をつけサンプルを取り上げた。炉は土器埋設炉で、住居跡のほぼ中央に位置する。炉の焼土はよく焼けていた。柱穴は壁際に多く全部で12個検出された。HP-1、9がやや深いが、他は浅めである。また、NH-2は埋設土器1と重複しており、埋設土器1がNH-2を切っている。検出された炭化材による¹⁴C測定結果はB.P. 2610±30の数値が出ている。

遺物 覆土からII群B類、III群A類、V群土器、スクレイパー、剝片、礫が出土している。床面からV群土器、礫が出土している。

(広田良成)

1は底部と口縁部が欠失している。体部にはLR原体の斜行縄文が施されている。内面は丁寧に調整され部分的に横位の調整痕がつく。2は口唇断面が三角形に肥厚する。地文はLRの斜行縄文で、裏面は丁寧に研磨されている。3は条の細い縄文がつく。4は調整により地文が消されている。

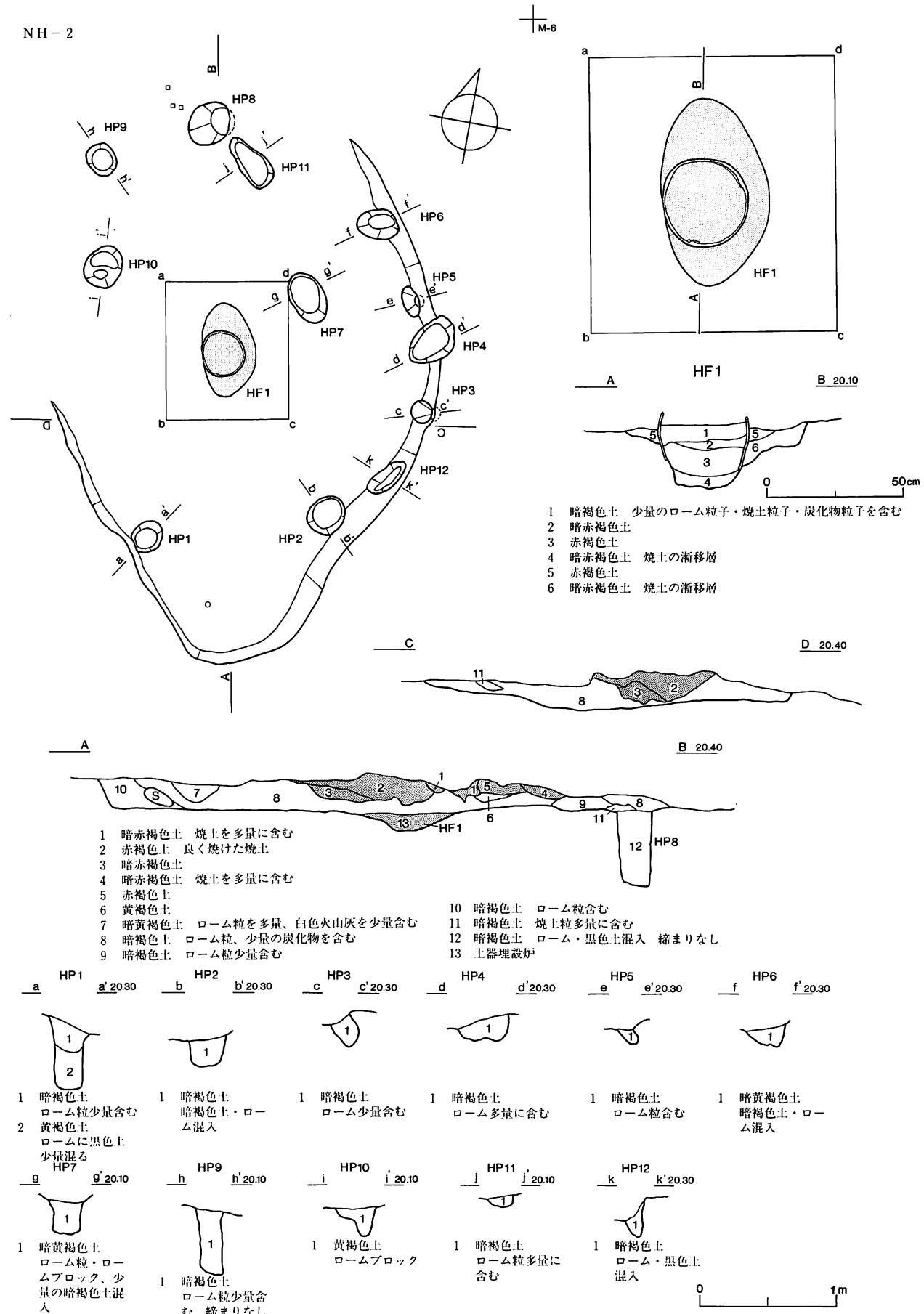
(佐藤和雄)

5はスクレイパー。縦長剝片を素材とし、腹面側の左側縁に刃部を作り出している。

時期 床面出土の遺物からみて縄文時代晩期V群土器の時期と考えられる。

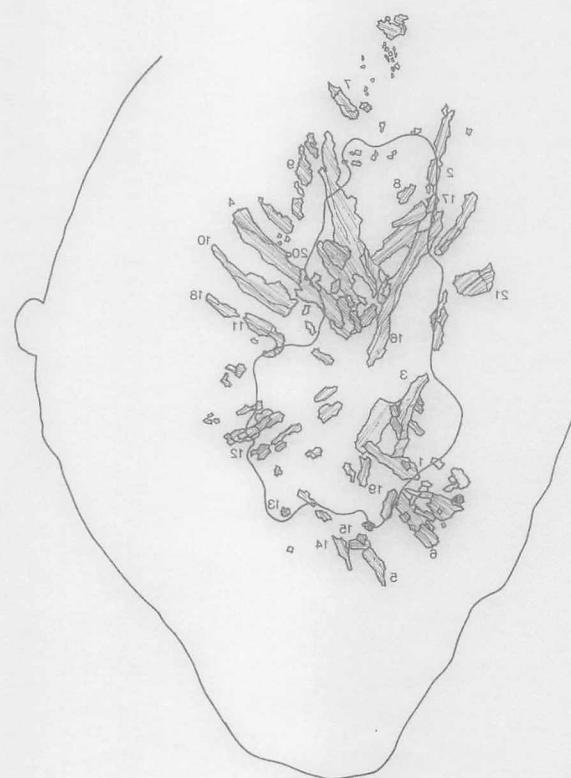
(広田良成)

III 遺構と遺構出土の遺物



図III-3 NH-2

a-M



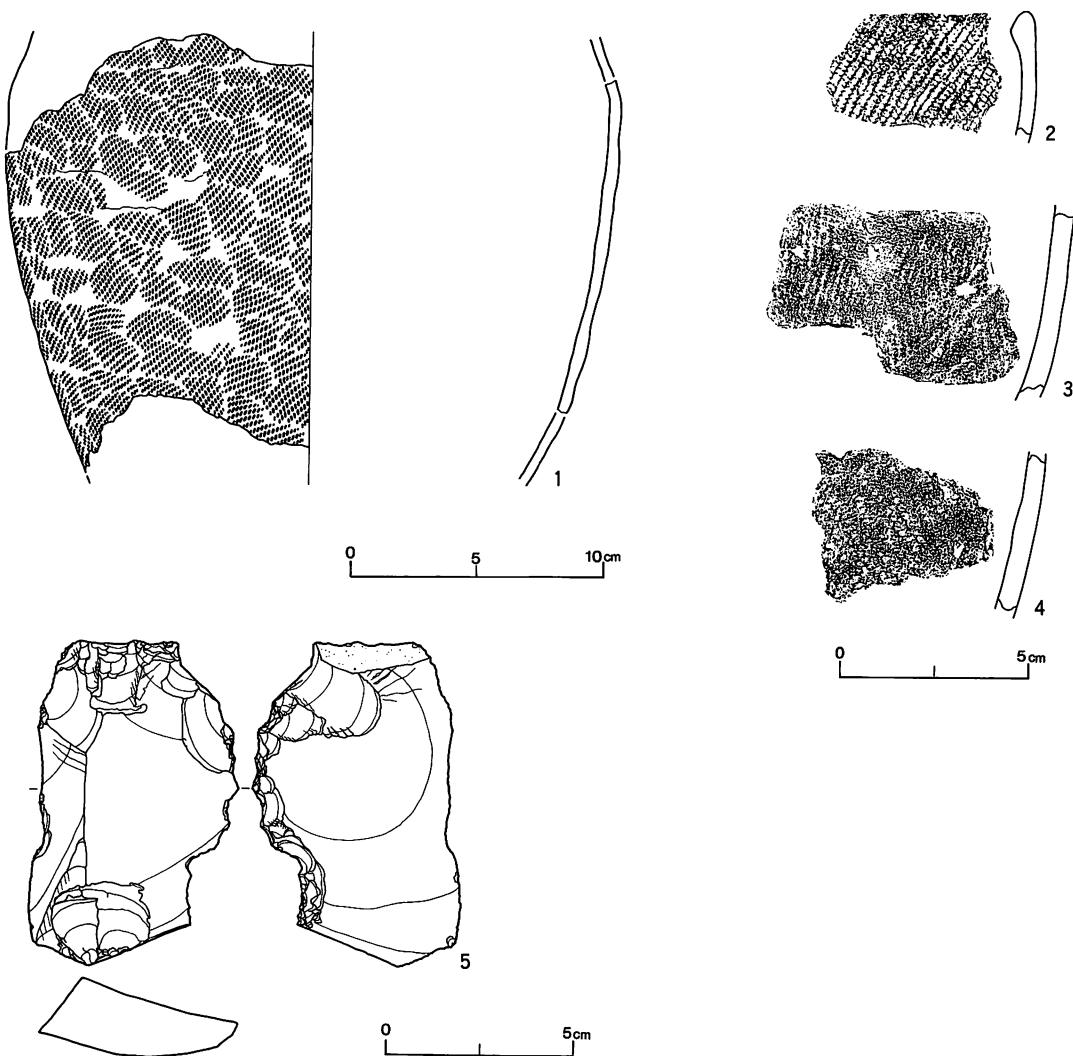
沖縄島出林小島 1-H-2-III図

I 調査の概要

— M-6 —



図III—4 NH—2 炭化材出土状況



図III-5 NH-2 出土遺物

NH-3 (図III-6、図版7)

位置 M-5・6 規模 不明

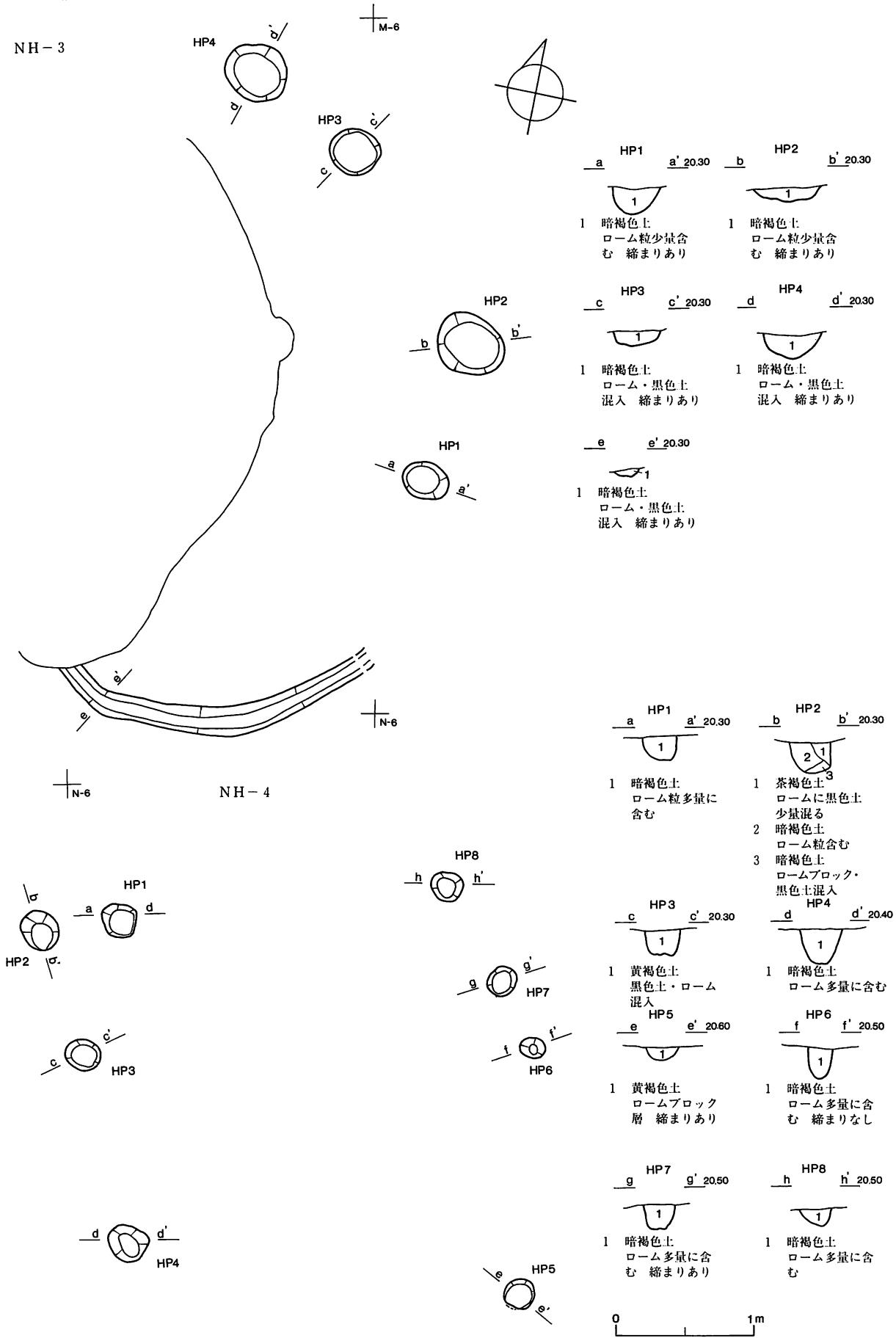
特徴 NH-2 の調査中に、V層上面で NH-2 に重複する柱穴と考えられる小ピットと、周溝の一部と考えられる溝が検出された。本遺構は床面まで耕作により削平されているため規模等は不明であるが、4 個の柱穴と周溝の配置から住居跡と考えられる。残存している柱穴、周溝の堀込みはいずれも浅く、断面は皿状で、壁は緩やかに立ち上がる。

遺物 HP-4 の覆土からIII群A類土器が 1 点出土している。

時期 出土遺物からみて縄文時代中期前半III群A類の時期の可能性がある。

(広田良成)

III 遺構と遺構出土の遺物



図III-6 NH-3・4

NH-4 (図III-6、図版7)

位置 N-6 規模 不明

特徴 V層上面を精査中、N-6グリッドで小ピット群を検出した。ほぼ円形の配置から住居跡の柱穴と考えられるため、住居跡として扱う。床面まで削平されているため、規模等は不明である。確認された柱穴は8個で、深さは13~24cm程度である。

遺物 遺物は検出されなかった。

時期 不明。

(広田良成)

NH-5 (図III-1、図版8・14)

位置 M~O-11 規模 (8.28)×(4.56)/(8.18)×(4.48)/0.17

特徴 耕作土を除去後、暗褐色土の落ち込みを確認した。暗褐色土を掘り下げるV層を床面・壁とした遺構であることがわかった。遺構の大部分は耕作による削平で失われている。付属ピットは9個検出された。このうち主柱穴と認められるのはP-1~4・8・9の6個である。径32cm~50cm、深さ46cm~86cmでいずれも垂直である。柱穴の壁・底面には黄褐色粘土が張られている。柱跡は土層断面の痕跡からみて径約20cmで、断面形は先端が丸みをもつものが多い。

床面はV層を掘り込んで作られており、南側に向かって傾斜している。やや凹凸がある。壁は西側に僅かに残っているのみであるが床面との境は明瞭である。住居跡の南端は壁から推測される平面形や柱穴P-5・6の配列などからみて入口構造などの張出し部があった可能性がある。

炉跡は住居跡の南側に作られており、浅い掘り込みをもつ。焼土の厚さは約4cmである。

遺物 覆土からI群B類土器、スクレイパー、Rフレイク、剝片、礫が出土している。P-7の西側床面からIII群A類土器が出土している。1は胴部破片で地文はLR原体の羽状縞文である。内面は良く磨かれている。

(佐藤和雄)

2はスクレイパー。縦長剝片を素材とし、背面の両側縁に薄手の刃部を作り出している。3はRフレイク。腹面の左側縁に細かい細部調整を施す。4は石錘。石の長軸方向に2ヵ所打ち欠きを施す。

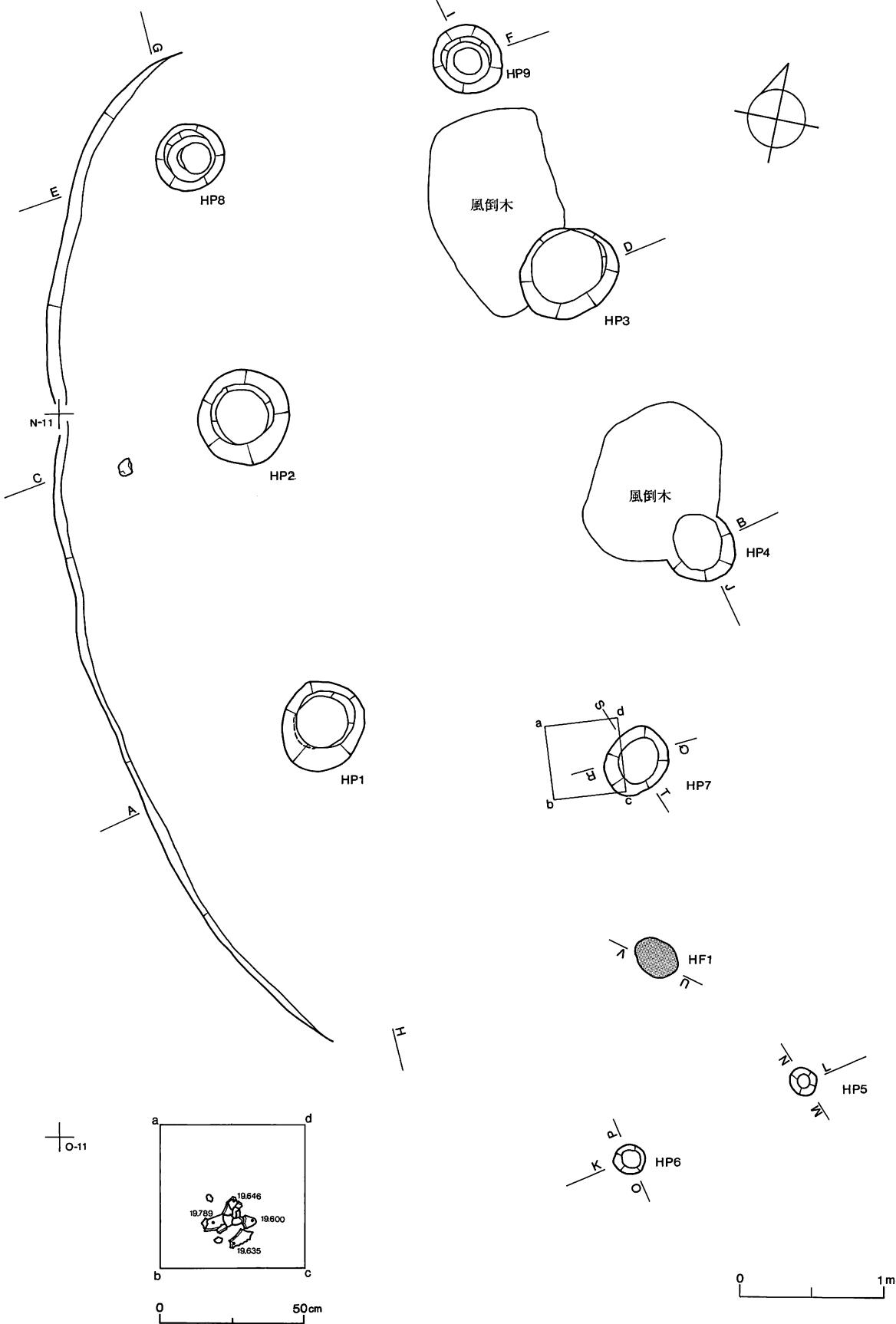
(広田良成)

時期 床面出土の遺物からみて縄文時代中期前半III群A類土器の時期と考えられる。

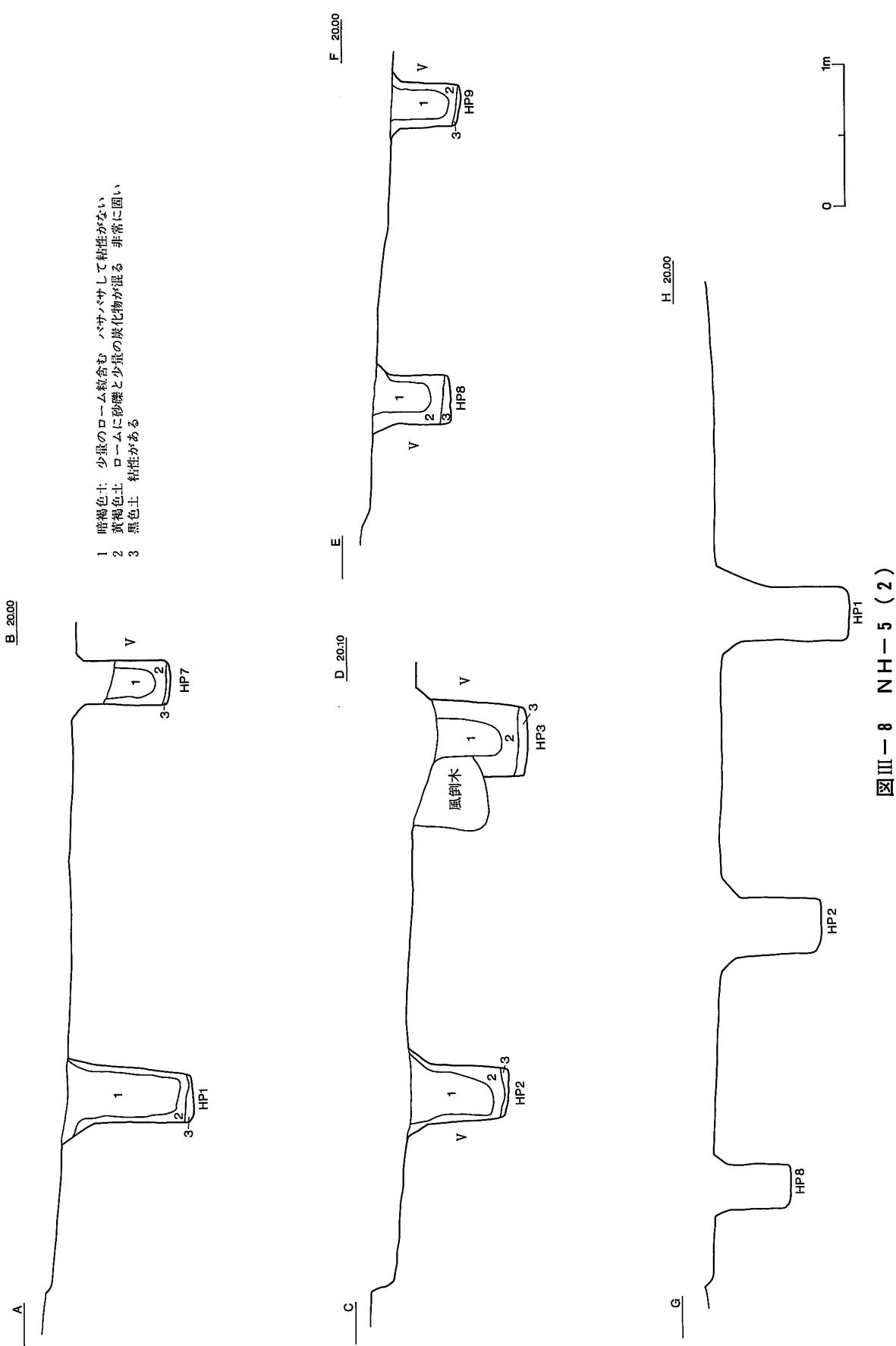
(佐藤和雄)

III 遺構と遺構出土の遺物

NH-5

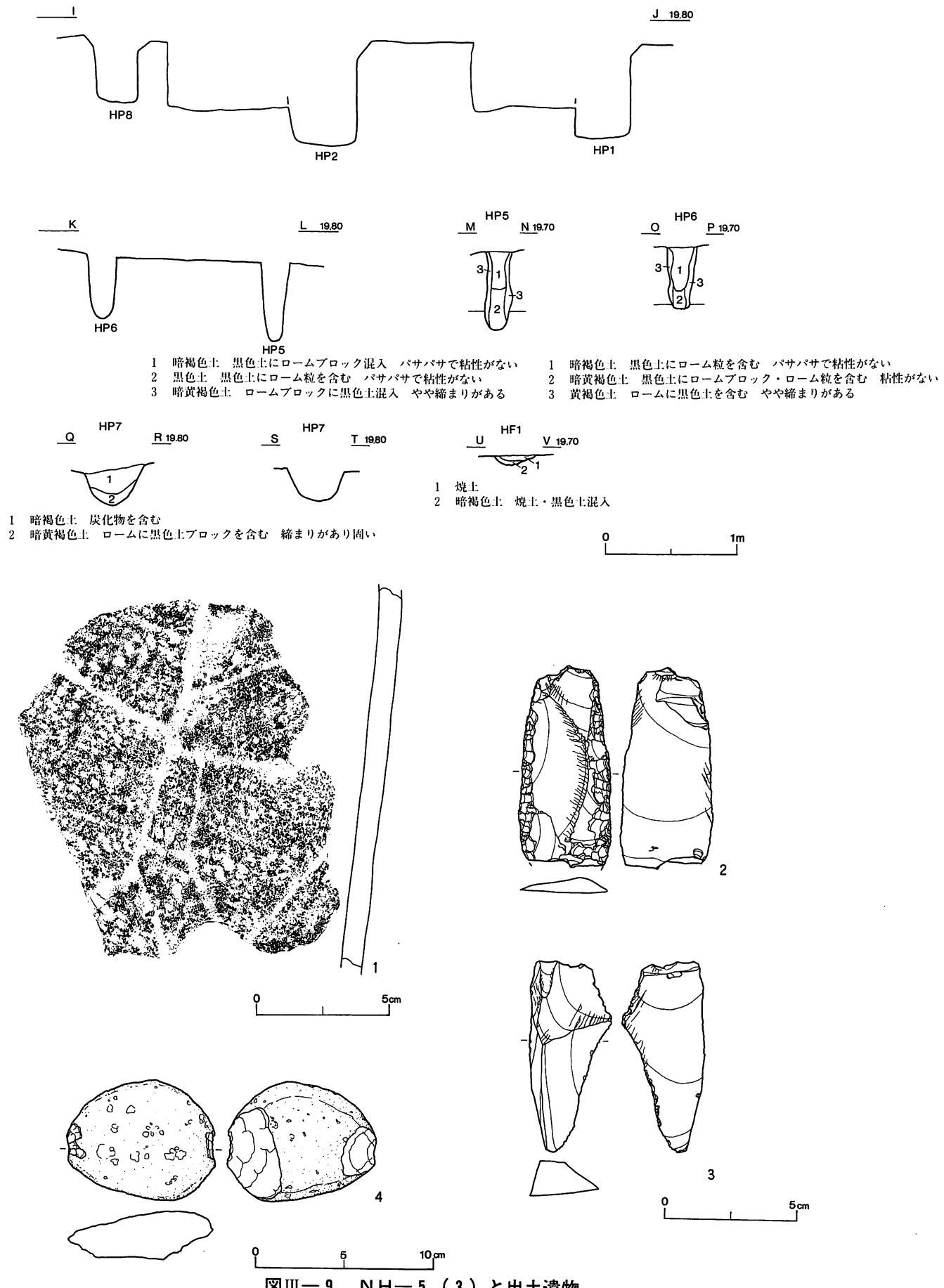


図III-7 NH-5 (1)



図III-8 NH-5 (2)

III 遺構と遺構出土の遺物



図III-9 NH-5 (3) と出土遺物

NH-6 (図III-10、図版9・15)

位置 D-1・2 規 模 $2.26 \times (1.34) / 2.04 \times (1.26) / 0.22$

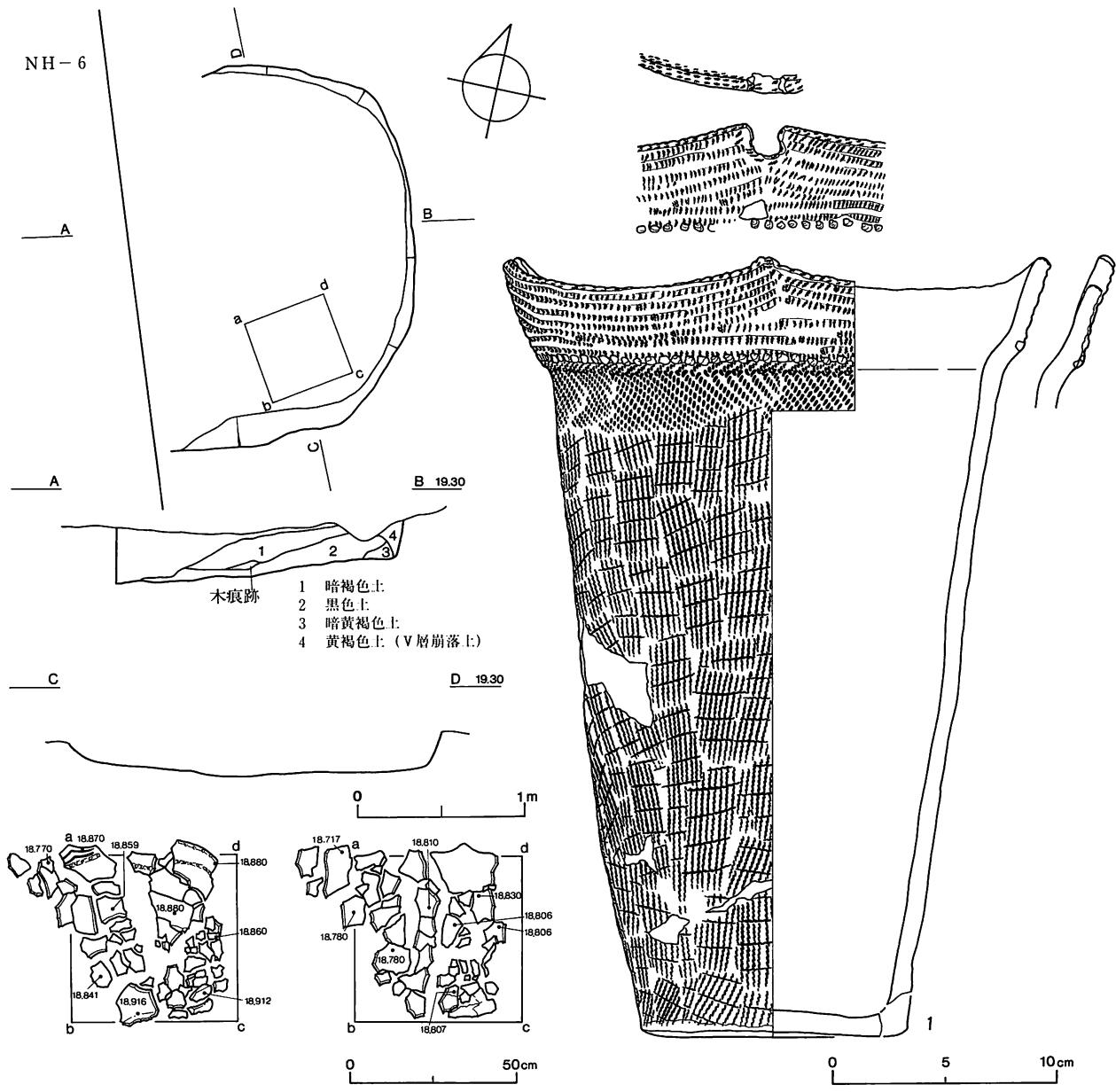
特 徴 耕作土を除去後、暗褐色土の落ち込みを確認した。住居跡の西側は調査区の境界部分で、掘削により消失している。

床面はV層を掘り込んで作られており、凹凸がある。中央部がやや凹み、西側に向かって緩く傾斜している。壁は床面との境は明瞭で、立上りは急である。西側は掘削されているため不明である。

炉跡は確認されていない。

遺 物 南東側の床面からII群B類土器が一個体つぶれた状態で出土している。1は口縁が外反する大型の筒型土器。4個の山形隆起部をもち、そのうち一対は頂部が二分する。口縁部文様体は円形刺突文で区画され、絡条体圧痕文が施される。頸部は結束第一種羽状縄文が施され、体部には1段R原体の撚糸文が施される。内面は良く磨かれている。

時 期 床面出土の遺物からみて縄文時代前期後半II群B類土器の時期と考えられる。(佐藤和雄)



図III-10 NH-6と出土遺物

2 土壙墓

NP-3 (図III-11、図版9・16)

位 置 M・N-8 規 模 $1.22 \times 1.04 / 0.90 \times 0.70 / 0.30$

特 徴 耕作土を除去後、黒色土の落ち込みを確認した。平面形は不整橍円形である。壙底は中央部がやや低くなっている。立上りは急である。覆土は埋め戻しである。

遺 物 覆土下部から副葬品と考えられる靴形石器、スクレイパー、磨製石斧、黒曜石製の剝片が確認された。覆土中部からは石皿が出土している。

(佐藤和雄)

1は靴形石器。やや厚手で表面、裏面共に丁寧な細部調整が施されている。柄の部分を欠失していると考えられる。2は両面調整のスクレイパーで、下端の刃部を丁寧な細部調整で作り出している。3は蛇紋岩製の磨製石斧。全面よく磨かれ、右側面に擦切痕を残す。両面にわずかに黒褐色の付着物がみられる。4は黒曜石製のフレイク。5は石皿で、扁平な礫を素材とする。一部欠失しているが、両面のほぼ全面にすり面が形成されている。

(広田良成)

時 期 出土遺物からみて縄繩文時代の時期と考えられる。

(佐藤和雄)

3 土 壙

NP-1 (図III-12、図版15)

位 置 C-5 規 模 $1.30 \times 1.02 / 1.14 \times 0.86 / 0.38$

特 徴 調査区北西部のV層上面で黒褐色土の落ち込みを検出した。平面形は隅丸の長方形。壙口と壙底はほぼ同じ大きさで壁はほぼ垂直に立ち上がる。壙底は平坦である。

遺 物 覆土からII群A類土器が3点出土した。

(広田良成)

1と2は同一個体である。1は横走する3本の縄線文と菱形を構成すると思われる2本単位の縄線文が施される。菱形内の上部にはボタン状の貼付文がつき、その上に渦巻文が施される。2は横走する縄線文の下に斜位の刻み目がつく。桔梗野式に相当する。

(佐藤和雄)

時 期 出土遺物から縄文時代前期前半II群A類土器の時期と考えられる。

(広田良成)

NP-2 (図III-12)

位 置 F-7 規 模 $1.18 \times 0.80 / 0.84 \times 0.56 / 0.42$

特 徴 耕作土を除去後、黒色土の落ち込みを確認した。平面形は橍円形である。断面形は椀状で壙底と壁との境は不明瞭である。覆土は流れ込みである。

遺 物 覆土から剝片が1点出土した。

時 期 不明。

(佐藤和雄)

NP-4 (図III-12・13、図版10・15)

位 置 O・P-6・7 規 模 $2.64 \times 2.56 / 2.32 \times 2.24 / 2.58$

特 徴 調査区南西部、標高20.6mのやや小高い平坦面に位置する。V層上面で黒褐色土の落ち込みを検出した。平面形は不整の円形で壙底は壙口より広いフラスコ状ピットである。壁は全体的にオーバーハンプするが、北～東側は特に強い。土層断面には壁の崩落とみられるロームブロック層の堆積が何枚かみられる。壙底は平坦で砂層まで掘込んでいる。本遺跡出土のピットの中では、最も大きなものである。

遺 物 覆土からII群A類土器、剝片、Rフレイク、たたき石、礫が出土した。 (広田良成)

1～3は同一個体である。地文は組紐の回転圧痕文である。胎土に小石と纖維を含む。桔梗野式に相当する。 (佐藤和雄)

4はRフレイク。縦長剝片の下部に細部調整を施している。5はたたき石。やや厚手の円礫を素材とし、表面、裏面、左側面に顕著なたたき痕を有する。

時 期 出土遺物からみて、縄文時代前期前半II群A類土器の時期と考えられる。

(広田良成)

N P - 5 (図III-14、図版10)

位 置 O-6・7 **規 模** $0.80 \times 0.72 / 1.58 \times 1.62 / 0.78$

特 徴 調査区南西部、標高20.6mのやや小高い平坦面に位置し、N P - 4 の北側約2mのところにある。V層上面で不整形の細長い暗褐色の落ち込みを検出した。Tピットの重複を想定し、長軸方向に断ち割ったところ、Tピットとフラスコ状ピットの重複であることが判明した。本遺構がT P - 22 を切っている。平面形は壙口、壙底部共に円形で、壙口から壙底部にかけて大きく広がるフラスコ状ピットである。壁はどの方向も強くオーバーハンプしている。壙底は平坦である。

遺 物 覆土からI群B類土器、剝片石器片、剝片が出土した。

時 期 出土遺物からみて縄文時代早期I群B類土器の時期の可能性がある。

(広田良成)

N P - 7 (図III-14、図版17)

位 置 M-10 **規 模** $1.00 \times 0.92 / 1.02 \times 1.06 / 0.58$

特 徴 フラスコ状ピットである。耕作土を除去後、黒色土の落ち込みを確認した。平面形は円形である。壙口部は工作により削平されている。壙底は西側にむかって傾斜している。立上りは急で壁との境は明瞭である。覆土は流れ込みである。

遺 物 覆土からIII群B類土器(1)・I群B X類土器(2～5)と剝片が出土している。1は口縁部が外反する。無文で内外面ともにナデ調整されている。2・5は2段R原体の縄文がつく。2の裏面には厚く炭化物が付着している。3・4は条間のあいた粗い縄文がつく。

時 期 覆土の遺物からみて縄文時代早期後半I群B類土器の時期と考えられる。

(佐藤和雄)

N P - 8 (図III-14)

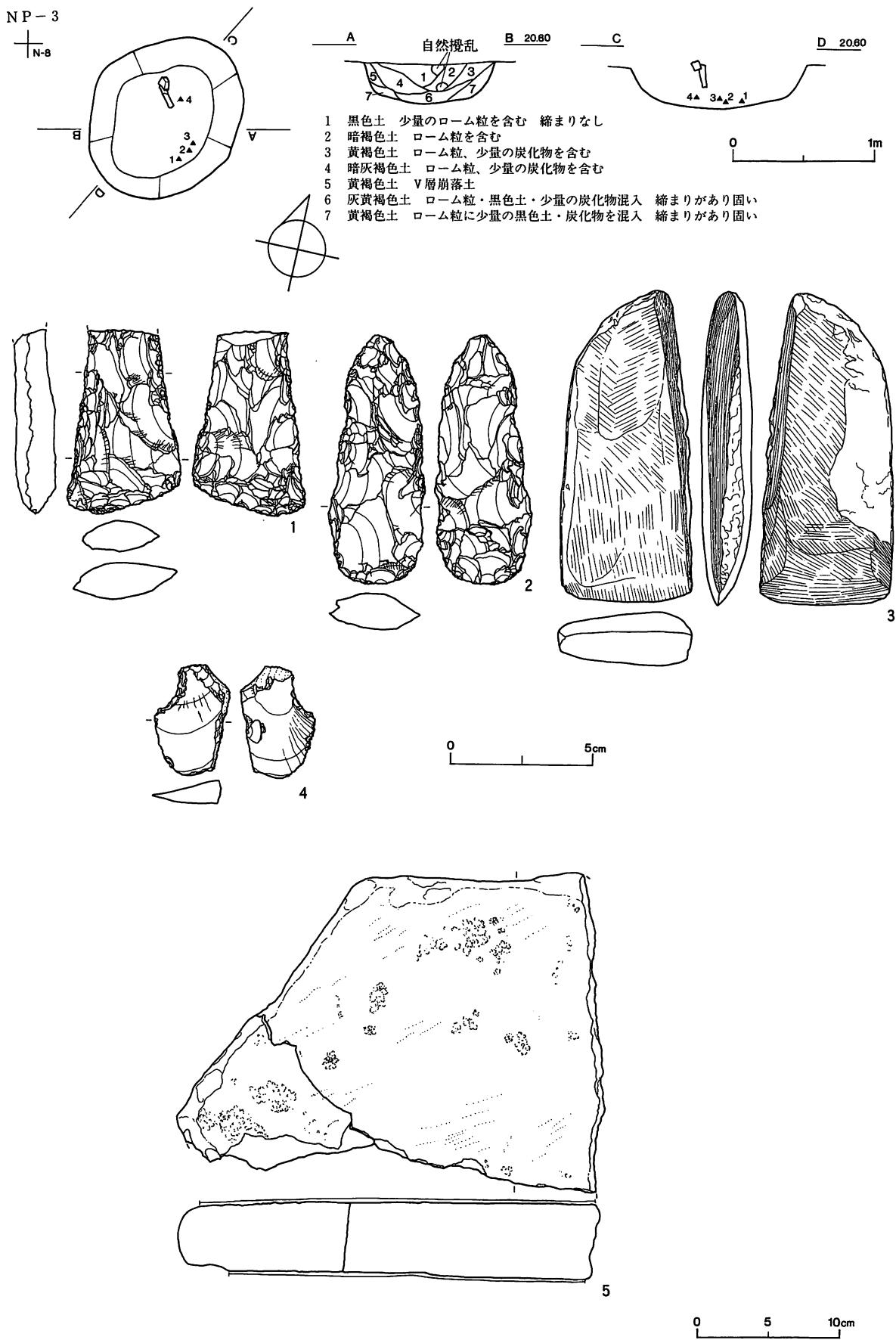
位 置 N-11 **規 模** $1.42 \times 1.38 / 1.14 \times 0.98 / 1.04$

特 徴 調査区南部の標高19.6mの緩斜面に位置する。N H - 5 の調査中に床面の焼土の下に黒褐色土の落ち込みを検出した。N H - 5 の調査終了後に半割したところ、フラスコ状ピットであることが判明した。平面形は不整の円形である。壁は中位でオーバーハンプし、壙底は東から西に向かってゆるやかに傾斜する。断面は丸底状を呈する。覆土には壁の崩落と考えられるロームブロックの堆積が壙底よりやや浮いた位置でみられる。

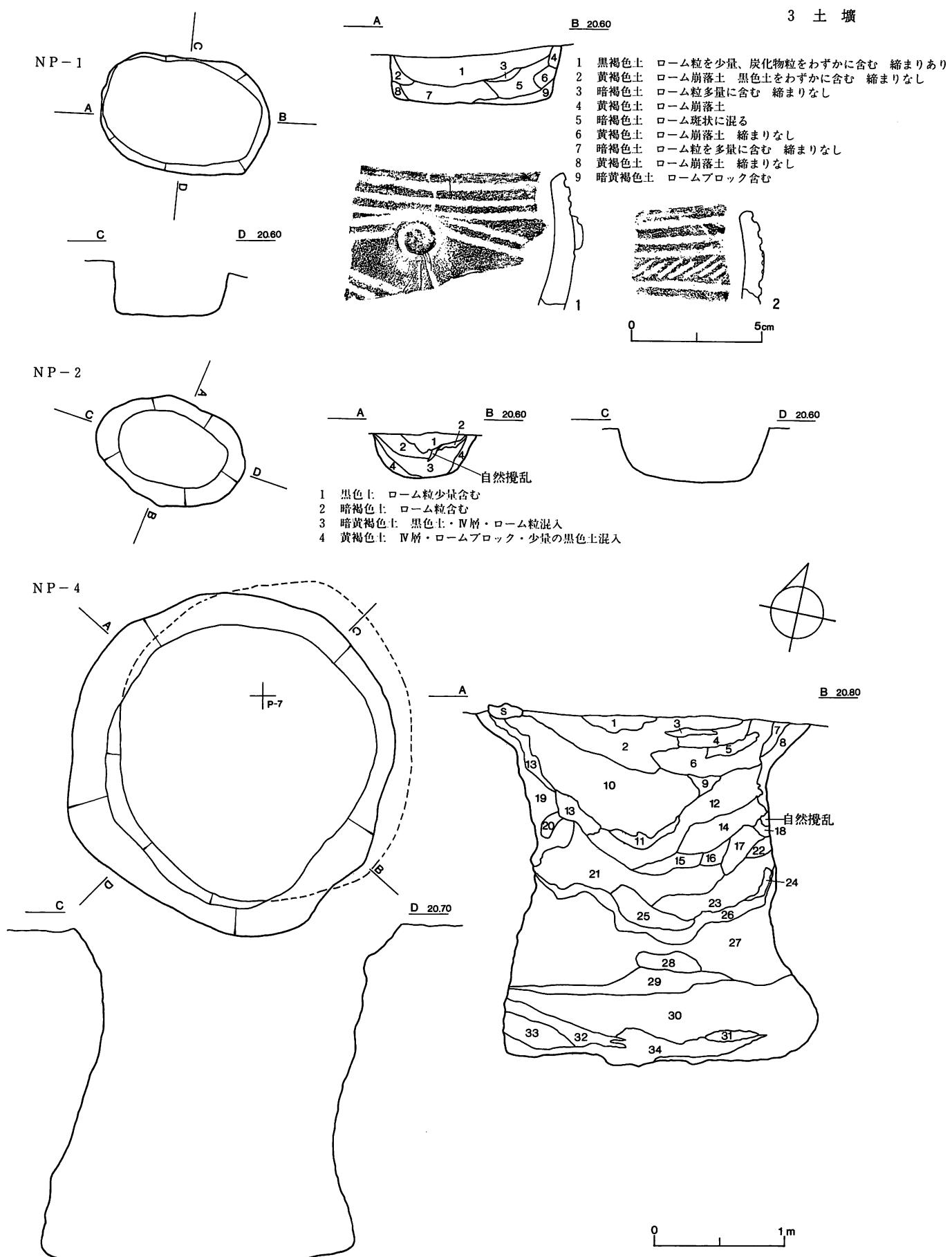
時 期 不明。

(広田良成)

III 遺構と遺構出土の遺物



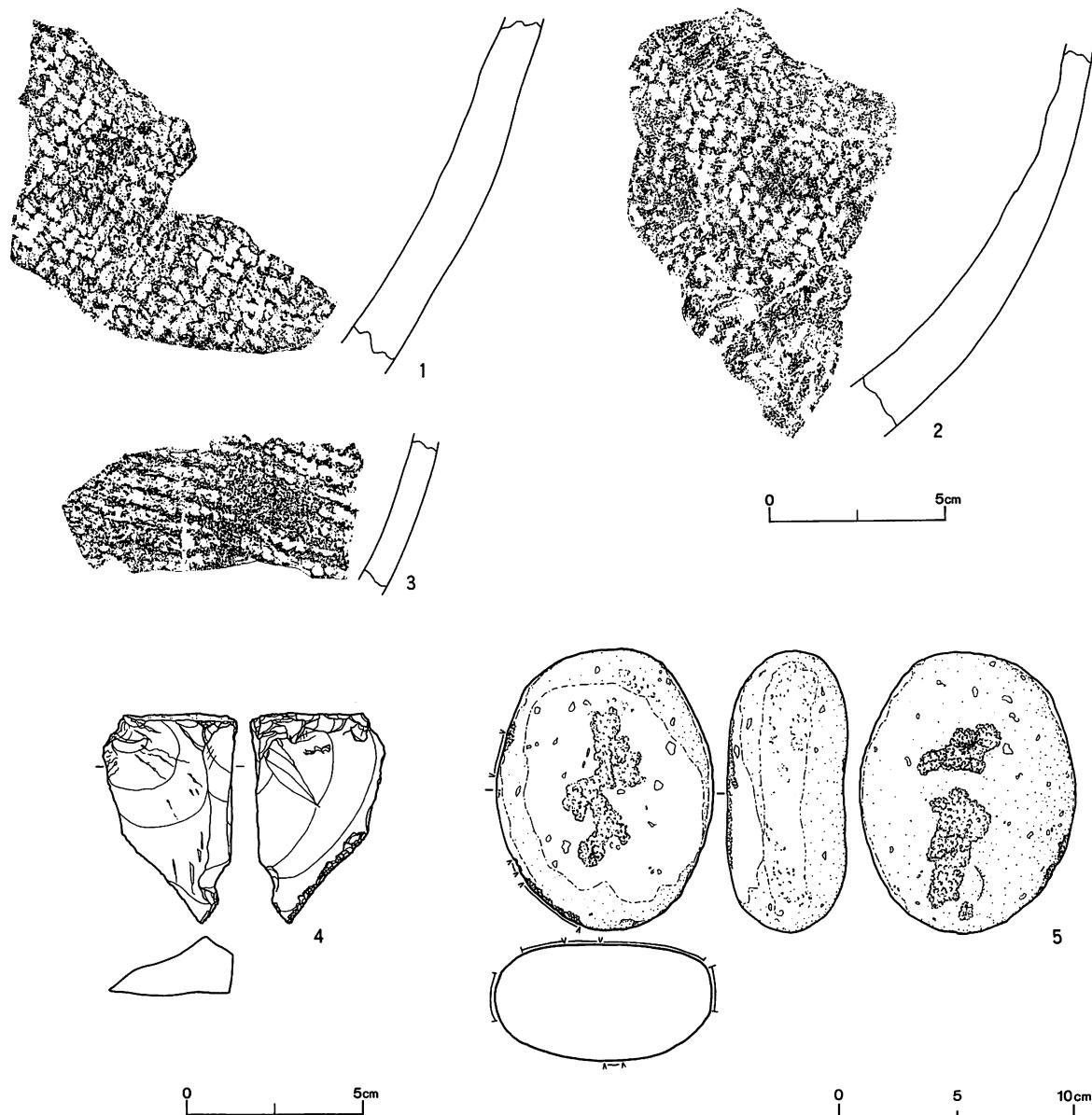
3 土 壤



図III-12 NP-1と出土遺物・NP-2・4

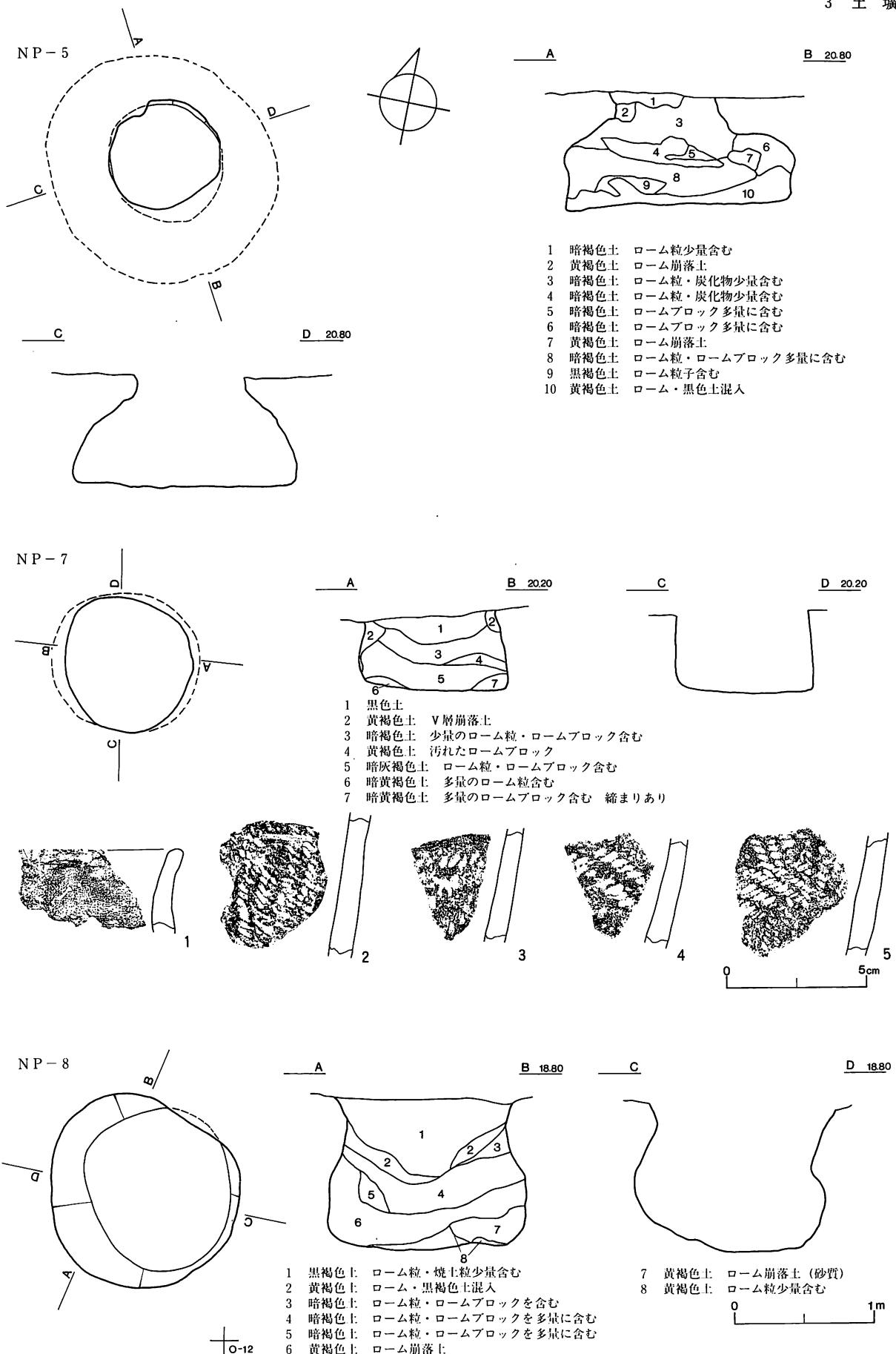
III 遺構と遺構出土の遺物

1 黄褐色土	ローム崩落土	18 黄褐色土	ローム崩落土
2 暗褐色土	ローム粒わずかに含む	19 黄褐色土	ローム崩落土
3 黄褐色土	ローム・黒色土混入	20 暗褐色土	ローム・黒色土混入
4 暗褐色土	ローム粒多量に含む	21 暗黄褐色土	黑色土・ローム混入
5 暗褐色土	ローム少量含む	22 黄褐色土	黑色土・ローム混入
6 暗褐色土	ローム少量含む	23 黄褐色土	黑色土・ローム混入
7 暗褐色土	ローム・黒色土混入	24 黄褐色土	ローム崩落土
8 黄褐色土	ローム崩落土	25 暗褐色土	ローム粒、少量の炭化物粒含む
9 暗褐色土	ローム粒少量含む	26 暗褐色土	ローム少量含む
10 黑褐色土	ロームわずかに含む	27 黄褐色土	ローム崩落土
11 暗褐色土	ローム粒少量含む	28 暗黄褐色土	ローム・黒色土混入
12 暗褐色土	ローム粒少量含む	29 暗黄褐色土	黑色土・ローム混入
13 暗褐色土	ローム斑状に混る	30 黄褐色土	ローム崩落土
14 暗褐色土	ローム粒含む	31 暗黄褐色土	ローム・黒色土混入
15 暗褐色土	ローム粒多量に含む	32 暗黄褐色土	黑色土・ローム混入
16 暗黄褐色土	ローム斑状に混る	33 黄褐色土	ローム崩落土
17 黄褐色土	ロームに黑色土少量含む	34 暗褐色土	ローム粒多量に含む



図III-13 NP-4 出土遺物

3 土 壤



図III-14 NP-5・NP-7と出土遺物・NP-8

4 Tピット

Tピットは全部で32基検出された。平面形は全て溝状で、杭穴等は確認されなかった。分布からA～Fの6列を設定した。確認面はいずれもV層上面である。

TP-1 (図III-15)

位 置 E-15 列 D・E

規 模 $2.12 \times 0.46 / 2.08 \times 0.24 / 0.90$ 長軸方向 N-51°-W

特 徴 調査区北東部、標高18.6～18.8mの斜面に位置し、長軸は傾斜に沿う。平面形は確認面、底面共に不整の溝状を呈する。壁は長軸、短軸共にほぼ垂直に立ち上がるが、長軸の東側の壁が弱くオーバーハングする。壙底は平坦である。

遺 物 覆土から礫が1点出土している。

TP-2 (図III-15)

位 置 F-14 列 D・E

規 模 $2.14 \times 0.50 / 1.46 \times 0.10 / 0.88$ 長軸方向 N-74°-W

特 徴 調査区北東部、標高18.8mの斜面に位置し、長軸は傾斜に沿う。平面形は確認面では中央付近でややふくらむ溝状、底面では不整の細い溝状を呈する。短軸断面は南壁が中部から上部にかけて崩落による広がりをみせ、長軸方向の壁は緩やかにオーバーハングする。底面は平坦だが、東側に緩やかに傾斜する。

TP-3 (図III-15)

位 置 G-13 列 D

規 模 $3.00 \times 0.60 / 3.04 \times 0.10 / 1.00$ 長軸方向 N-70°-W

特 徴 調査区東部、標高19.0mの斜面に位置し、長軸は傾斜に沿う。平面形は確認面では幅の広い、底面では幅の狭い溝状を呈する。短軸方向の壁はゆるやかに立ち上がり、断面はV字状を呈する。長軸方向の壁は東側が大きくふくらむ。底面は中央付近がやや低くなるが、他はほぼ平坦である。

遺 物 覆土から礫が3点出土している。

TP-4 (図III-16、図版17)

位 置 F・G-9 列 B

規 模 $3.04 \times 0.44 / 3.04 \times 0.16 / 0.82$ 長軸方向 N-57°-W

特 徴 調査区のほぼ中央、標高20.3mの斜面の肩に位置し、長軸は傾斜に沿う。平面形は確認面、底面共に幅の狭い溝状を呈する。壁は短軸、長軸方向共にほぼ垂直に立ち上がりほとんど崩落していないと考えられるが、短軸南西壁の中位で少しふくらむ。底面は平坦だが、東側に緩やかに傾斜する。B列の中ではTP-16に次いで長軸が長い。

(広田良成)

遺 物 覆土からI群B類土器、剝片、礫が出土している。1は結束羽状縄文がつく。内面は良く磨かれている。

(佐藤和雄)

TP-5 (図III-16)

位 置 D-13・14 列 C

規 模 $1.10 \times 0.48 / 1.16 \times 0.12 / 0.94$ 長軸方向 N-73°-W

特 徴 調査区北東部、標高19.3mの斜面に位置し、長軸は傾斜に沿う。平面形は確認面、底面共に不整の溝状を呈する。長軸方向の壁は弱くオーバーハングするが、短軸方向はほぼ垂直に立ち上がる。底面はほぼ平坦である。

TP-6 (図III-16)

位置 F-12・13 列 C

規模 $1.08 \times 0.42 / 1.14 \times 0.14 / 1.00$ 長軸方向 N-61°-W

特徴 調査区北東部、標高19.4mの斜面に位置し、長軸は傾斜に沿う。平面形は確認面、底面共に不整の溝状を呈する。壁の崩落は少ないが、長軸方向の西壁は多少凹凸がみられる。底面は中央付近がわずかに傾斜し、西側が少し高くなっている。

TP-7 (図III-17)

位置 G-11 列 C

規模 $1.18 \times 0.32 / 1.10 \times 0.18 / 0.98$ 長軸方向 N-64°-W

特徴 調査区中央部、標高19.6mの斜面に位置し、長軸は傾斜に沿う。北西約4mにTP-10がある。平面形は確認面、底面共に不整の溝状を呈する。長軸方向の壁は、西壁がほぼ垂直に立ち上がり、東壁は底面付近でゆるやかになる。短軸方向は崩落のため中位でややふくらむ。底面はほぼ平坦である。

遺物 覆土から剝片が1点出土している。

TP-8 (図III-17)

位置 H-13・14 列 E

規模 $3.30 \times 0.74 / 3.56 \times 0.22 / 0.98$ 長軸方向 N-84°-W

特徴 調査区東部、標高18.6~18.8mの斜面に位置し、長軸は傾斜に沿う。平面形は確認面では北側中央がややふくらむ溝状、底面は整った細い溝状を呈する。短軸方向の壁の崩落は少なく、立ち上がりは垂直に近いが、長軸方向の壁はオーバーハングする。底面はほぼ平坦だが、東側に少し傾斜する。今回確認したTピットでは最大の規模である。

TP-9 (図III-17・18、図版17)

位置 E・F-10 列 B

規模 $2.16 \times 0.32 / 2.12 \times 0.12 / 1.06$ 長軸方向 N-65°-W

特徴 調査区中央部、標高20.1mの斜面に位置し、長軸は傾斜に沿う。本Tピットの南西約1mにTP-11がある。平面形は確認面、底面共に東側でふくらむ。短軸方向の壁は崩落のため中位でふくらみ、長軸方向は東壁が弱くオーバーハングする。底面は中央付近で少し低くなる。 (広田良成)

遺物 覆土からI群B x類土器が出土している。1・2ともに条の不明瞭な縄文が施されている。

(佐藤和雄)

TP-10 (図III-18、図版17)

位置 H-11・12 列 D

規模 $1.84 \times 0.74 / 1.80 \times 0.14 / 0.82$ 長軸方向 N-69°-W

特徴 調査区中央部、標高19.5mの斜面に位置し、長軸は傾斜に沿う。南東約4mにTP-7がある。平面形は確認面では南西方向がややふくらむ溝状、底面では不整の溝状を呈する。短軸方向の壁は崩落により、両側共に中位から大きく広がる。長軸方向は東壁が底面付近で強くオーバーハングする。底面は平坦だが、東側に少し傾斜する。 (広田良成)

遺物 覆土からI群B x類土器が出土している。1は内外面に縄文が施されている。原体は1段Rの2本の縄を合わせて撲ったものである。内面は指頭による調整痕がつく。胎土には小砂利と纖維が含まれている。

(佐藤和雄)

III 遺構と遺構出土の遺物

TP-11 (図III-18)

位 置 E-10 列 B

規 模 $1.84 \times 0.42 / 1.62 \times 0.10 / 0.88$ 長軸方向 N-46°-W

特 徴 調査区中央部、標高20.1mの斜面に位置し、長軸は傾斜に対して斜交する。本TPピットの北東約1mにTP-9がある。平面形は確認面では整った溝状、底面では不整の溝状を呈する。短軸方向の壁は、南西壁が中位から大きく広がるが、他はほぼ垂直である。長軸方向は東壁がわずかにオーバーハングする。底面は凹凸がみられる。

TP-12 (図III-19、図版11、17)

位 置 G・H-6 列 B

規 模 $2.46 \times 0.56 / 2.34 \times 0.16 / 0.84$ 長軸方向 N-17°-W

特 徴 調査区中央部、標高20.1mの斜面の肩に位置し、長軸は等高線に沿う。平面形は確認面では不整の溝状、底面ではやや曲がった溝状を呈する。短軸方向の壁は両側共に上部で崩落しているが、長軸方向はほぼ垂直に立ち上がる。底面はほぼ平坦である。
(広田良成)

遺 物 覆土からI群Bx類土器(1)とIII群A類土器(2~4)が出土している。1は2段R原体の縄文がつく。地文は内面にも施されている。2は貼付帶上に縄による刻み目がつく。貼付帶直下には縄線文が施される。3・4は結束羽状縄文が施される。内面はよく磨かれている。
(佐藤和雄)

TP-13 (図III-19)

位 置 E-6・7 列 A

規 模 $1.88 \times 0.46 / 1.90 \times 0.46 / 0.86$ 長軸方向 N-42°-W

特 徴 調査区北西部、標高20.4mの斜面に位置し、長軸は等高線に沿う。東側に直交する形でTP-14がある。平面形は確認面では北西側が広がる不整の溝状、底面では整った溝状を呈する。短軸方向の壁は両側共に上部で広がり、長軸方向は南東壁で弱くオーバーハングする。底面はほぼ平坦である。

TP-14 (図III-20)

位 置 E-7 列 F

規 模 $2.74 \times 0.62 / 2.76 \times 0.10 / 0.82$ 長軸方向 N-47°-W

特 徴 調査区北西部、標高20.5mの斜面に位置し、長軸は傾斜に沿う。西側に直交する形でTP-13がある。平面形は確認面では不整の溝状で、底面では細い溝状を呈する。短軸方向の壁は崩落が著しく、長軸方向は北東壁が弱くオーバーハングする。底面は南西壁付近がわずかに高くなる。

TP-15 (図III-20、図版17)

位 置 I-7 列 F

規 模 $2.72 \times 0.40 / 2.50 \times 0.16 / 0.80$ 長軸方向 E-W

特 徴 調査区中央部、標高20.2mの斜面の肩に位置し、長軸は等高線に沿う。TP-15はND-1と重複し、ND-1を切っている。平面形は確認面、底面共に比較的整った溝状を呈する。壁は短軸、長軸共に崩落が少なくほぼ垂直に立ち上がるが、東壁上部が少しふくらむ。底面はほぼ平坦である。
(広田良成)

遺 物 覆土からI群Bx類土器(1)とV群B類土器(2)、剝片が出土している。1は内面に浅い条痕がつく。2はLRの斜行縄文が施されている。
(佐藤和雄)

TP-16 (図III-21、図版11・17)

位 置 H-4・5 列 B

規 模 $3.36 \times 0.88 / 3.26 \times 0.20 / 1.02$ 長軸方向 N-50°-W

特 徴 調査区西部、標高19.2mの斜面に位置し、長軸は等高線に沿う。平面形は確認面では幅の広い溝状で、底面では狭い溝状を呈する。短軸方向の壁はV字状に立ち上がり、長軸方向は両方向共にオーバーハンプする。底面は中央付近が少し低くなる。本遺構はB列で最も規模の大きいものである。

(広田良成)

遺 物 覆土からI群B類土器、剝片、礫が出土している。1は原体の施文方向を変えて地文がつけられている。2は上げ底気味の底部で、底端面にはR原体の圧痕がつく。

(佐藤和雄)

TP-17 (図III-21)

位 置 G-8 列 B

規 模 $2.48 \times 0.38 / 2.42 \times 0.10 / 0.90$ 長軸方向 N-52°-W

特 徴 調査区中央部、標高20.4mの平坦面に位置し、長軸は傾斜に沿う。南西約6mにTP-18がある。平面形は確認面、底面共に細い溝状を呈する。壁は短軸、長軸共に崩落が少なく、ほぼ垂直に立ち上がる。底面は北西部がやや低くなる。

TP-18 (図III-22、図版17)

位 置 G-8 列 B

規 模 $2.30 \times 0.52 / 2.44 \times 0.22 / 0.90$ 長軸方向 N-27°-W

特 徴 調査区中央部、標高20.4mの平坦面に位置し、長軸は傾斜に対して斜交する。平面形は確認面、底面共に長軸の両側が崩落し、不整の溝状を呈する。短軸方向の壁は中央付近ではほぼ垂直に立ち上がり、崩落はほとんどみられない。長軸方向は両側共にオーバーハンプする。底面はほぼ平坦である。

(広田良成)

遺 物 覆土からI群B類土器と剝片が出土している。1は1段Rの2本の縄を合わせて撚った原体の縄文がつく。

(佐藤和雄)

TP-19 (図III-22)

位 置 F-5 列 A

規 模 $1.82 \times 0.54 / 1.78 \times 0.22 / 0.84$ 長軸方向 N-28°-W

特 徴 調査区西部、標高20.1mの斜面の肩に位置し、長軸は等高線に沿う。平面形は確認面、底面共に幅の広い不整の溝状を呈する。短軸方向の壁はほぼ垂直に立ち上がる。長軸方向は南東壁がオーバーハンプする。底面は北西側が少し低くなる。

(広田良成)

遺 物 覆土からII群B類土器が出土している。1と2は同一個体である。1は底部にちかい部分である。地方はRLR原体の結束斜行縄文である。

(佐藤和雄)

TP-20 (図III-22)

位 置 L-6 列 C

規 模 $2.00 \times 0.70 / 1.88 \times 0.24 / 0.98$ 長軸方向 N-29°-W

特 徴 調査区南部、標高20.1mの斜面の肩に位置し、長軸は等高線に沿う。平面形は確認面で南東部のふくらむ幅の広い不整の溝状、底面では狭い溝状を呈する。短軸方向の壁は北東側が崩落のため中位から大きく広がる。長軸方向は南東壁がオーバーハンプする。底面は中央部がやや高くなる。

遺 物 覆土からI群B類土器が1点出土した。

TP-21 (図III-23)

位 置 N-7・8 列 D

規 模 $2.64 \times 0.60 / 2.58 \times 0.18 / 0.86$ 長軸方向 N-51°-W

特 徴 調査区南西部、標高20.5mの平坦面に位置する。北側約2mにNP-3がある。平面形は確

III 遺構と遺構出土の遺物

認面では長軸中央部でややふくらむ溝状、底面では幅の狭い溝状を呈する。短軸方向の壁は崩落のため中位から広がる。長軸方向はオーバーハングする。底面はほぼ平坦だが、多少凹凸がある。

遺 物 覆土から剝片、原石が出土している。

TP-22 (図III-23、図版10)

位 置 O-6・7 列 D

規 模 $(2.14) \times (0.46) / (2.16) \times (0.16) / 0.86$ 長軸方向 N-51°-W

特 徴 調査区南西部、標高20.5mの平坦面に位置する。本遺構はNP-5と重複しており、NP-5が本遺構を切っている。平面形は確認面では不整の溝状、底面では細い溝状を呈する。壁は短軸方向は垂直に近い立ち上がりをみせ、長軸方向は北西側がオーバーハングする。南東側はNP-5に壊されている。底面はほぼ平坦である。
(広田良成)

遺 物 覆土からIII群B類土器、石鏃が出土している。1は石鏃。無茎で基部が浅く湾入する。

TP-23 (図III-23、図版17)

位 置 K-8 列 C

規 模 $1.82 \times 0.46 / 1.56 \times 0.14 / 0.88$ 長軸方向 N-46°-W

特 徴 調査区中央部、標高20.3mの平坦面に位置する。平面形は確認面ではやや幅の広い溝状、底面では狭い不整の溝状を呈する。壁は短軸、長軸方向共に多少の凹凸があるが、ほぼ垂直に立ち上がる。底面は中央部がやや低くなる。

遺 物 覆土から剝片1点が出土している。

TP-24 (図III-24)

位 置 B-14 列 B

規 模 $2.54 \times 0.46 / 2.54 \times 0.18 / 0.84$ 長軸方向 N-52°-W

特 徴 調査区北東部、標高19.6mの斜面に位置し、長軸は傾斜に沿う。平面形は確認面では北西部がふくらんだ不整の溝状、底面では整った溝状を呈する。壁は短軸方向では、北東側が崩落のため中位から広がる。長軸方向は両側共に弱くオーバーハングする。底面は凹凸があり、緩やかに南東に傾斜する。

TP-25 (図III-24)

位 置 B・C-13 列 B

規 模 $2.54 \times 0.40 / 2.12 \times 0.10 / 0.84$ 長軸方向 N-59°-W

特 徴 調査区北東部、標高19.8mの斜面に位置し、長軸は傾斜に沿う。平面形は確認面、底面共に幅の細い不整の溝状を呈する。壁は短軸方向ではほぼ垂直に立ち上がるが、長軸方向は弱くオーバーハングする。底面はほぼ平坦である。

TP-26 (図III-24)

位 置 C-13 列 B

規 模 $3.16 \times 0.70 / 3.00 \times 0.16 / 1.02$ 長軸方向 N-62°-W

特 徴 調査区北東部、標高19.8mの斜面に位置し、長軸はほぼ傾斜に沿う。平面形は確認面、底面共に不整形だが、確認面では幅が広く、底面では狭い。短軸方向の壁は崩落により中位から広がる。長軸方向では東壁が弱くオーバーハングする。底面は東側に傾斜し、中央部がやや高くなる。

TP-27 (図III-25)

位 置 C-8・9 列 A

規 模 $1.66 \times 0.54 / 1.84 \times 0.24 / 1.06$ 長軸方向 N-56°-W

特徴 調査区北部、標高20.7mの平坦面に位置し、長軸は傾斜に沿う。平面形は確認面、底面共にやや幅の広い不整の溝状を呈する。短軸方向の両壁及び長軸方向の西壁は、ほぼ垂直に立ち上がり、長軸方向の東壁は強くオーバーハングする。底面は西側がやや高くなる。

TP-28 (図III-25)

位置 J-14・15 列 E

規模 $1.82 \times 0.44 / 1.72 \times 0.24 / 0.80$ 長軸方向 N-71°-W

特徴 調査区東部、標高18.8mの斜面に位置し、長軸は傾斜に沿う。平面形は確認面、底面共に幅の広い不整形で、東側がやや広がる。短軸方向の両壁及び長軸方向の東壁は、ほぼ垂直に立ち上がり、長軸方向の西側は比較的緩やかに立ち上がる。底面は東側がやや下がるが、ほぼ平坦である。

TP-29 (図III-25)

位置 J・K-9・10 列 D

規模 $3.08 \times 0.80 / 1.86 \times 0.14 / 1.00$ 長軸方向 N-33°-W

特徴 調査区中央部、標高20.1mの斜面の肩に位置し、長軸は等高線に沿う。平面形は確認面では幅の広い溝状、底面では幅の狭い不整の溝状を呈する。壁は短軸方向では中位から大きく広がり、長軸方向では弱くオーバーハングする。底面はほぼ平坦である。

遺物 覆土から剝片、礫が出土している。

TP-30 (図III-26)

位置 M-12 列 E

規模 $2.36 \times 0.52 / 2.38 \times 0.16 / 1.00$ 長軸方向 N-87°-E

特徴 調査区南部、標高19.4mの斜面に位置し、長軸は傾斜に沿う。平面形は確認面、底面共に不整の溝状を呈する。壁は短軸方向ではほぼ垂直に立ち上がり、長軸方向ではオーバーハングする。底面はほぼ平坦である。

TP-31 (図III-26)

位置 H-4 列 B

規模 $2.20 \times 0.30 / 2.32 \times 0.12 / 1.02$ 長軸方向 N-21°-W

特徴 調査区西部、標高18.5mの斜面に位置し、長軸は等高線に沿う。平面形は確認面、底面共に幅の狭い不整の溝状を呈する。壁の立ち上がりは、短軸方向では西壁に少し崩落が認められ、長軸方向では両側ともオーバーハングする。底面は北側がやや高くなる。

TP-32 (図III-26)

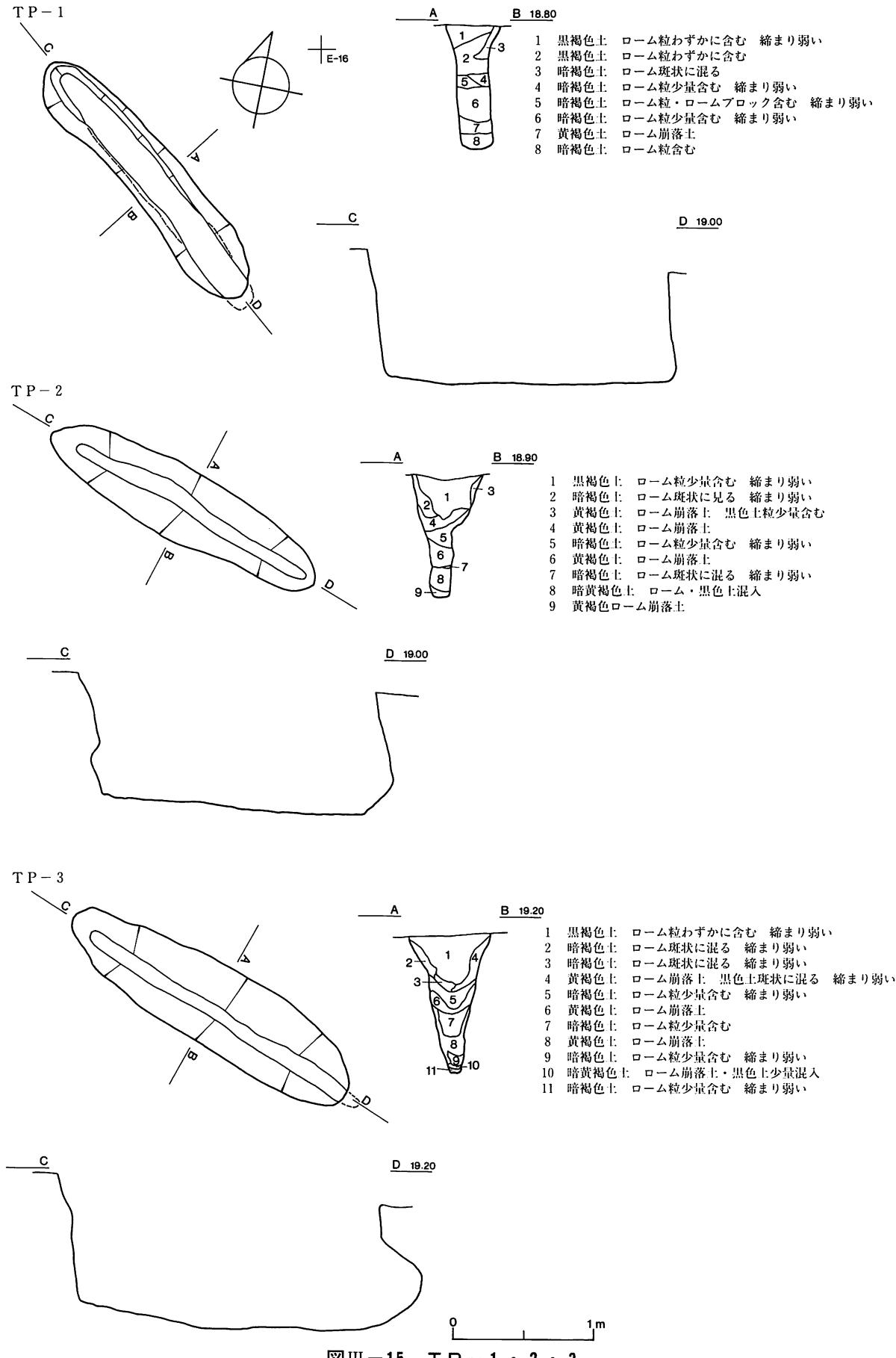
位置 G-3 列 A

規模 $1.60 \times 0.60 / 1.70 \times 0.22 / 0.92$ 長軸方向 N-25°-W

特徴 調査区西部、標高19.1mの斜面に位置し、長軸は傾斜に対し斜交する。平面形は確認面、底面共に、幅の広い不整の溝状を呈する。壁の立ち上がりは短軸方向では西壁が中位からやや広がり、長軸方向は両側共に弱くオーバーハングする。底面はほぼ平坦である。

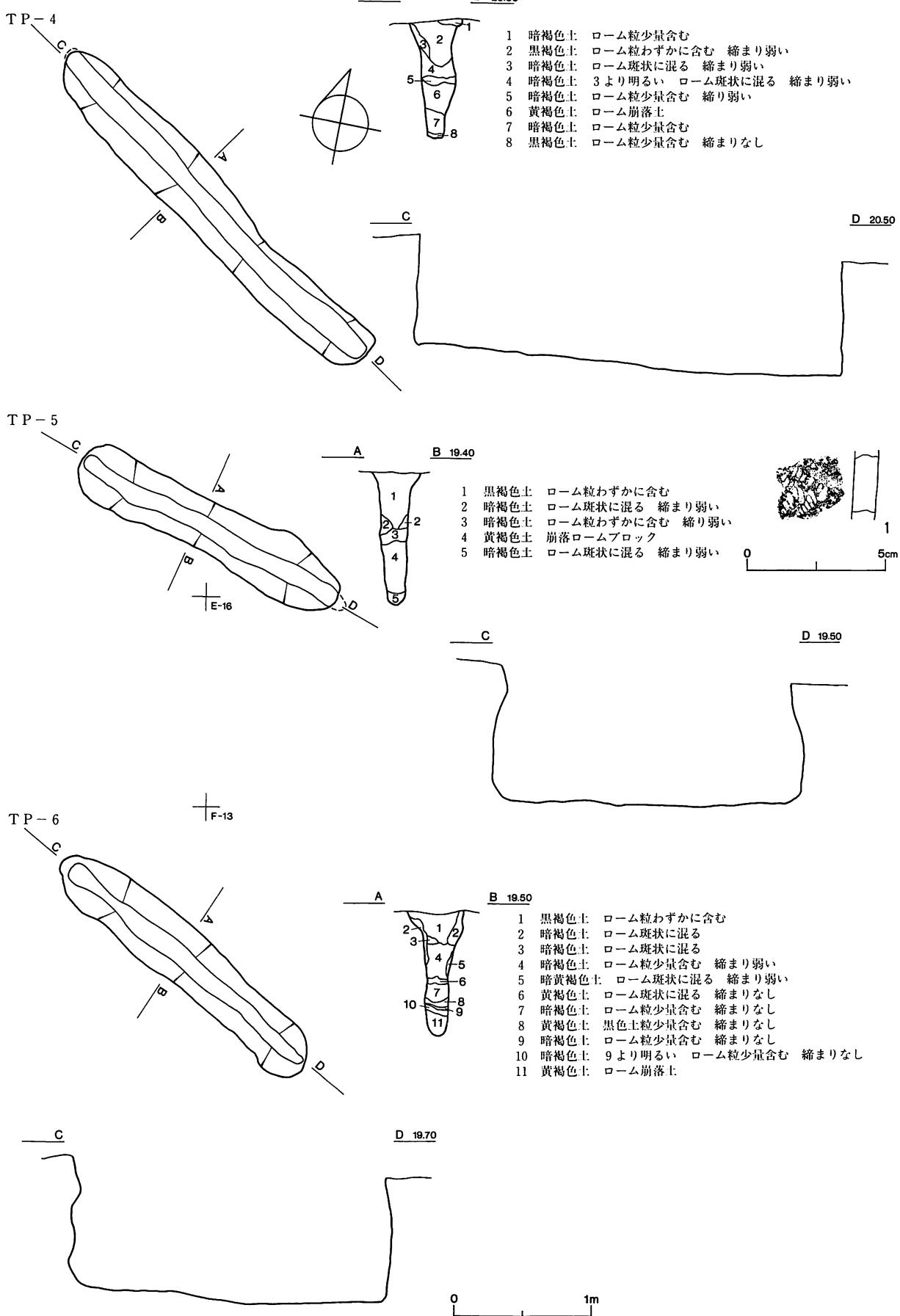
(広田良成)

III 遺構と遺構出土の遺物

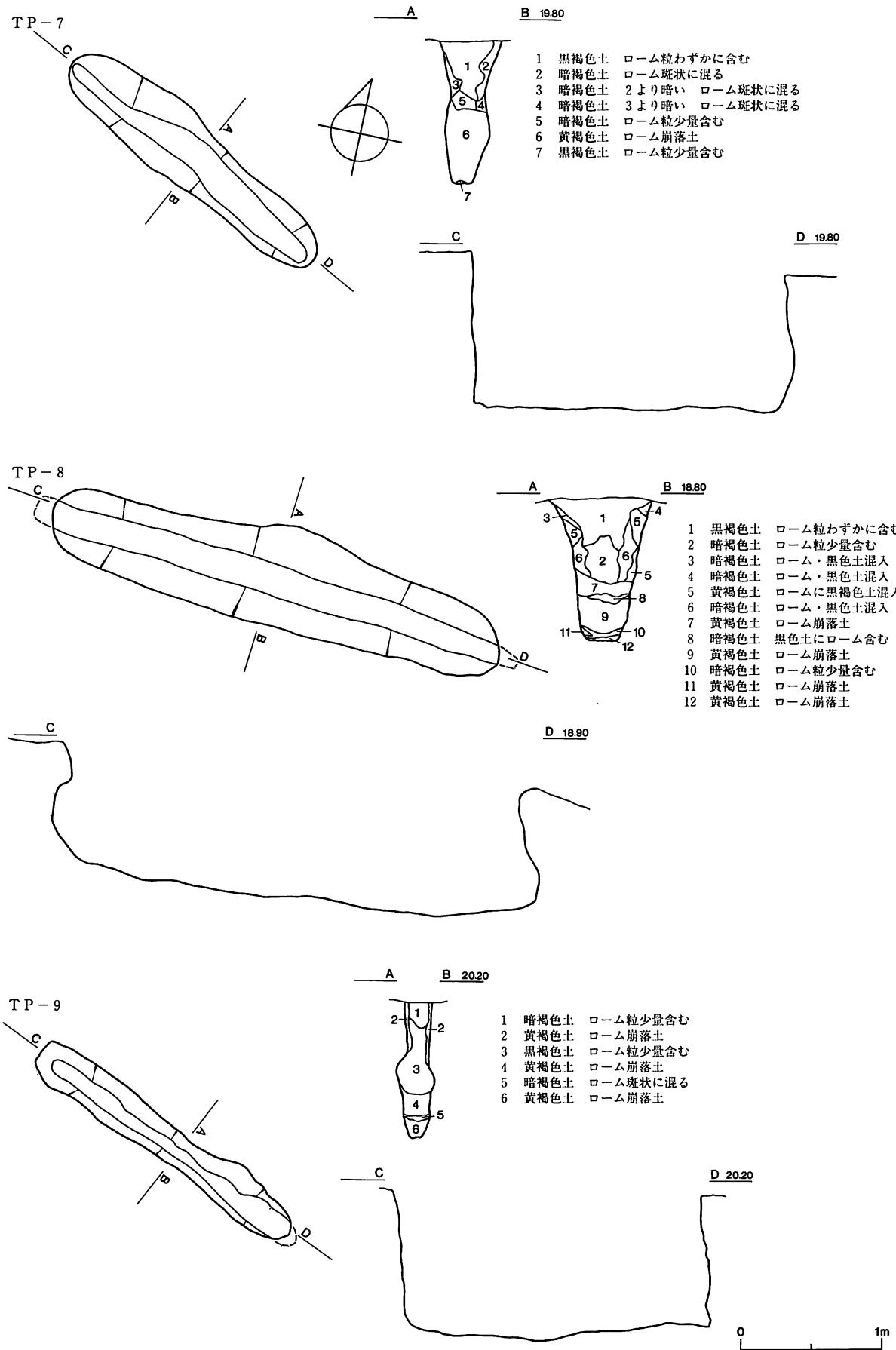


図III-15 TP-1・2・3

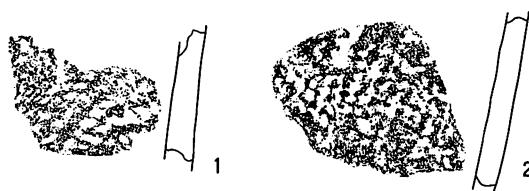
4 T ピット



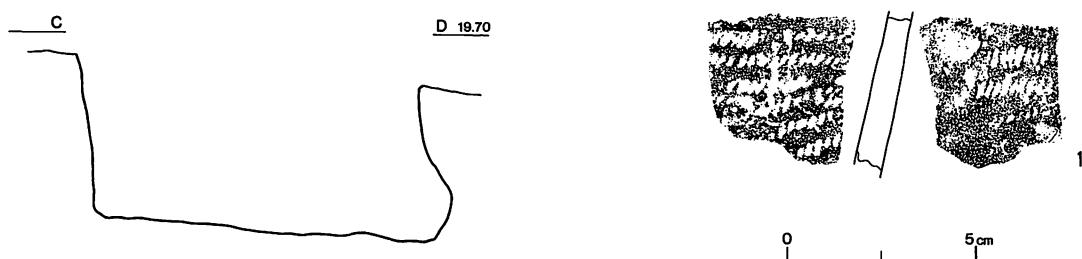
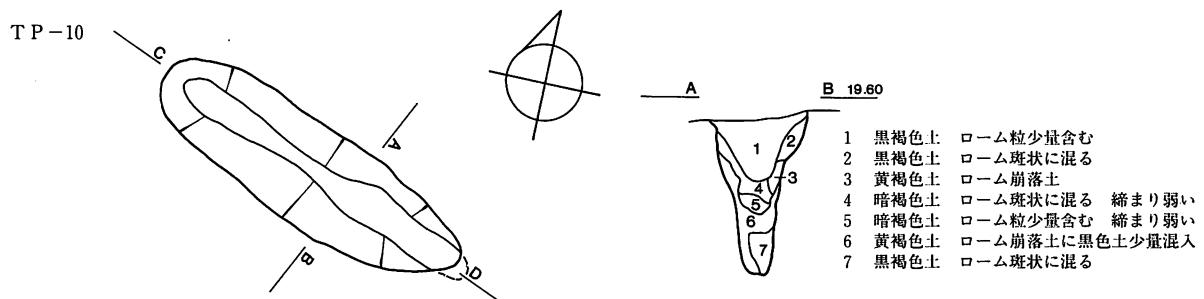
III 遺構と遺構出土の遺物



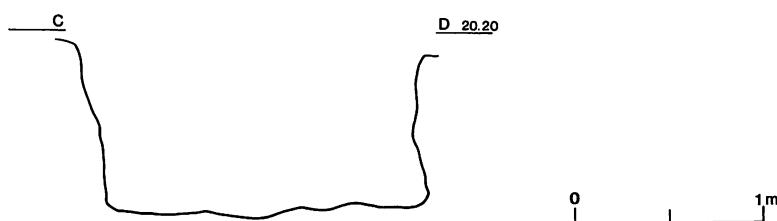
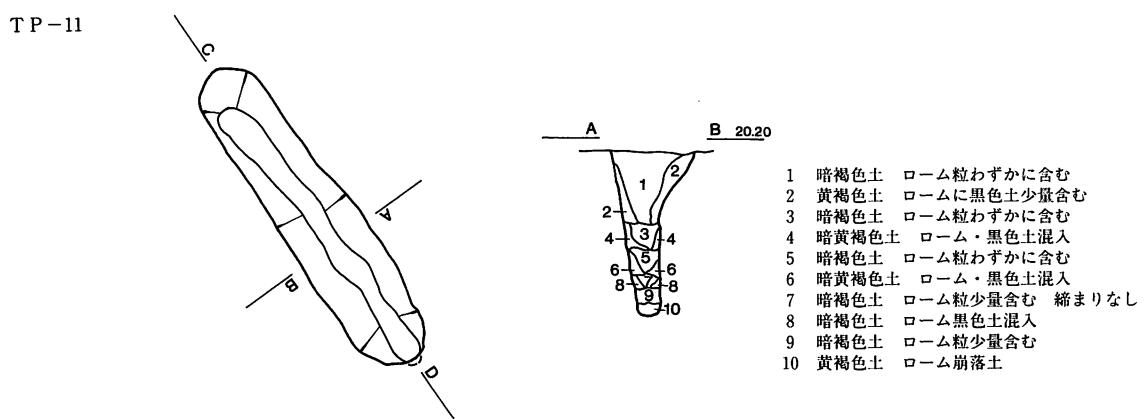
図III-17 TP-7・8・9



0 5cm



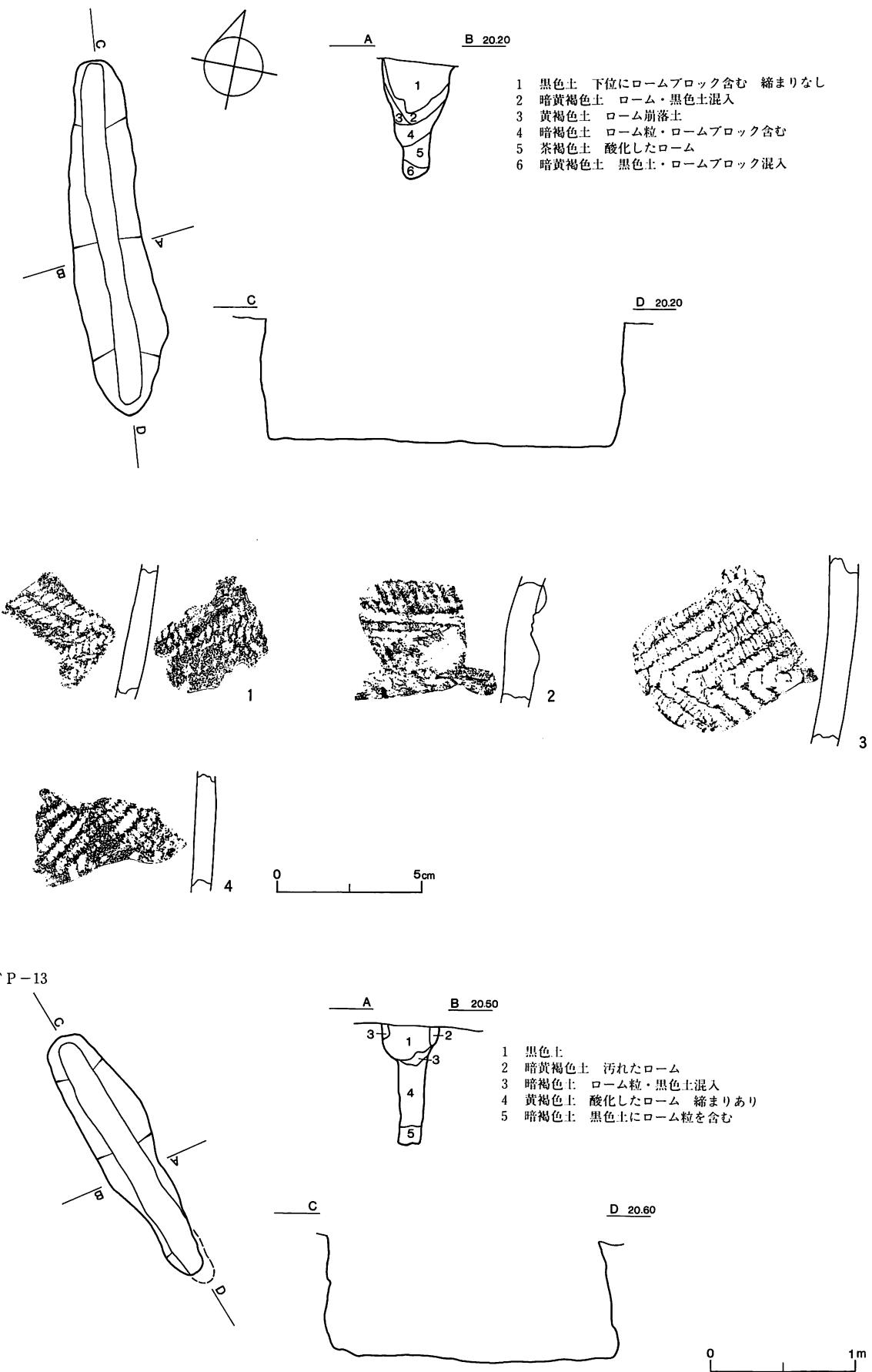
0 5cm



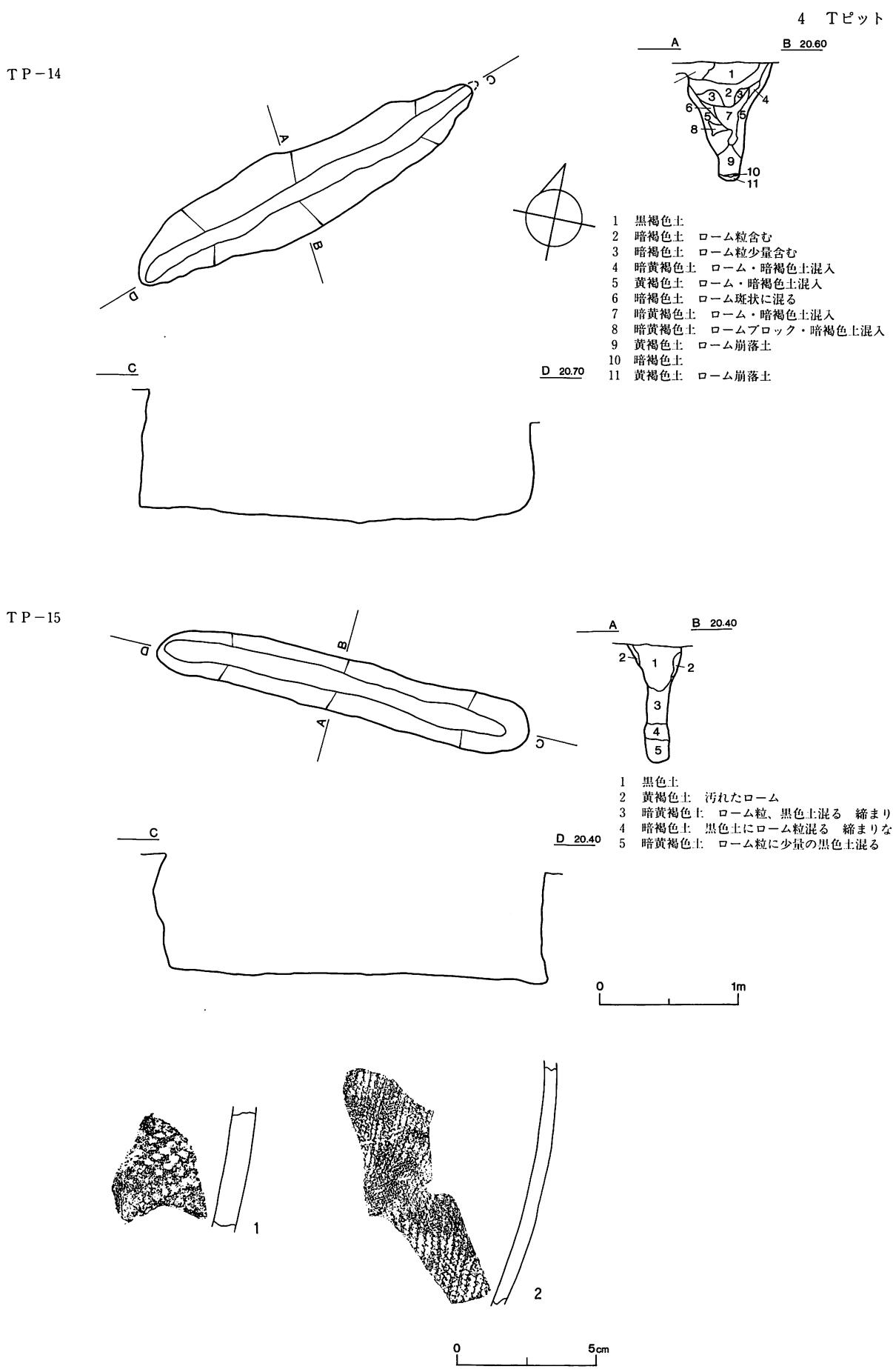
0 1m

図III-18 TP-9出土遺物・TP-10と出土遺物・TP-11

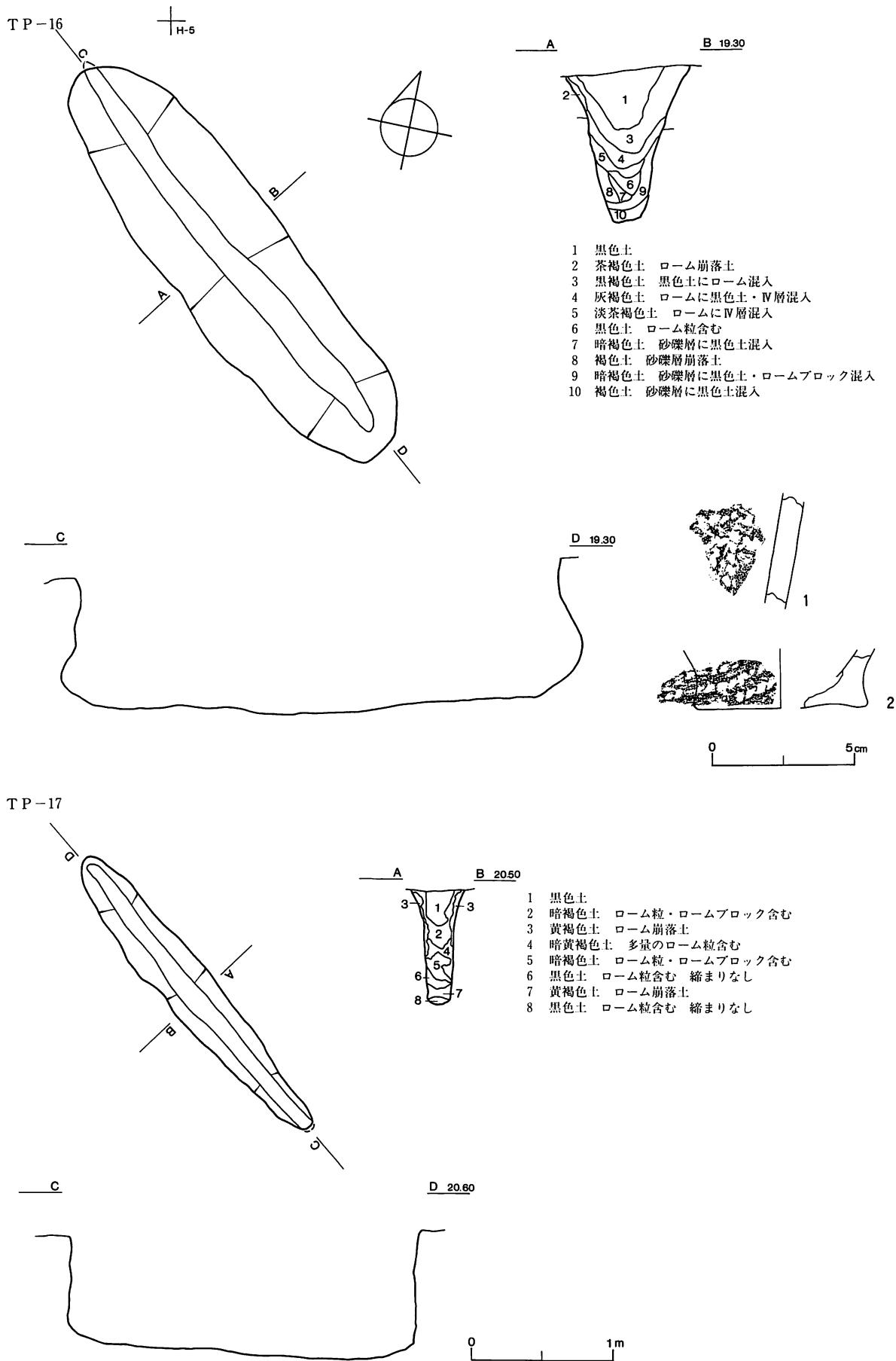
III 遺構と遺構出土の遺物



図III-19 TP-12と出土遺物・TP-13

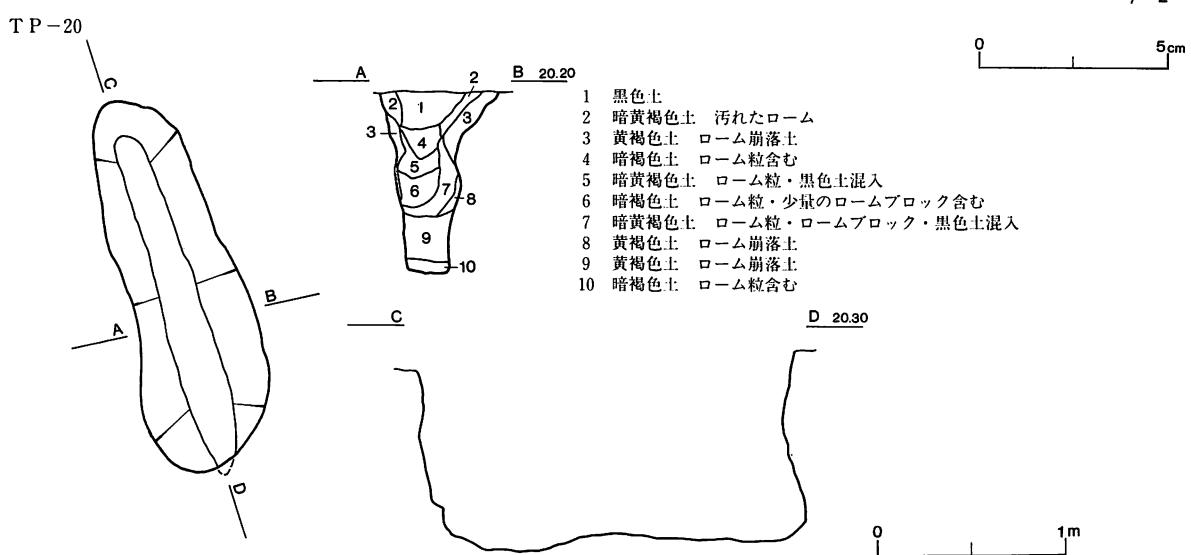
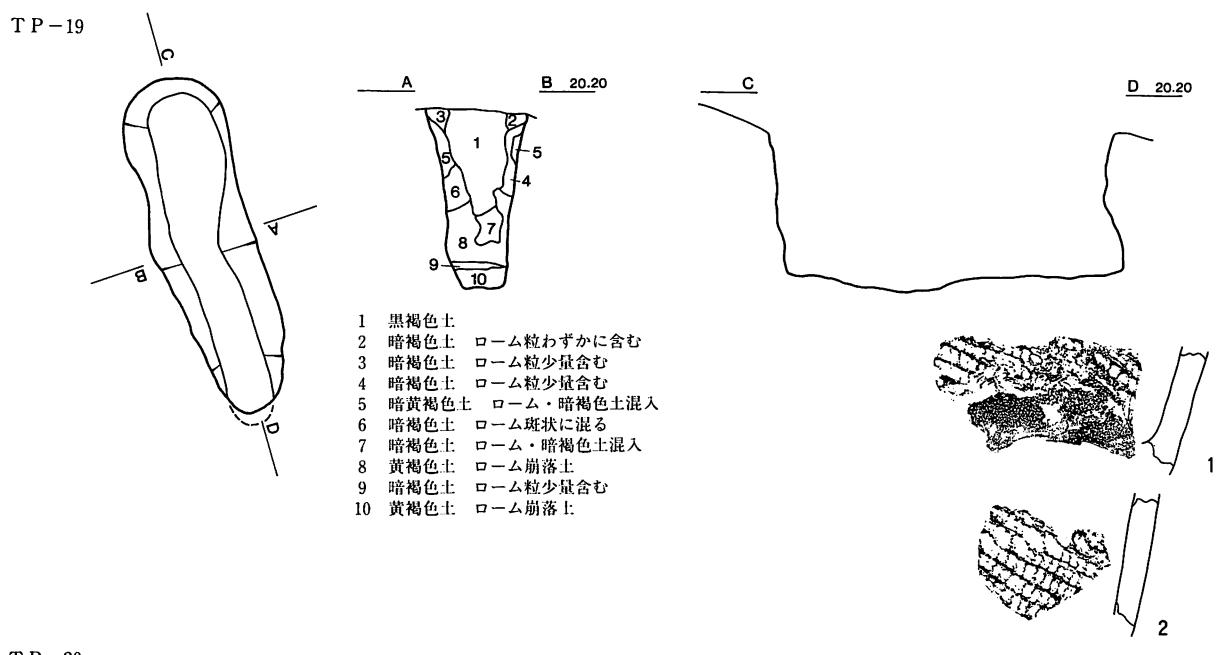
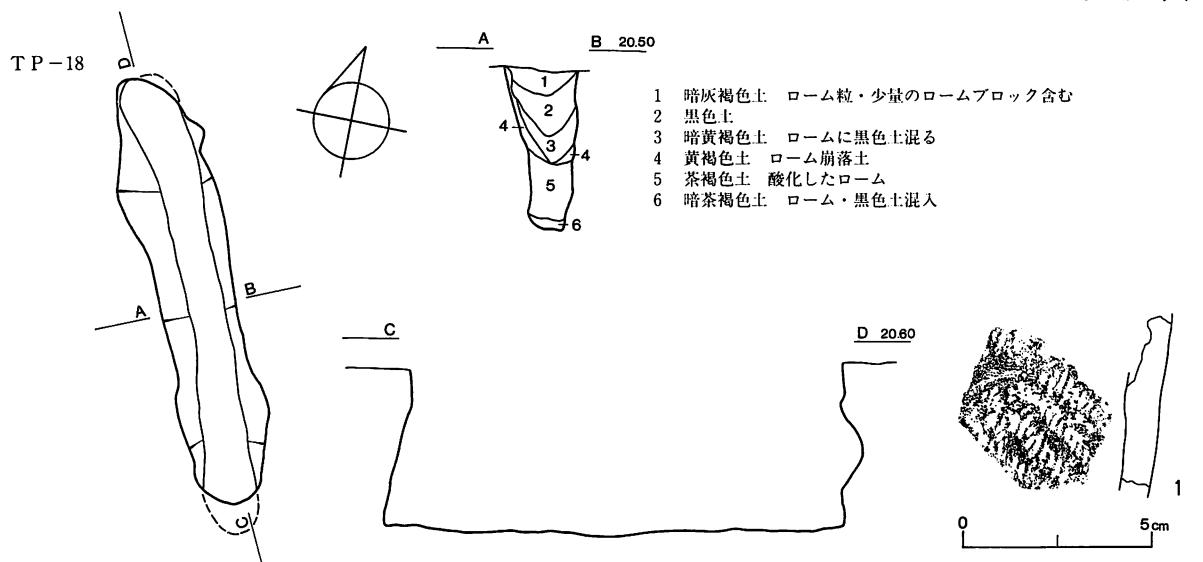


III 遺構と遺構出土の遺物



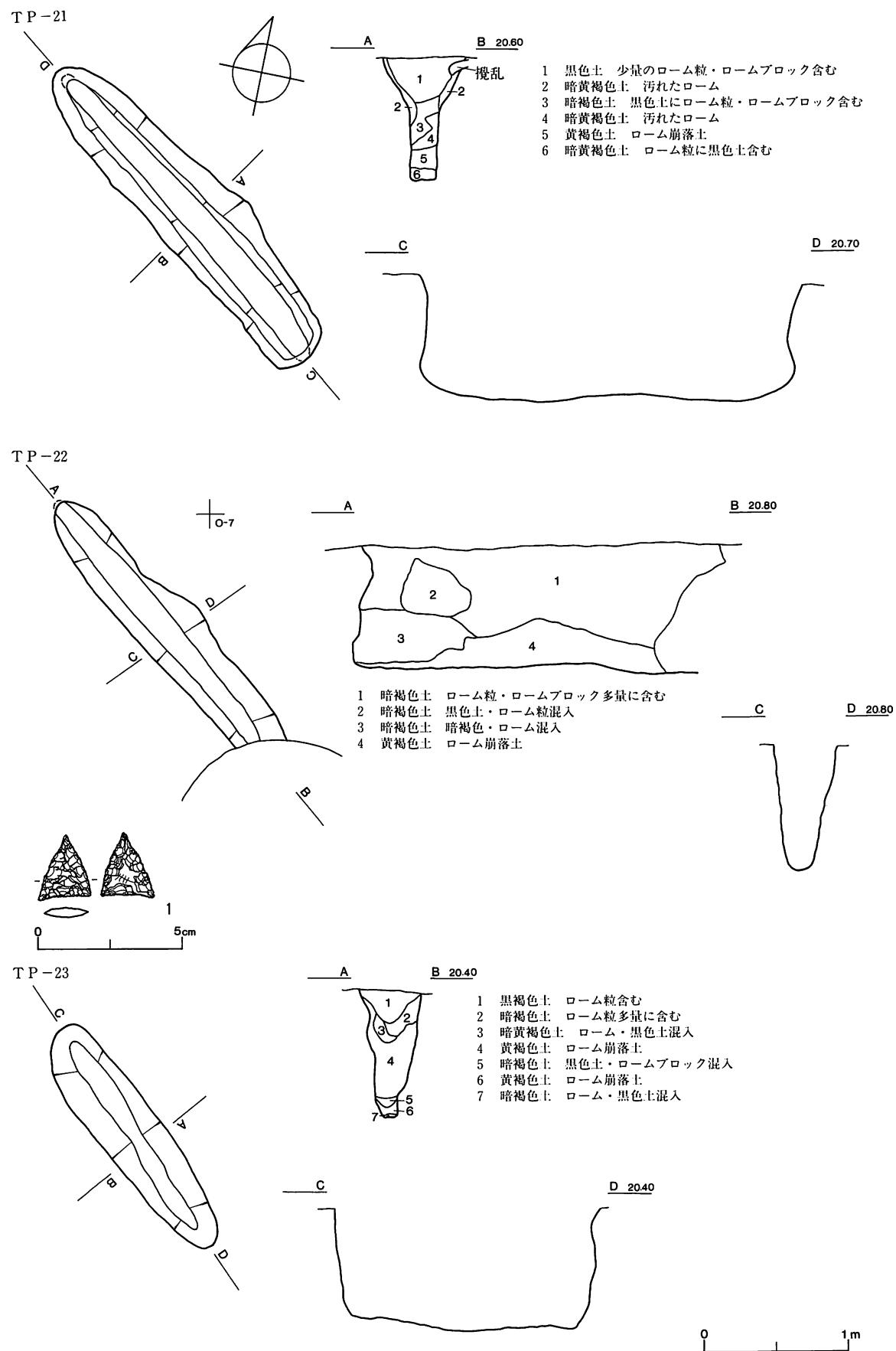
図III-21 TP-16と出土遺物・TP-17

4 Tピット

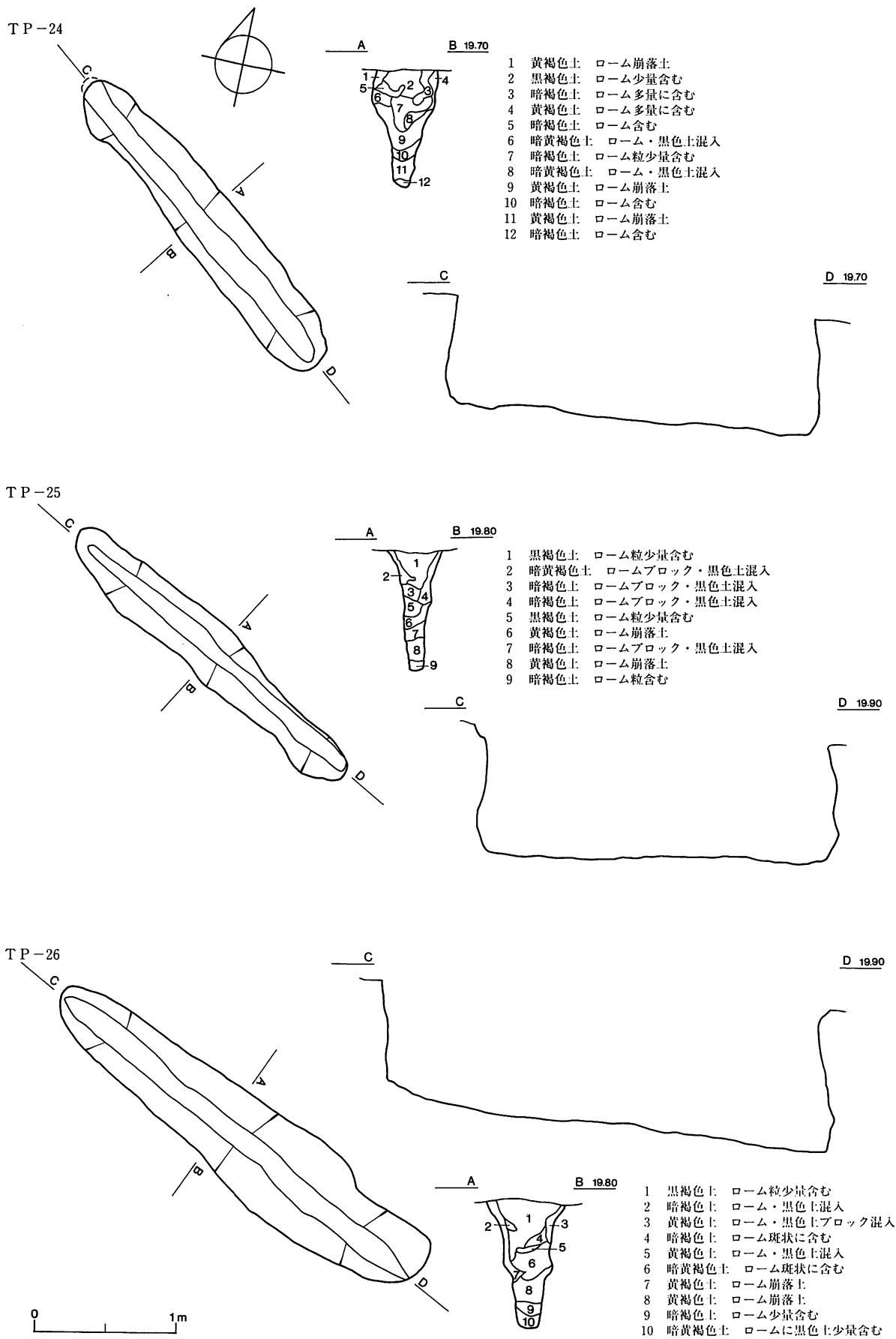


図III-22 TP-18・19と出土遺物・TP-20

III 遺構と遺構出土の遺物

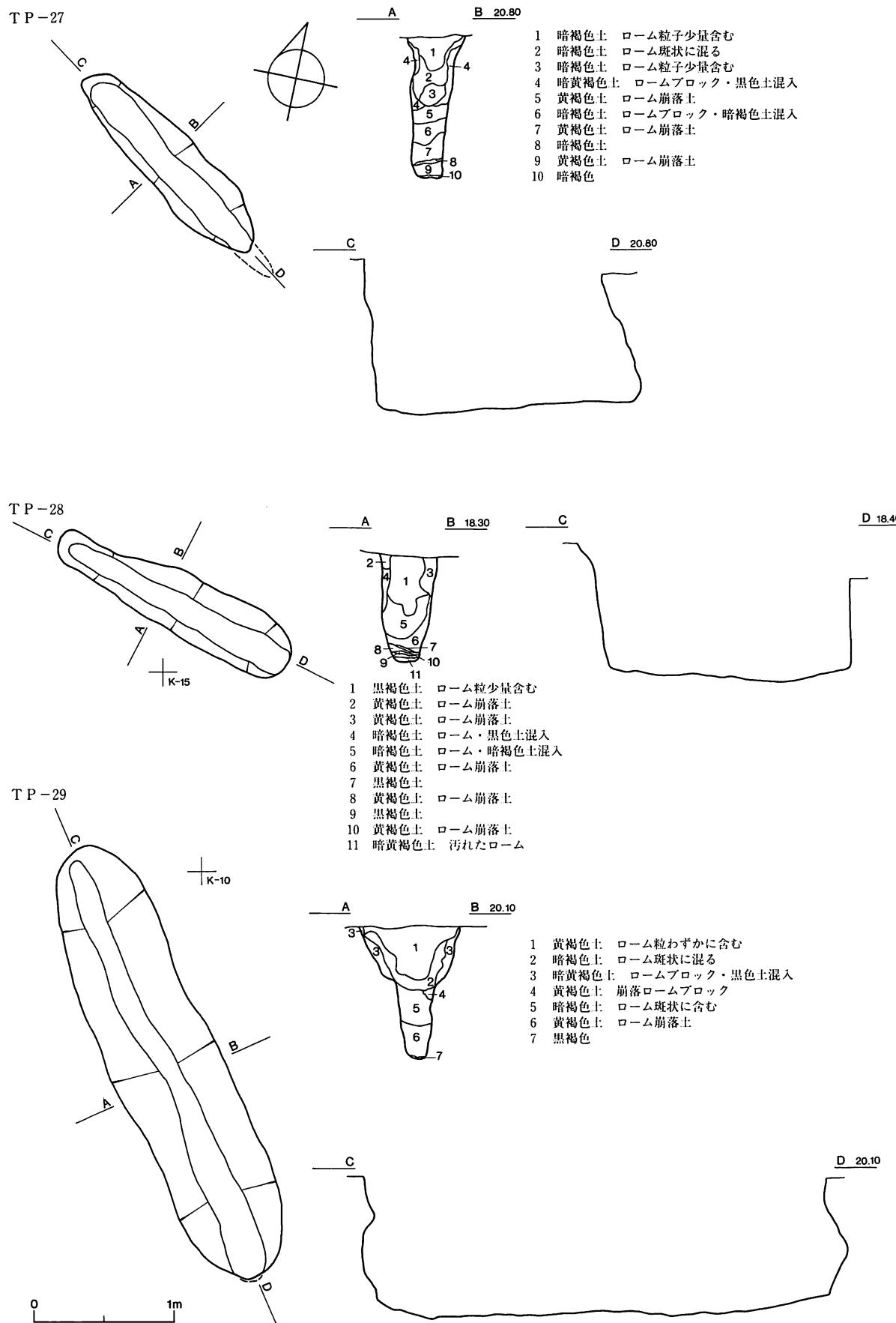


図III-23 TP-21・TP-22と出土遺物・TP-23

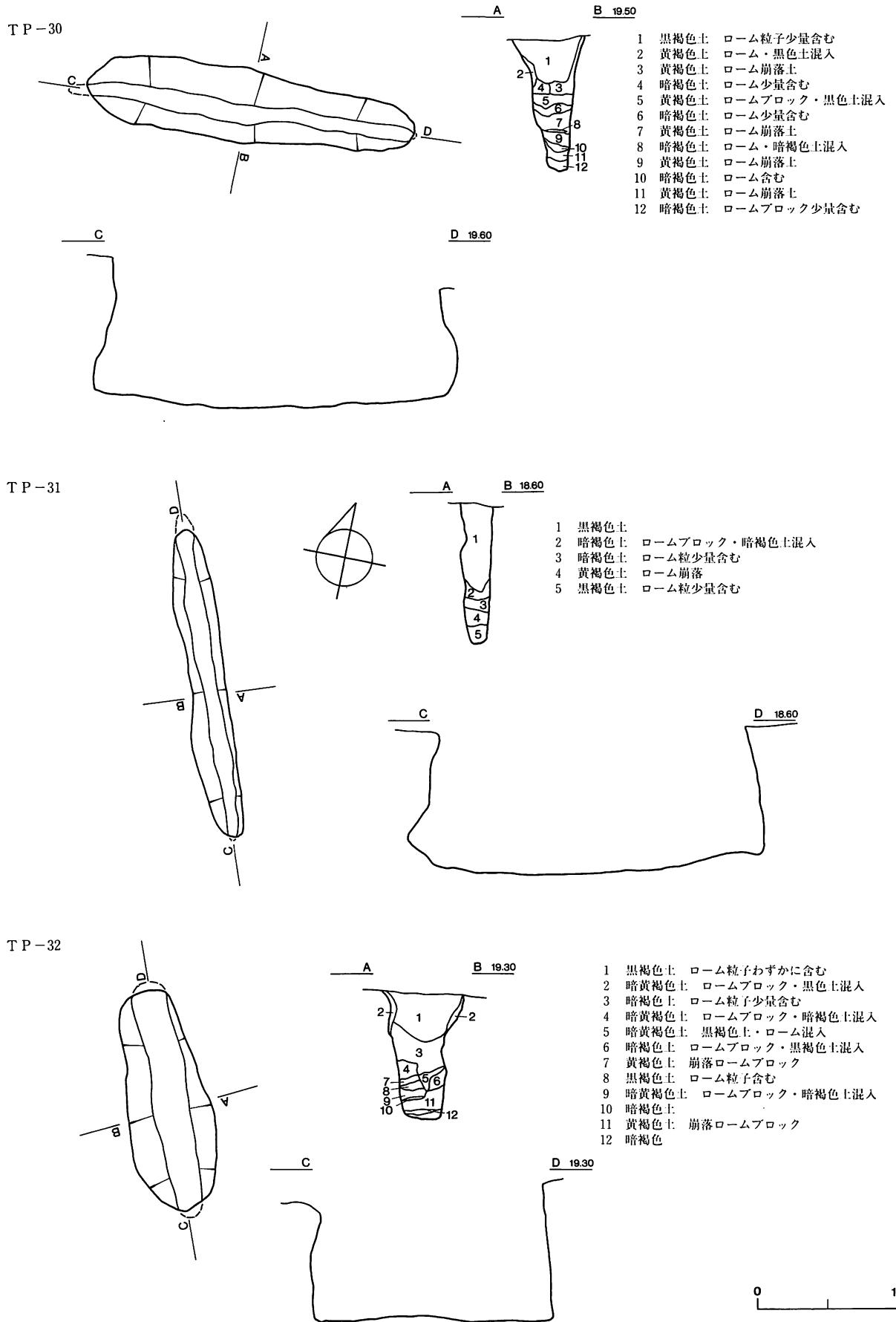


図III-24 TP-24・25・26

III 遺構と遺構出土の遺物



図III-25 TP-27・28・29



図III-26 T P - 30・31・32

5 Tピット列 (図III-27)

Tピットの配置から6つの列を想定した。A～Eの4列は北東から南西方向に斜面をななめに横切り、F列は斜面の肩に沿う。TP-28は列に属さないが、調査区外のTピットと列をなす可能性がある。A～E列は基本的に並行し、E列以外は途中で湾曲する。F列はB列を横切る。列内のTピット間の距離及びTピットの数、規模は一様ではなく、ばらつきがみられる。むしろ、TP-26・5・2、TP-6・3・8・28、TP-19・12・23等にみられるように、A～Fの縦列だけではなく、縦列に直交ないし斜交する横の配列も考えられる。

A列 (TP-27・13・19・32)

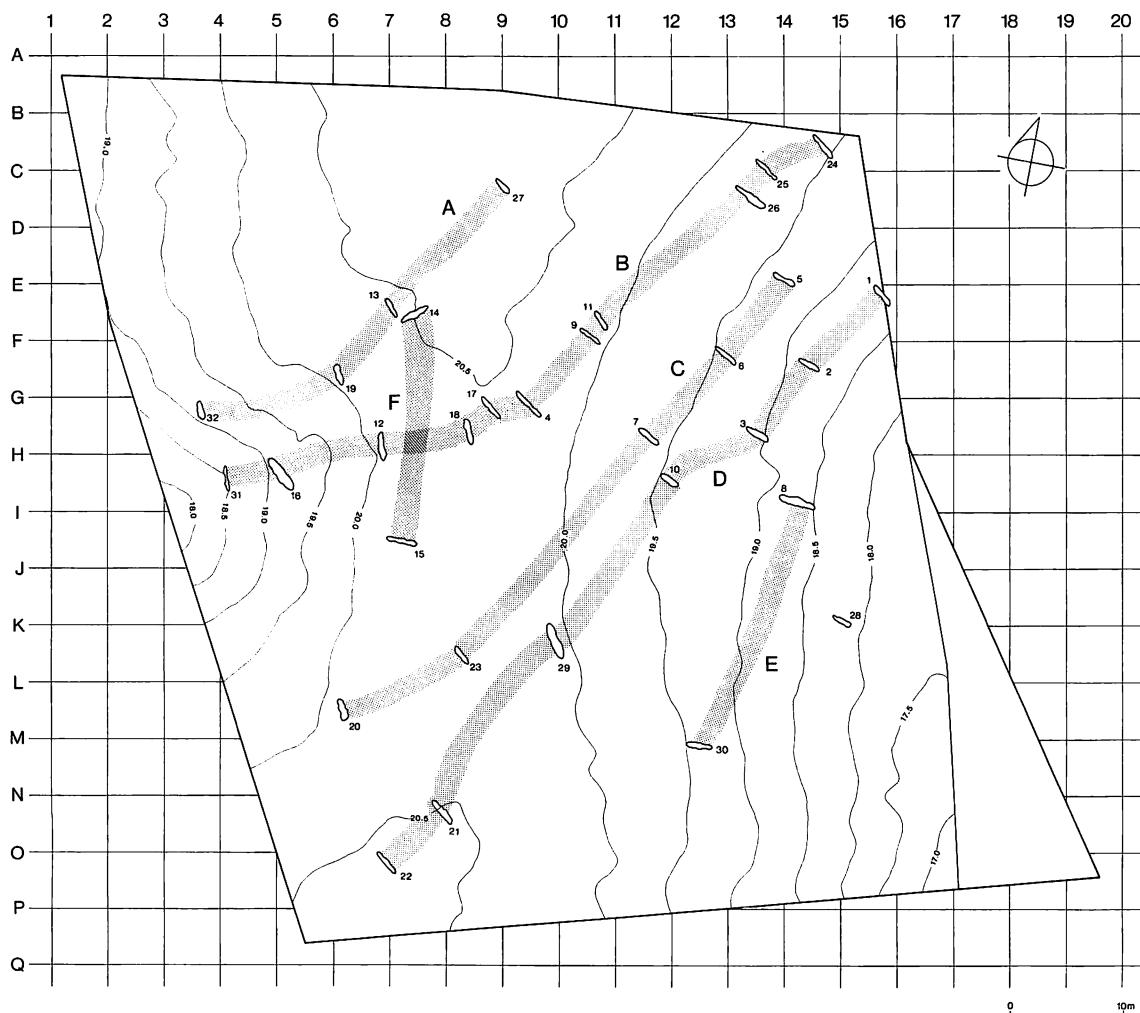
4基からなる。TP-32が列の軸からやや北西にずれる。

B列 (TP-24・25・26・11・9・4・17・18・12・16・31)

列を構成するTピットの数が最も多く、11基からなる。TP-4から湾曲し、沢状地形の最も深い方向へ伸びる。

C列 (TP-5・6・7・23・20)

5基からなる。TP-7とTP-23は距離が開く。TP-20が列の軸からやや北西方向にずれる。



図III-27 Tピット配列図

D列 (TP-1・2・3・10・29・21・22)

7基からなる。TP-3からTP-10の間で北西方向に湾曲する。

E列 (TP-8・30)

2基からなり、調査区外に広がる可能性がある。列の中では最も標高が低い。

F列 (TP-14・15)

2基からなる。長軸は2基とも傾斜に沿う。

(広田良成)

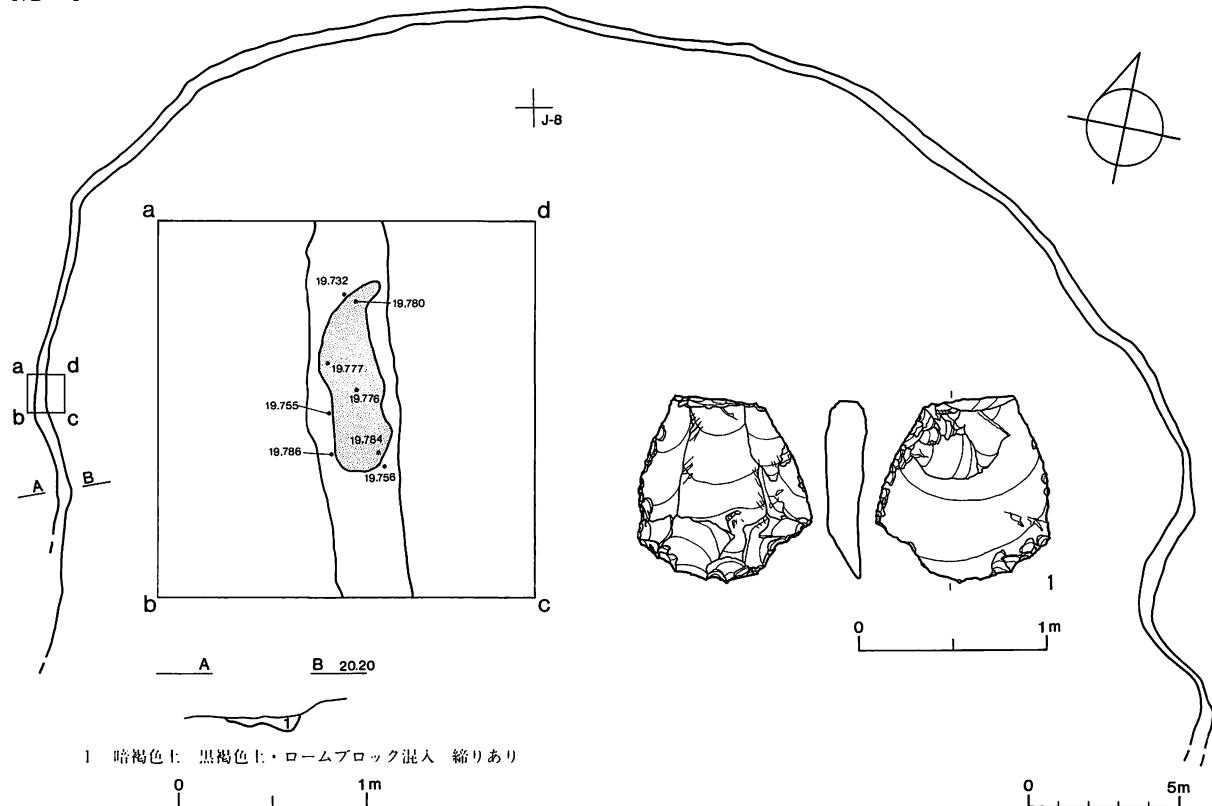
6 溝跡 (ND-1) (図III-28、図版17)

特 徴 調査区南西部でV層上面を精査中に、溝状の暗褐色土の落ち込みを確認した。北部、東部、西部の3ヵ所にベルトを残し、掘り下げたところ、浅い溝であることが判明した。なお、北部と西部のベルトは非常に浅く、覆土が1層でどの場所でも同一の土であることから、西部のベルトを残して除去した。本遺構は標高19.6~20.3mに位置し、平面形は半円状を呈する。北部でTP-15と重複しており、ND-1はTP-15に切られている。溝の端は東部はNH-5付近、西部はNH-2付近でごく浅くなり、溝の立ち上がりが検出できなかった。底面は平坦な部分がほとんどなく、全体的に凹凸がある。確認面から底面までの深さは浅く、最も深い部分で約8cmを測る。覆土は暗褐色土の単一層で、固く締っていた。溝の性格は不明である。

遺 物 遺物の出土状況は全体的に散漫であるが、西部で遺物の集中部が確認された。覆土からI群B類、II群B類土器、両面調整石器、スクレイパー、剝片、礫、石製品が出土した。

時 期 出土遺物からみて縄文時代中期前半II群B類土器の時期の可能性がある。 (広田良成)

ND-1



図III-28 ND-1と出土遺物

7 埋設土器 1 (図III-29、図版17)

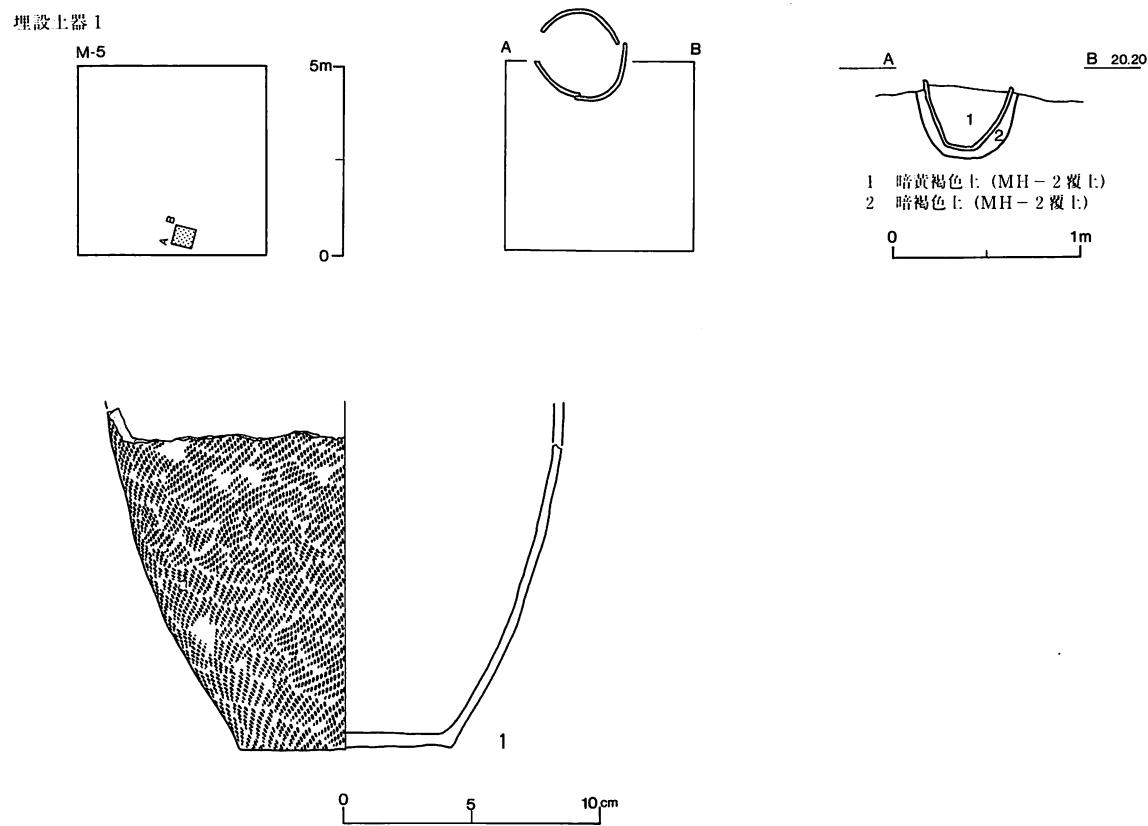
位 置 M-5

特 徴 NH-2 住居跡の覆土中にある。径約50cm、深さ約40cmの小さな掘り込みに底部を下にして納められている。土器は上部が欠失しており、北側にむかって僅かに傾いている。

遺 物 土器内から大型の頁岩製フレイクが6点出土した。1は上部が欠失しているが深鉢形土器と考えられる。底部から内弯気味にたちあがる。底部は上げ底気味である。地文はL R原体の斜行縄文で、部分的に調整のため消されている。胎土には小砂利が含まれている。内外面に炭化物の付着がみられる。

土器内の土壤を取り除く段階でフレイクが出てきた。土器内の状態を写真撮影や実測することはできなかったが出土した状況からみて底部近くにまとまっていたものと考えられる。フレイクには二次的な加工はみられない。

時 期 土器からみて縄文時代晚期V群B類土器の時期と考えられる。NH-2 住居跡との新旧関係は埋設土器1が覆土を切って置かれていることからNH-2より新しい。
(佐藤和雄)



図III-29 埋設土器1と出土遺物

IV 包含層出土の遺物

1 土器 (図IV-1~12、図版18~22)

土器-1

位置 K-4-C

調査区西側の緩斜面上で検出された壺形の土器である。II・III層から出土した。小破片のため出土範囲を記録するにとどまった。体部の大部分と底部を欠失している。

土器-2

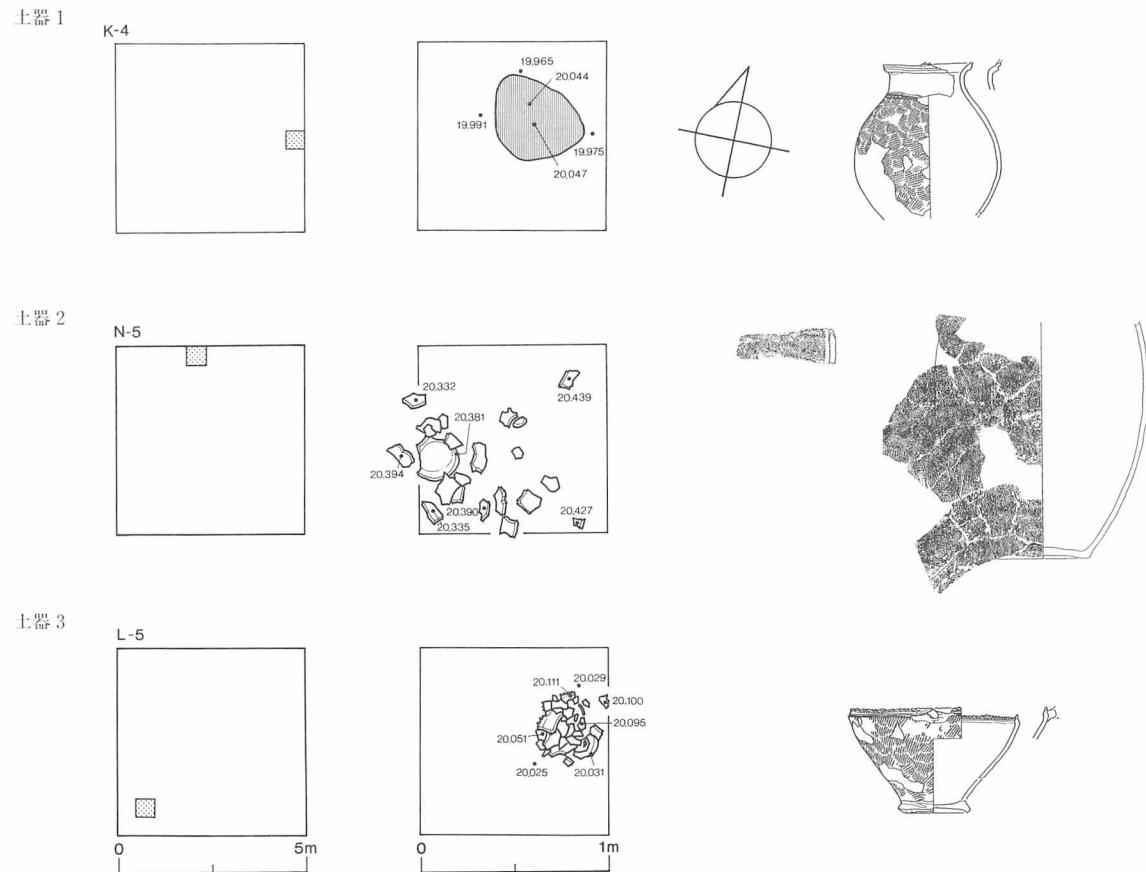
位置 N-5-A

NH-2住居跡の南壁付近で検出された深鉢形の土器である。III層の上面にあり、体部の一部と口縁部の大部分が欠失している。

土器-3

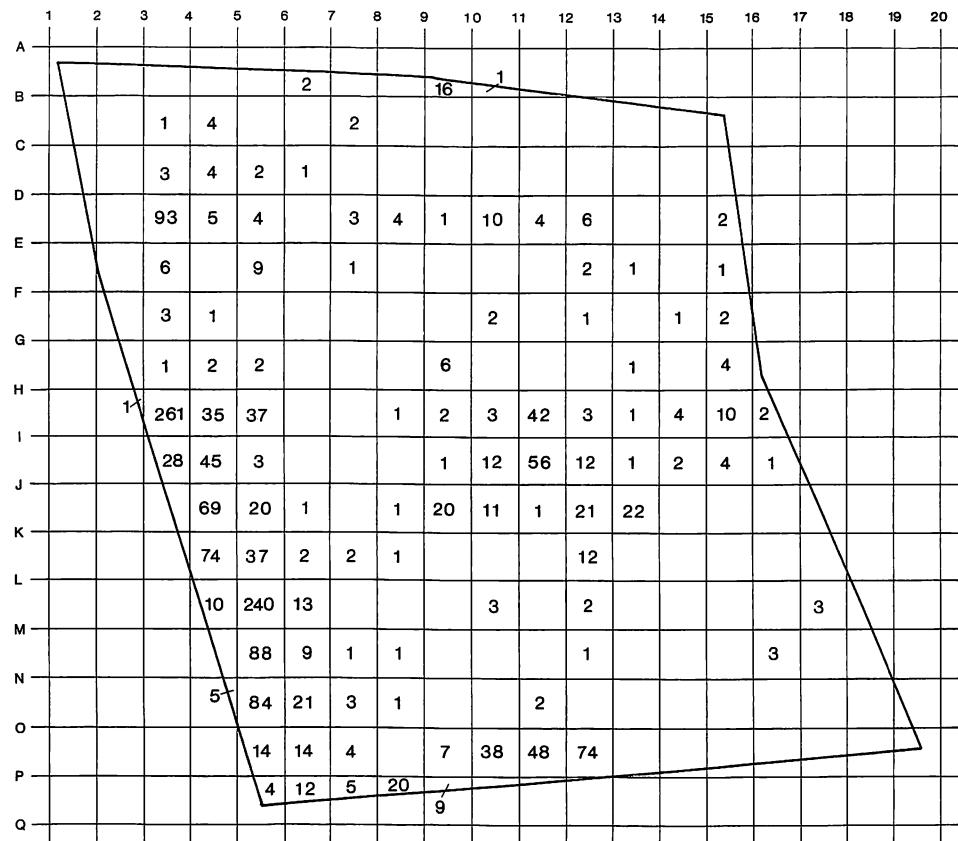
位置 L-5-B

NH-2住居跡の北西側で検出された鉢形の土器である。III層上面からほぼ一物体がつぶれた状態で出土した。口縁部は西側、底部は東側にあり、底部側に向って傾斜している。

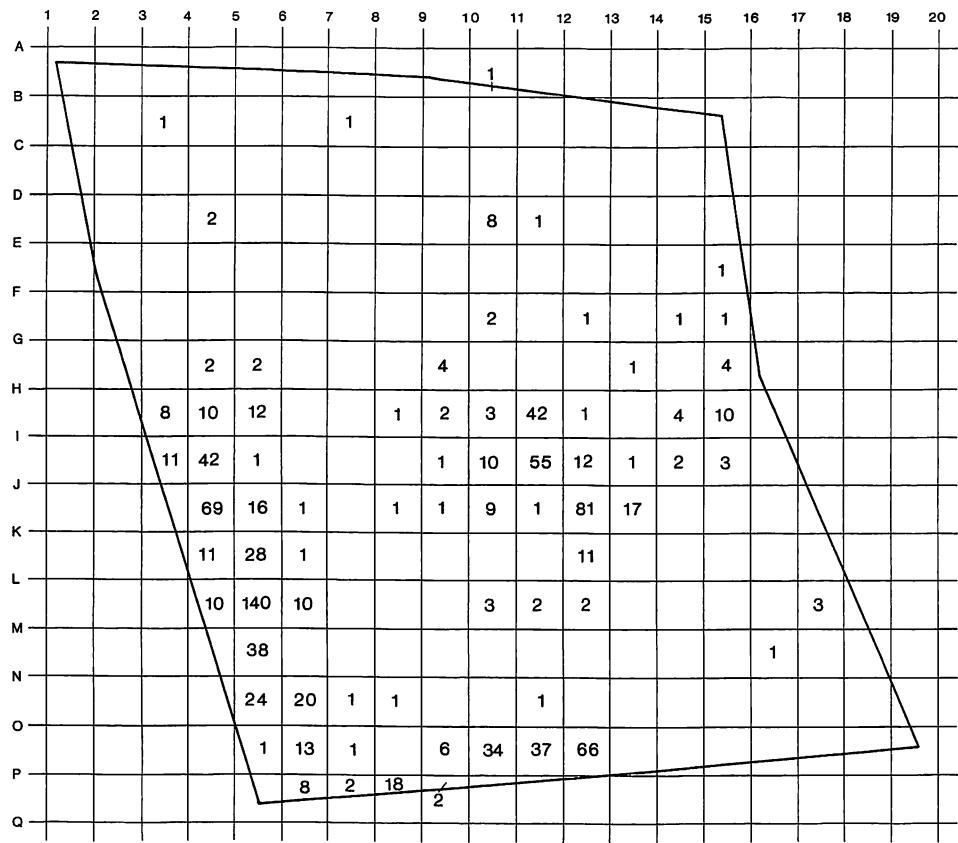


図IV-1 土器1・2・3

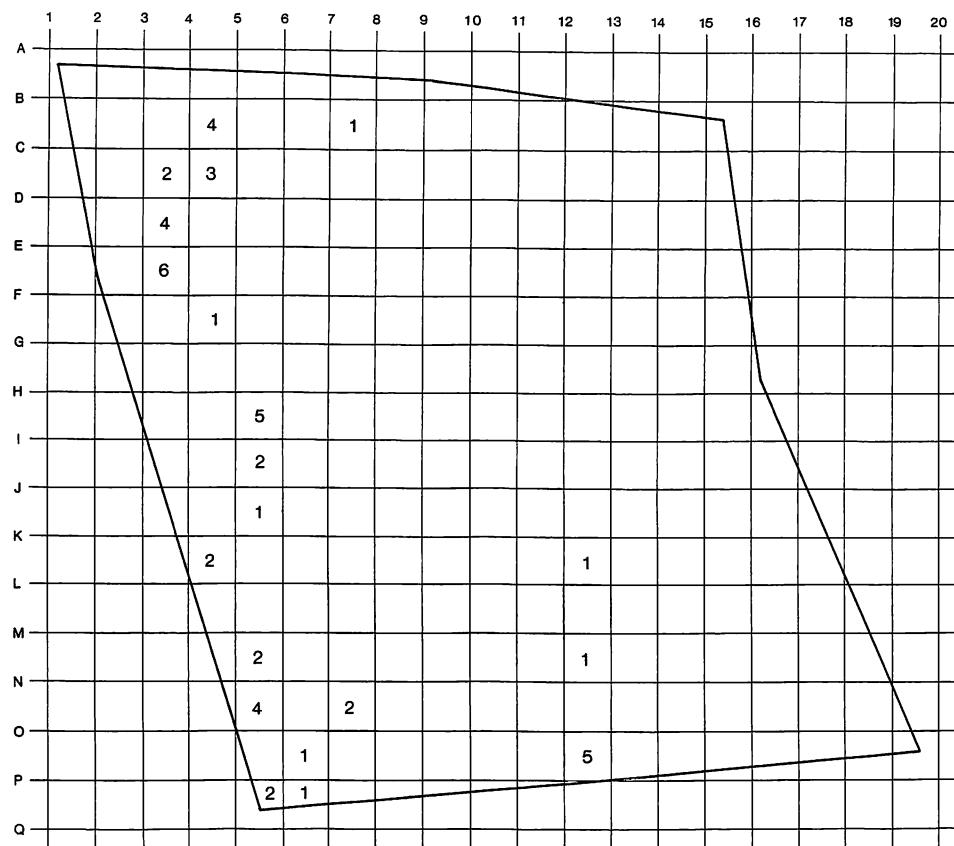
IV 包含層出土の遺物



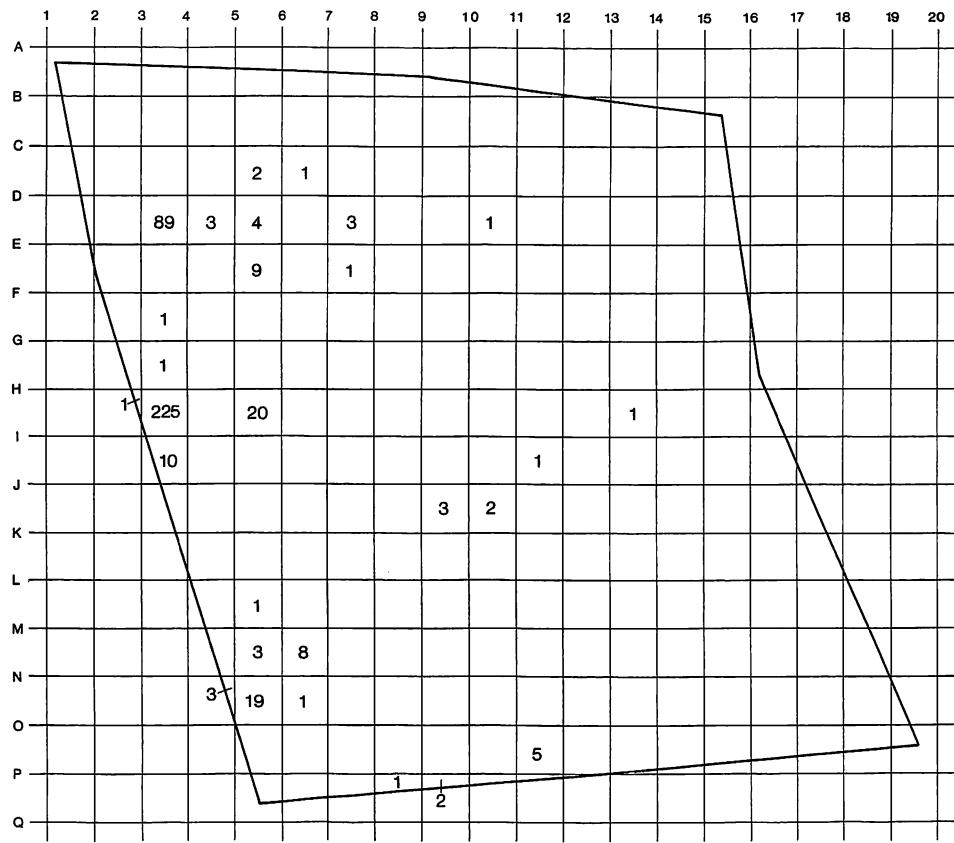
図IV-2 土器出土分布



図IV-3 土器出土分布（I群）

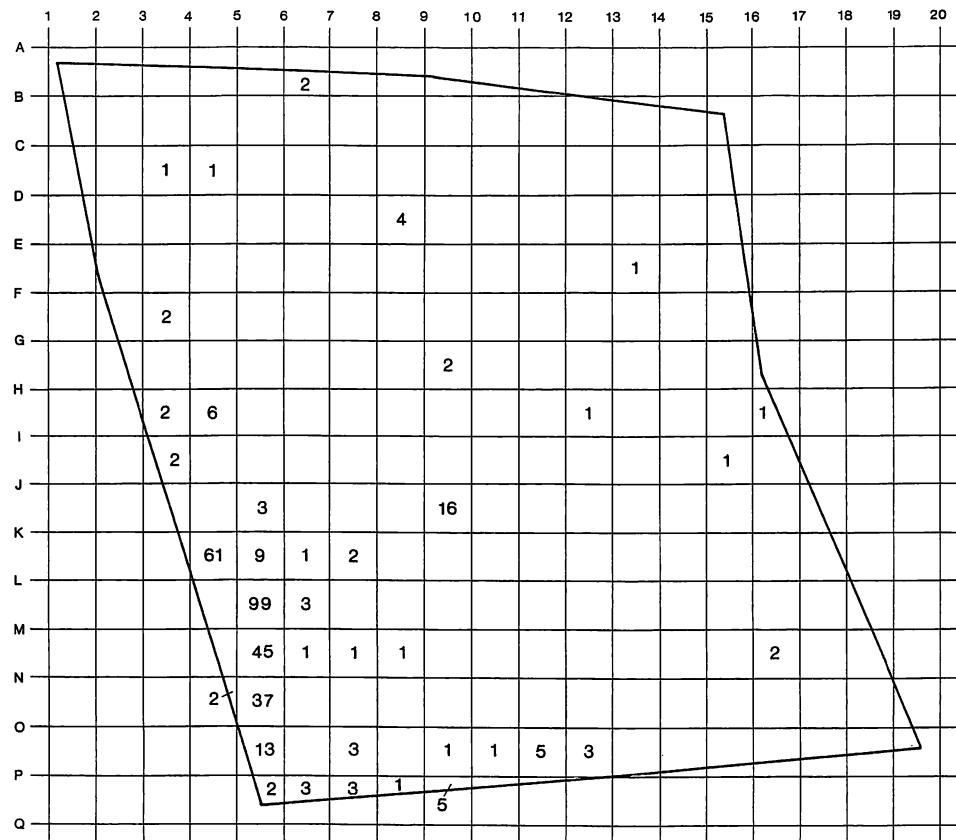


図IV-4 土器出土分布（II群）

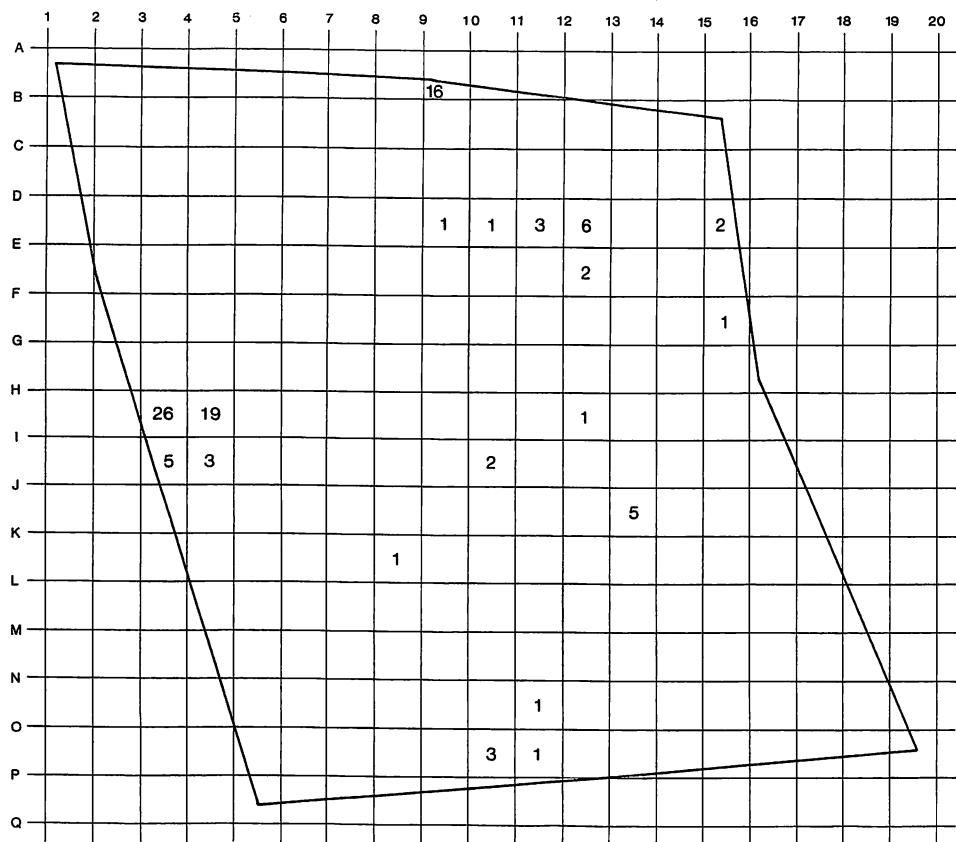


図IV-5 土器出土分布（III群A類・III群B類）

IV 包含層出土の遺物



図IV-6 土器出土分布（V群）



図IV-7 土器出土分布（VI群）

I群B-x類土器 (図IV-8・9、図版18・19)

平成7年度の報告では地文からa～h類に分けられている。今年度はd類・f～h類が出土していないため削除し、新たに出土したi類を追加した。

a類：口縁部に縄の側面圧痕文が施されるもの。b類：綾杉状の縄文が施されるもの。c類：綾杉状の縄文と同種の縄文が施されるもの。e類：縄文が施されるもの。i類：魚骨文が施されるもの。底部がある。

a類(2～6) 2～4は同一個体である。口縁部は外反する。口唇部には鋭く尖った工具による刺突文がつく。4は横位と斜位の側面圧痕文と縄の押捺による短刻文が施されている。内面はナデ調整されている。6は口縁部が外反する。無文地に斜位の側面圧痕文がつき、体部には縄文が施されている。内面は条痕文が施されている。胎土は多量の砂粒が含まれている。

b類(7) 口縁はやや外反する。原体は1段Rと1段Lの縄を合わせて右撫りにしたもの。内面は指頭による調整痕がつく。

c類(8) 口縁は強く外反する。原体は1段Lの2本の縄を合わせて左撫りにしたもの。口唇にも縄の圧痕がつく。

e類(1・9～15) いずれも胎土に砂粒と少量の纖維を含む。1は口縁部が外反する深鉢形土器である。LR原体による羽状風の縄文が施される。口唇部にも地文がつく。10・11は同一固体で、口縁部はやや外傾する。13・14は同一固体で、口唇部に鋭く尖った工具による刺突文がつく。9・13・14は内面にも地文が施されている。15は内面に条痕文がつく。口唇断面は四角いもの(1・10・11)、丸みをもつもの(12・13・14)、やや先細りになるもの(9)がある。

i類(16) 口縁部は外反する。口唇部には鋭く尖った工具による刺突文がつく。内外面に魚骨文が施されている。

底部及び底部近くのもの(17・18) 17は底部が張出し、底端部に縄の圧痕が施されている。18は傾きからみて尖底か、あるいは小型の平底になるものと思われる。原体は1段Lの2本の縄を合わせて左撫りにしたもの。内面に条痕文が施されている。

II群A類土器 (図IV-10-19～21、図版20)

19は比較的条の太い縄文が施され、胎土に纖維と小砂石を含む。綱文式に相当する。20は無文地にヘラ状工具による押引文とコンパス文が施されている。内面は丁寧に調整されている。21は底端部と底面に半截竹管状工具による重弧文状の刺突文が施されている。石川野式に相当する。

III群A類土器 (図IV-22～25・図版20)

22は筒形土器の弁状突起部である。比較的太い貼付帯をもち、その上には縄による刻み目が施されている。貼付帯間には縄線文がつく。23は細い貼付帯をもつ。24は貼付帯の間に縄線文と馬蹄形圧痕文がつく。体部には結束第一種羽状縄文が施される。原体はLRである。25は底部である。底端部・内面ともに良く研磨されている。胎土に小石を含む。

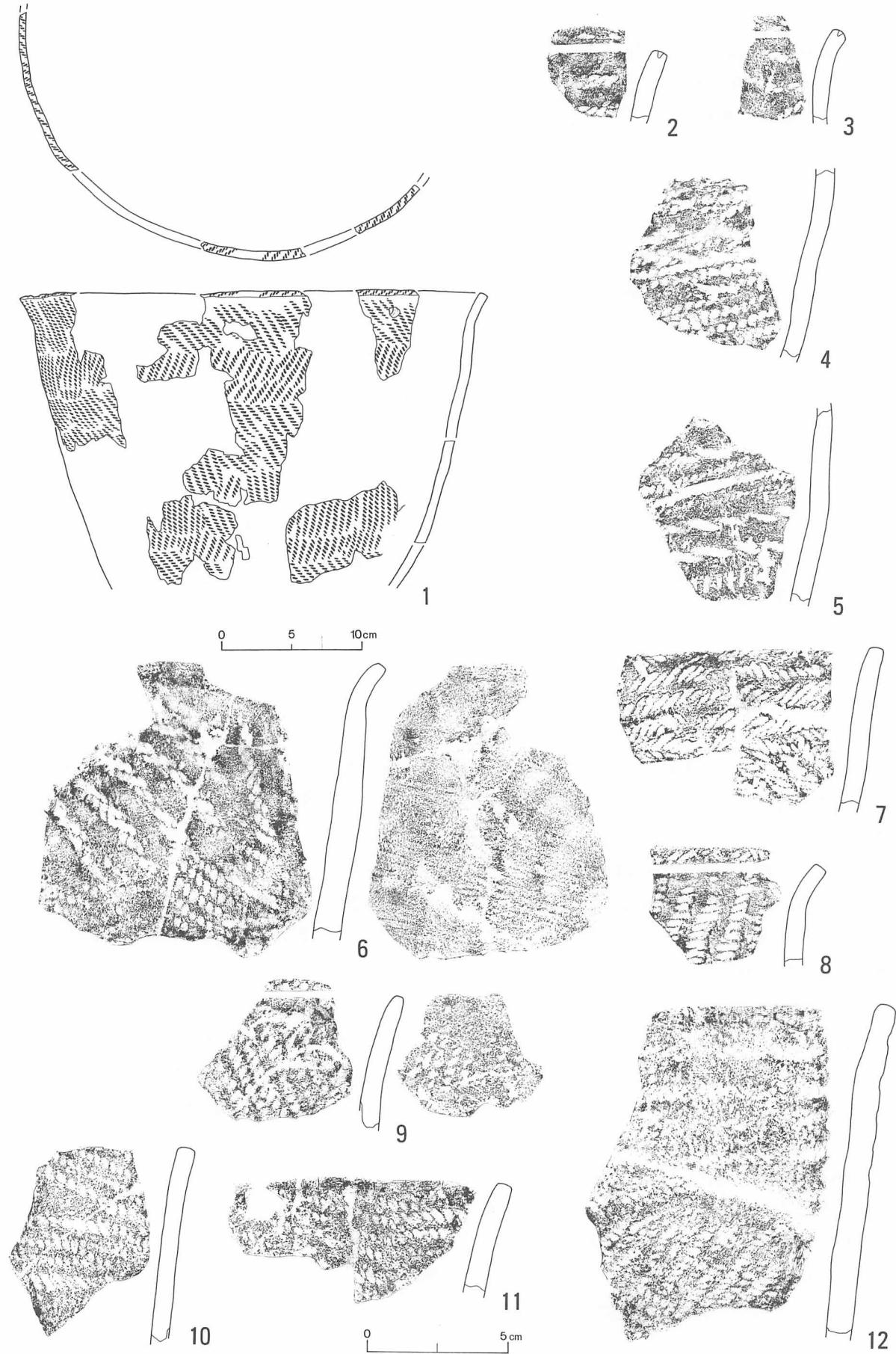
III群B類土器 (図IV-10-26・図版-20)

26はRL原体の斜行縄文が施されている。胎土は緻密である。ノダップII式に相当する。

IV群C類土器 (図IV-10-27、図版20)

27は口縁に刻み目によって二分された小突起が一対つく。口縁下部にはドーナツ状の貼付文と垂下する貼付文帯がつく。体部には磨消し縄文が施される。

IV 包含層出土の遺物



図IV-8 包含層出土の土器（1）

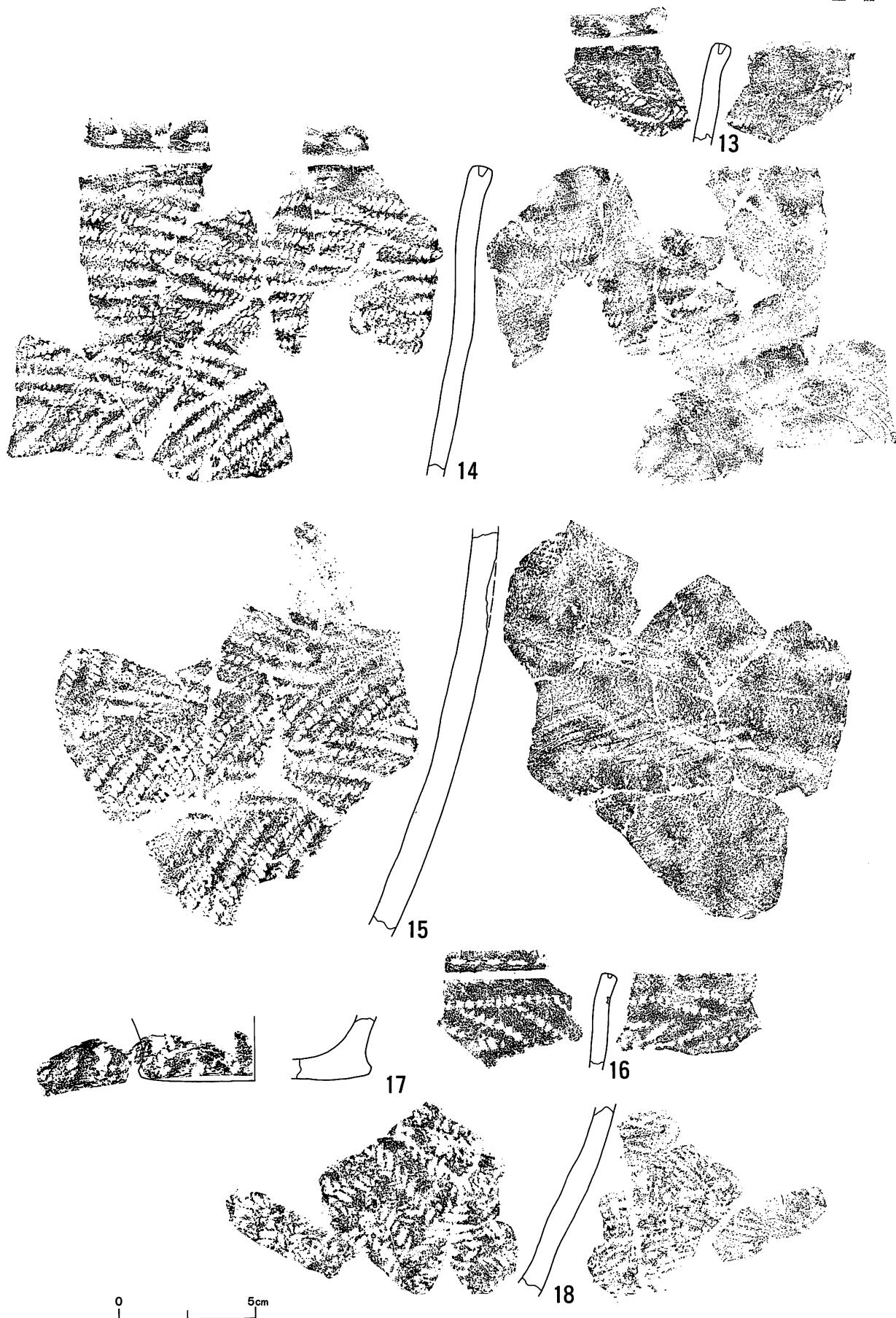
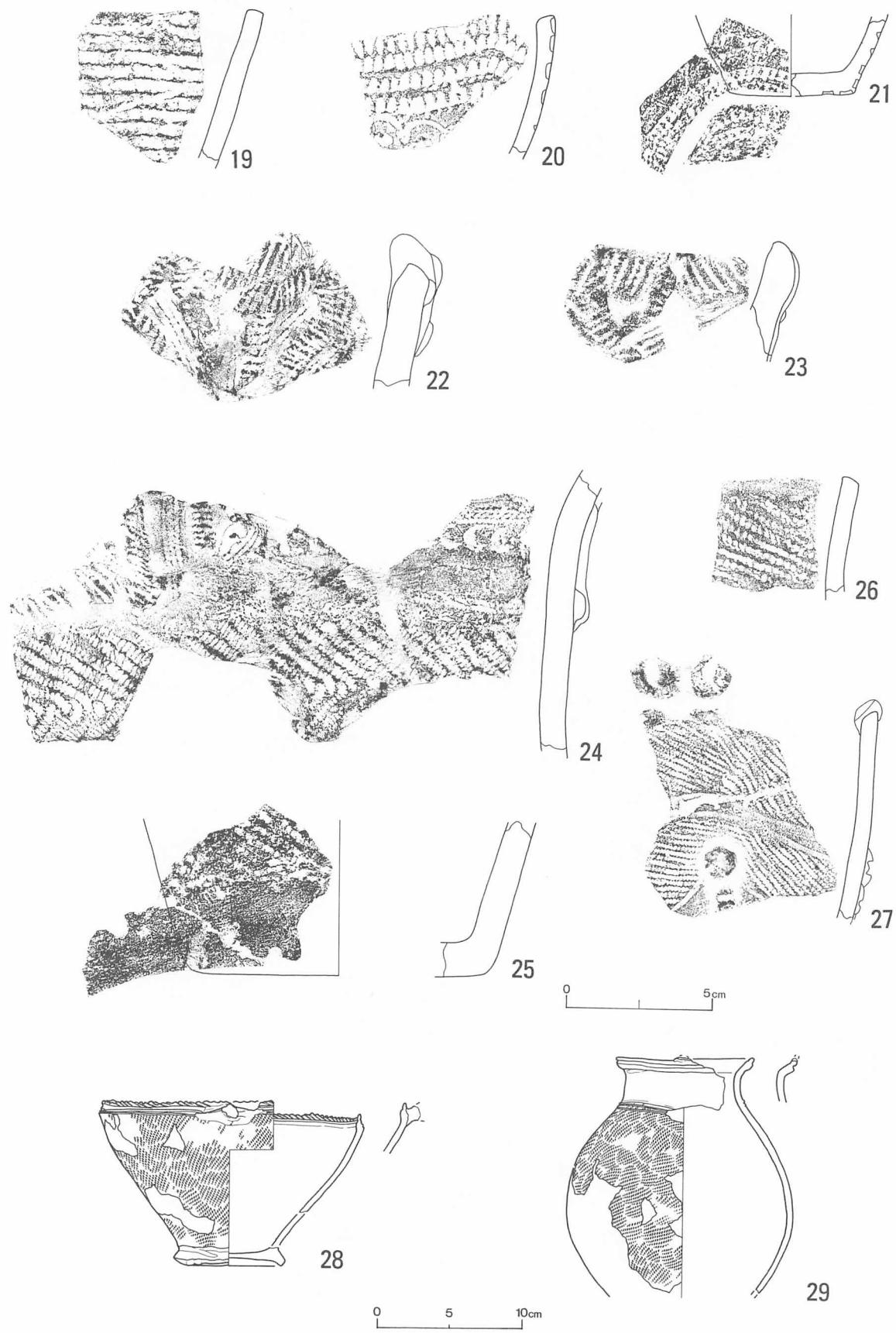
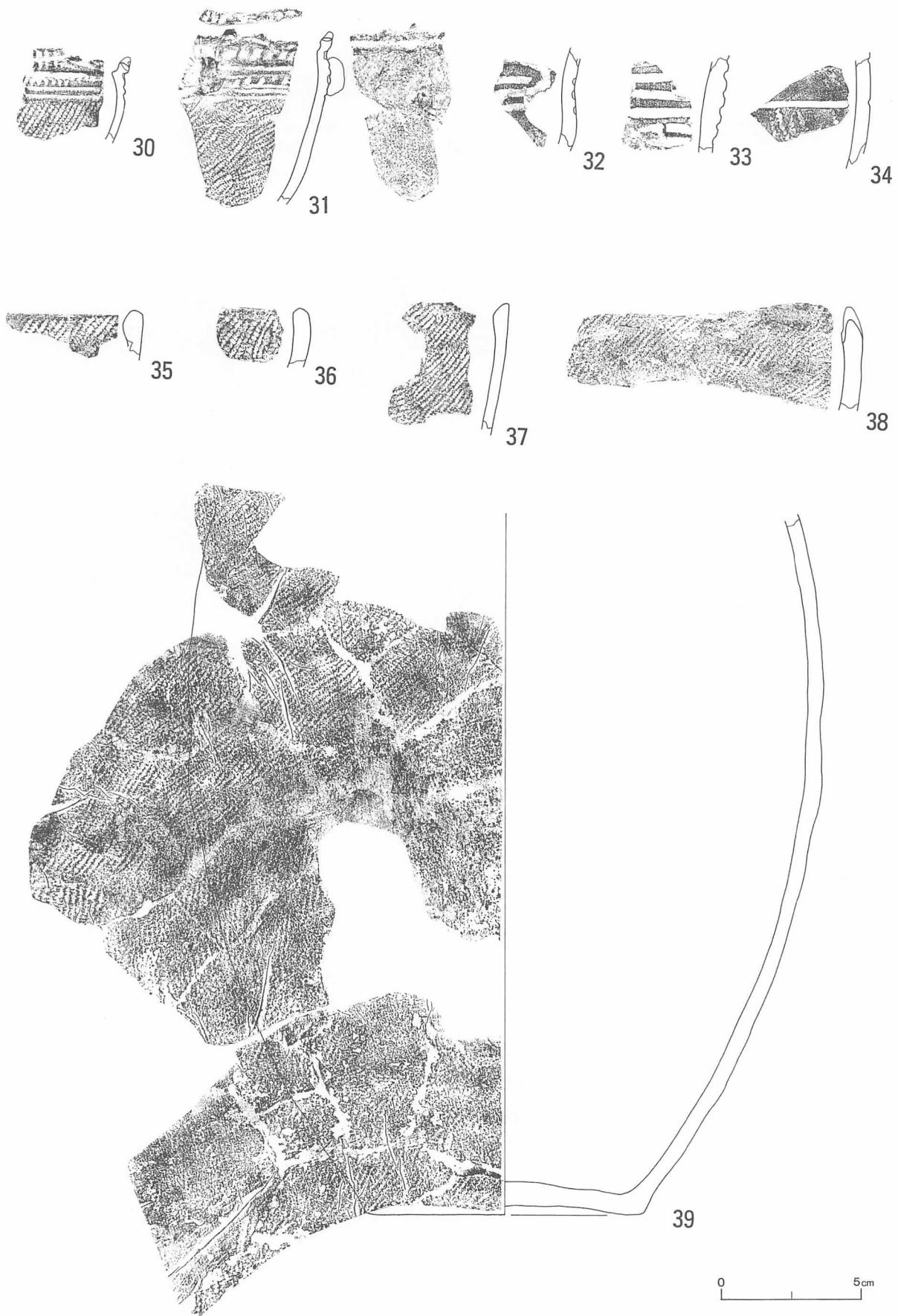


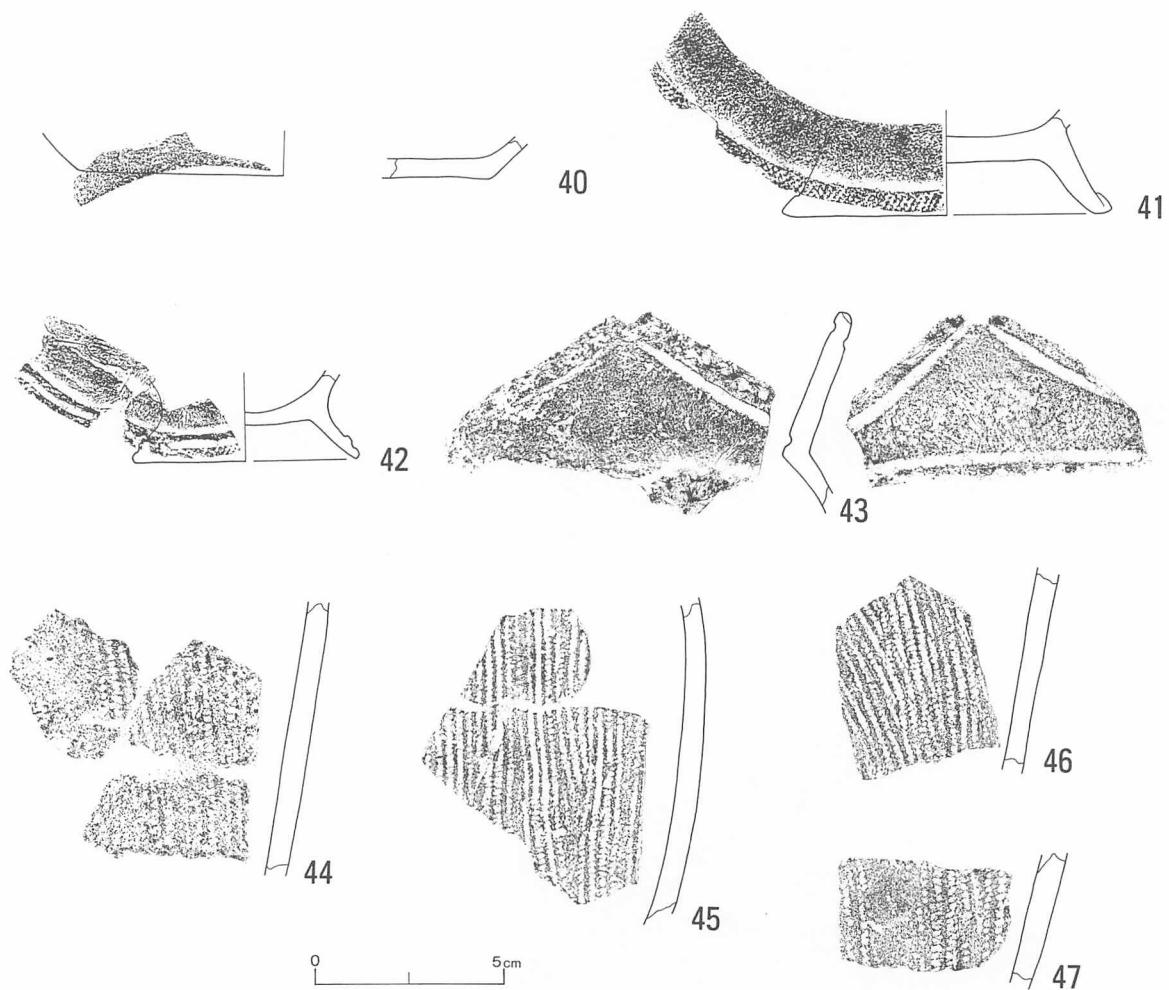
図 IV-9 包含層出土の土器 (2)



図IV-10 包含層出土の土器（3）



図IV-11 包含層出土の土器 (4)



図IV-12 包含層出土の土器（5）

V群B類土器（図IV-10・11-28～42、図版21・22）

文様から a類：刻み目をもつもの、b類：沈線が施されるもの、c類：縄文のみのものに分けられる。地文は全てL Rの斜行縄文である。

a類（28・30・31）口唇部に刻み目をもち、内面に一条の沈線が施されている。28は口縁が内屈する深鉢形土器である。口縁の内外面に斜位の浅い沈線が施される。底部は上げ底である。28・30は貼瘤がつく。30・31は口縁に小突起をもつ。

b類（28～34）29は壺形土器である。口縁部下端から上部は無文、下部は縄文が施されている。口縁直下には太い沈線が口縁部下端には細い沈線が施される。32～34は比較的太い沈線が施される。

c類（35～39）口唇断面が先細りになるもの（37・38）と丸みのあるもの（35・36）がある。39は体部上半が内傾し、底部が上げ底気味になる。

底部（40～42）41・42は台付き鉢の台である。底端部が肥厚し、縄文が施されている。

VI群（図IV-12-43～47、図版22）

43は山形の口縁部で、頂部が刻み目により二分されている。口唇部には刻み目がつく。口唇部直下と内面には比較的太い沈線が施されている。44～47は胴部破片である。縦走する縄文が施されている。

（佐藤和雄）

2. 石器・石製品

遺物包含層から出土した石器等の総点数は1,980点で、内訳は石器、石製品が241点、剝片が1,706点、礫他が33点である。全体の分布をみると、包含層が比較的に遺存していた調査区南西部で多く出土している。石器の出土数ではRフレイクが最も多い、石鏃、両面調整石器、スクレイパー、石核も多い。礫石器は全体的に少ない。

石鏃 (1~10)

10点出土。全て頁岩製である。1~7は無茎のもので、基部が1はわずかに、2~4は浅く湾入する。8~10は有茎のもの。1~3・5・7は裏面に主剝離面を残し、1~3・5は縦長剝片を、7は横長剝片を素材とする。4・6・9・10は先端を欠失する。

石錐 (11・12)

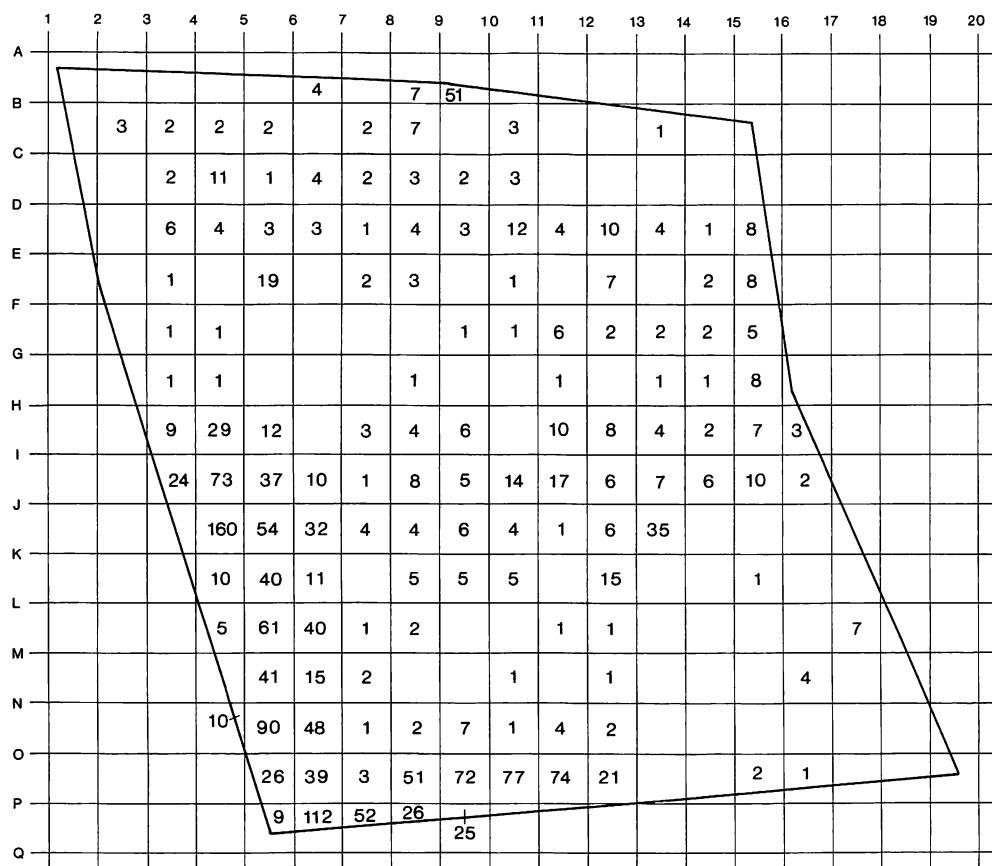
2点出土。11・12共に頁岩製でつまみ部を有する。11は黒曜石製で石鏃の転用品の可能性がある。

石槍 (13)

1点出土。13は頁岩製で尖頭部が傾いており、ナイフとして使われた可能性もある。

つまみ付きナイフ (14・15)

3点出土。2点図示した。14は黒曜石製で横長剝片を素材とする。表面のほぼ全面と裏面の右側縁に細部調整が施される。つまみ部を一部欠失している。



図IV-13 石器出土分布

箇状石器 (16~19)

4点出土。いずれも縦長剝片を素材とする両面調整のもので、裏面に素材面を残す。18・19は裏面の周縁部にのみ細部調整が施される。

スクレイパー (20~27)

10点出土。図示した8点はいずれも縦長剝片を素材としている。20~23は両側縁に刃部が作り出されている。20・22は裏面にも細部調整が施される。また、20は柄が作り出されている。24は一側縁に急角度の細部調整による分厚い刃部が作り出されている。26は一側縁に両面からの細部調整により刃部が作り出されている。

抉入石器 (28・29)

2点出土。どちらも縦長剝片を素材とする。28は主剝離面側に深い抉りが作り出されている。29の抉りは浅く、幅が広い。

両面調整石器 (30・31)

11点出土。図示した2点はほぼ両面全体に細部調整が施される。30は横長剝片を、31は縦長剝片を素材としている。

たたき石 (32~36)

5点出土。32・34は表面と一側面にたたき痕がみられ、表面のたたき痕は深めである。33は両面及び二側面にたたき痕がみられる。表面は細かく、深いたたき痕で、その他のものはやや浅めである。35・36は側面にのみたたき痕がみられる。36はチャートを素材としている。

すり石 (37~43)

9点出土。7点図示した。37は表面に幅の広いすり面がみられる。39~40はいわゆる扁平打製石器。いずれも幅の狭いすり面をもち、部分的に欠失する。41~43は細長いすり面をもつもの。3点全てにたたき痕がみられ、すり石とたたき石の複合的な用途が考えられる。たたき痕は全体的に深い。42はすり面の幅がやや広い。

砥石 (44・45)

8点出土。2点図示した。44は欠失部分が多く、表面の一部は剥落している。砥面は非常によく使い込まれている。また、両面に線状の擦痕がみられる。

石錘 (46~50)

7点出土。5点図示した。いずれも偏平な拳大の大きさの礫を素材とする。46は3ヵ所に打ち欠きが施される。47~50は礫の長軸の両端に両面から打ち欠きが施される。49は表裏1回の打ち欠きにより、抉り部を作り出しているが、それ以外のものは複数回による打ち欠きが施される。

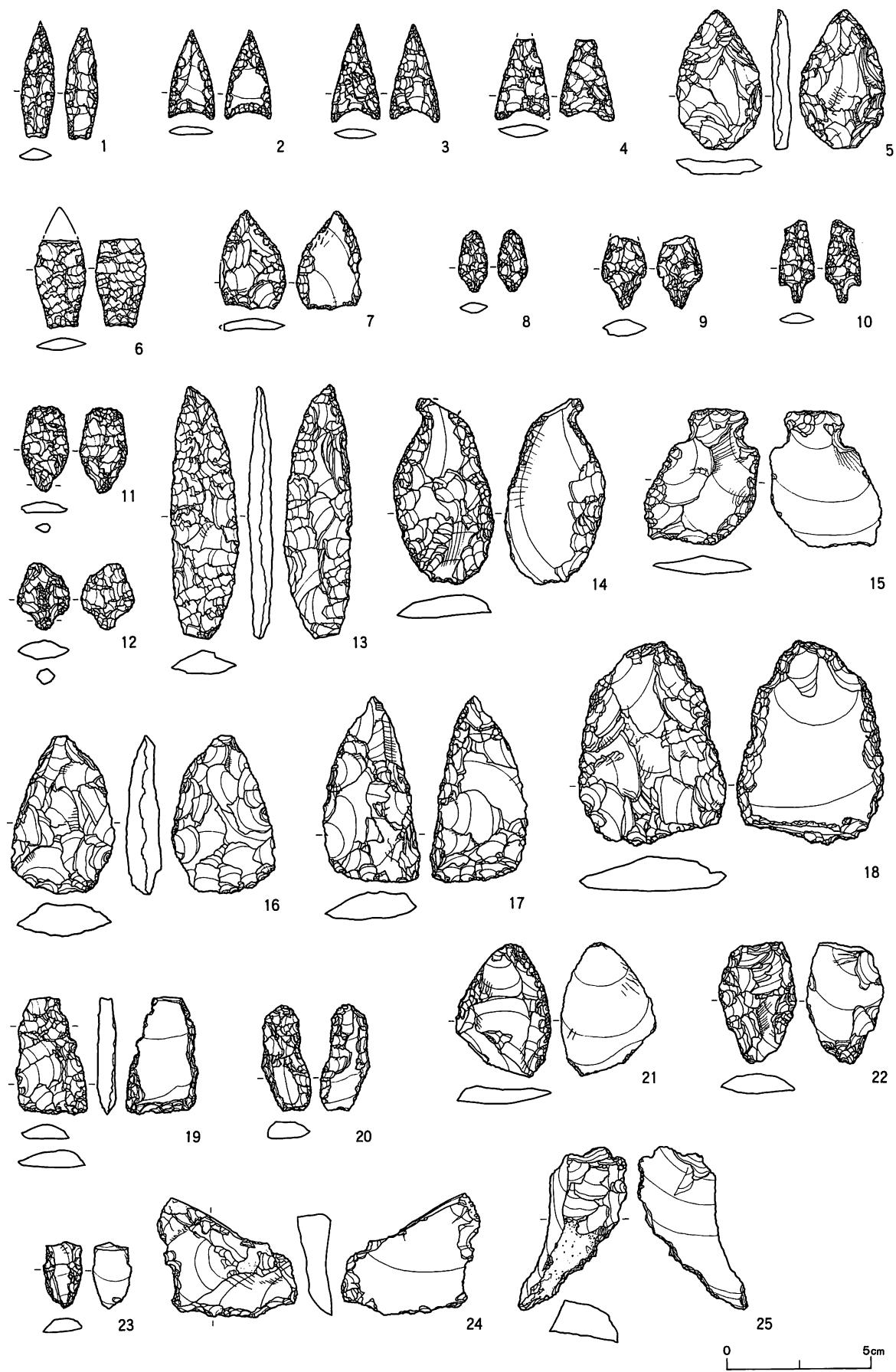
台石・石皿 (51・52)

2点出土。51は表面ほぼ全面にすり面が形成され、すり面の内側にはたたき痕もみられる。52は扁平な礫の一面を素材とし、すり面は非常によく使い込まれている。

異形石器 (53)

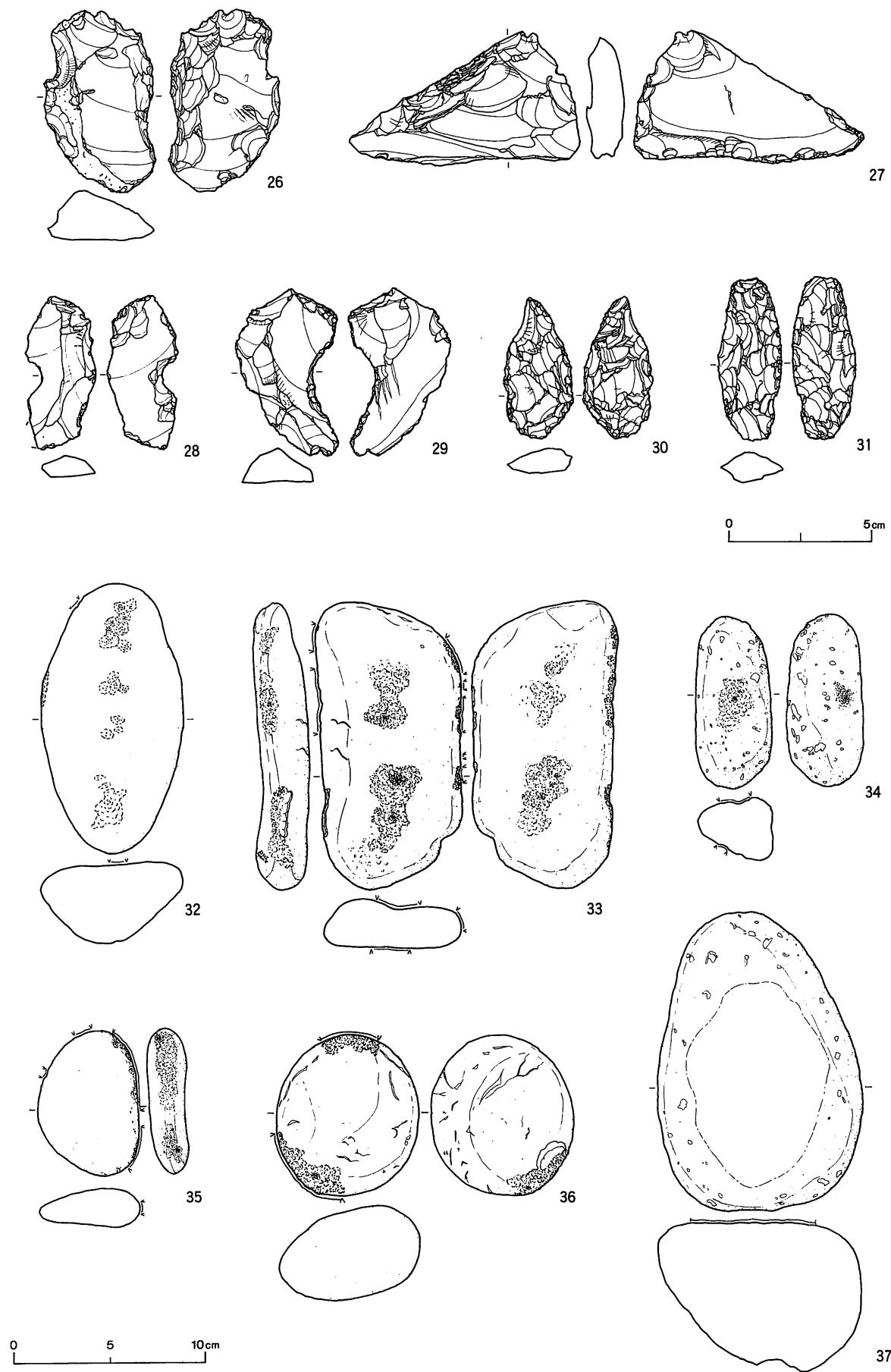
1点出土。両面全体に細部調整が施され、一部を欠失する。

(広田良成)

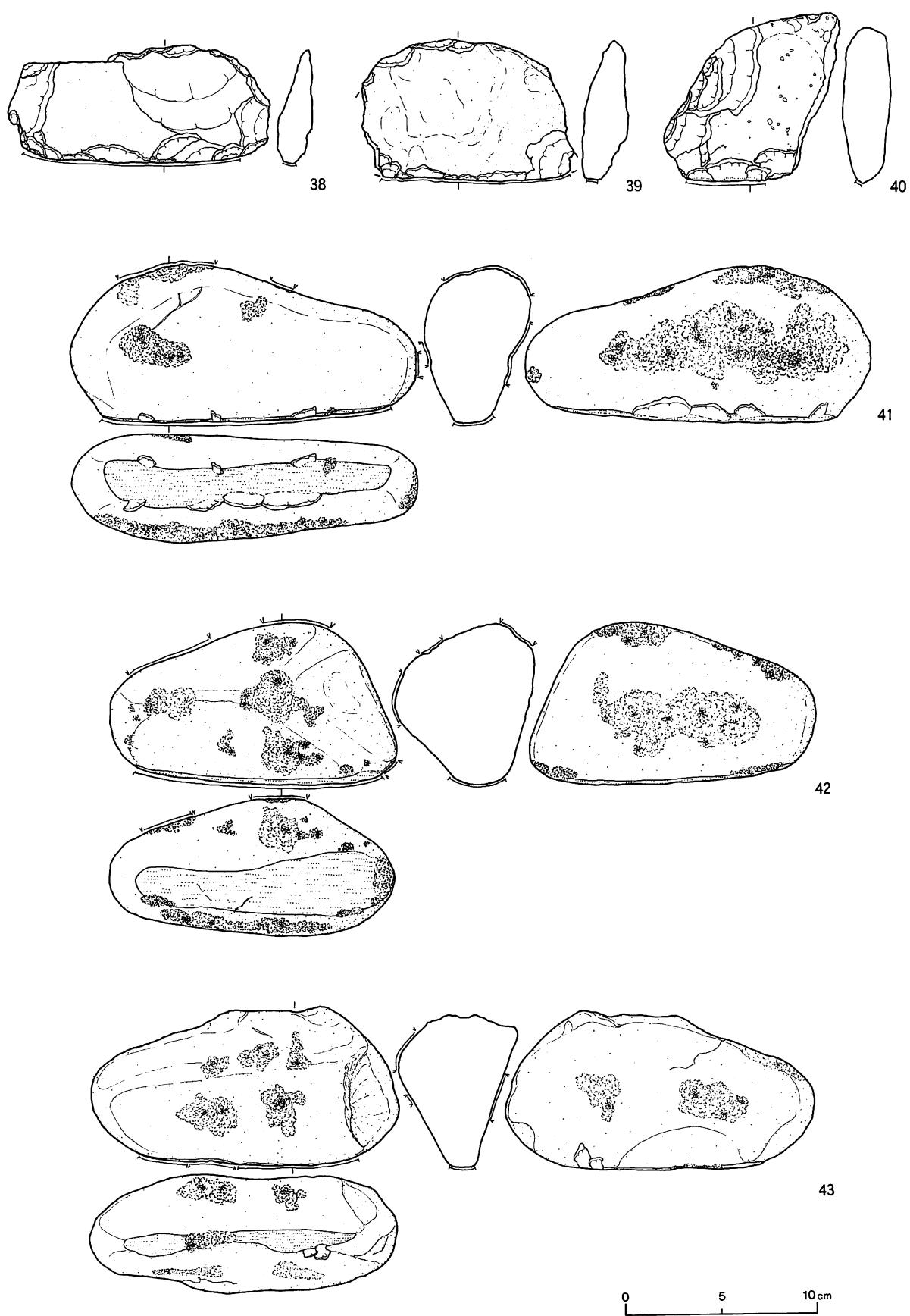


図IV-14 包含層出土の石器（1）

IV 包含層出土の遺物

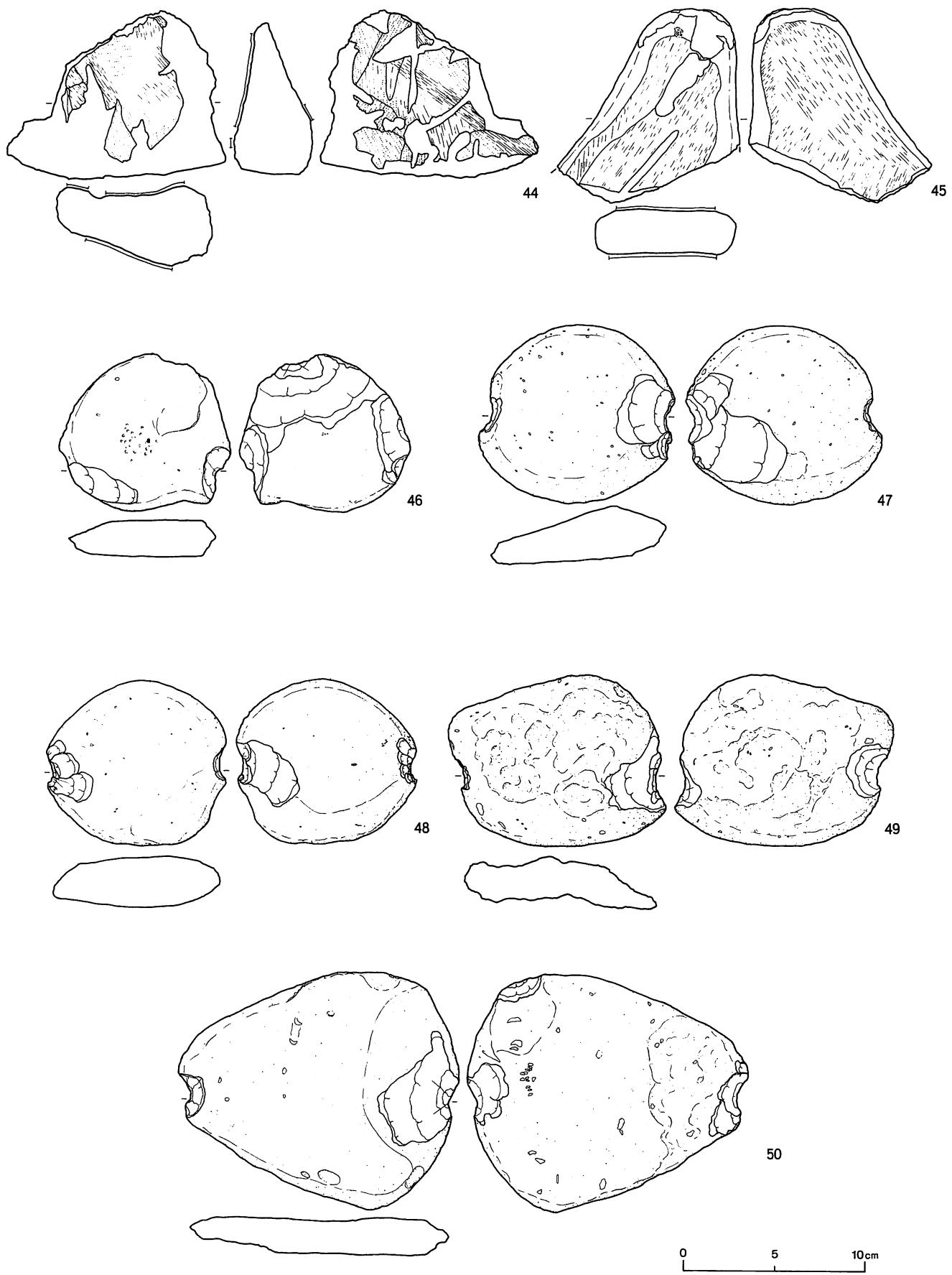


図IV-15 包含層出土の石器（2）

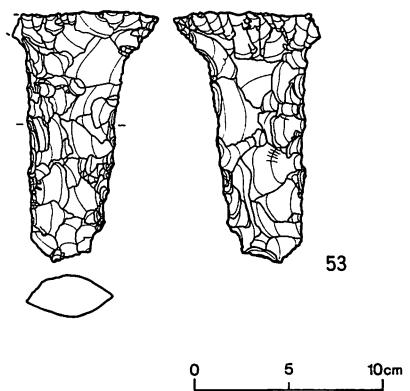
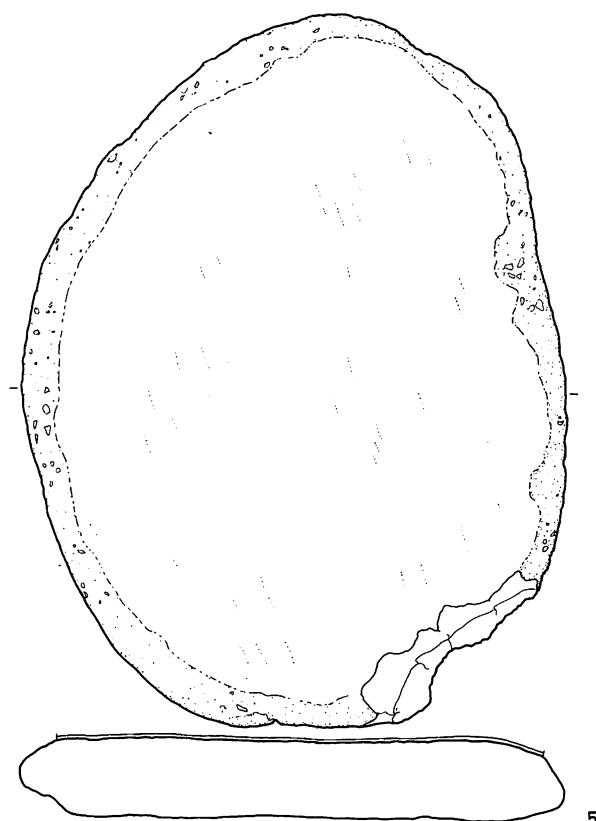
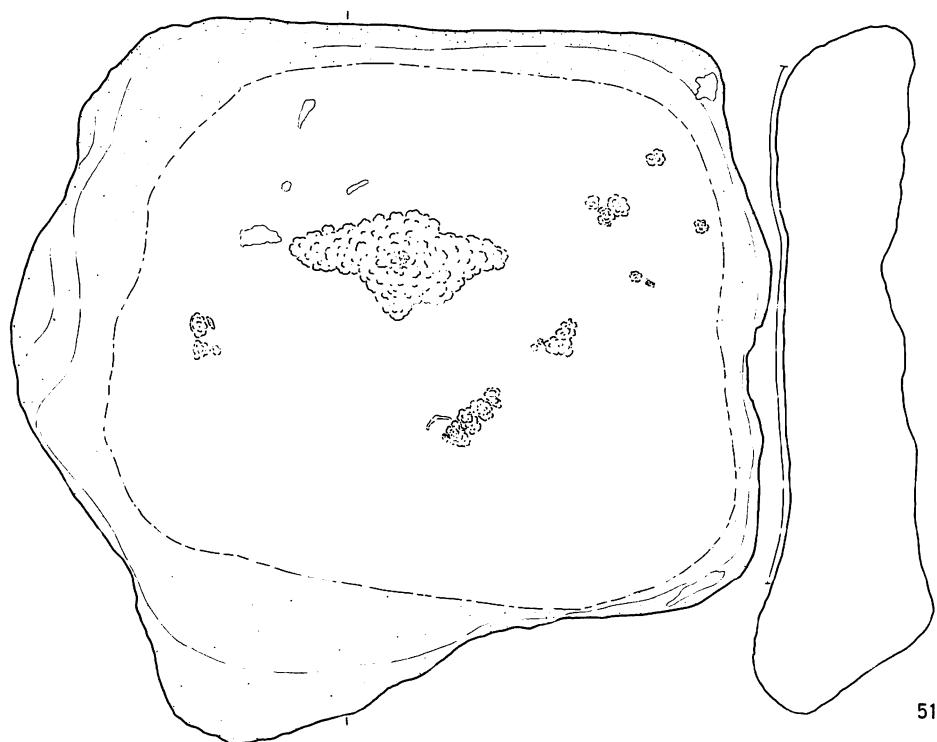


図IV-16 包含層出土の石器（3）

IV 包含層出土の遺物



図IV-17 包含層出土の石器（4）



図IV-18 包含層出土の石器（5）

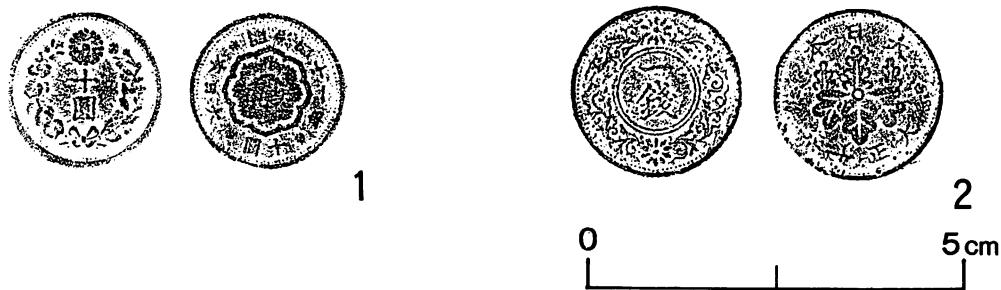
V 表土出土の遺物

表土除去作業中、近代貨幣が2点出土した。

1は新十円金貨で明治41年発行のものである。耕作時によるものと思われる細かい傷が全体的にみられる。2は桐1銭青銅貨で大正十一年発行のものである。全体的に鏽が付着している。

新十円金貨は明治30年（1897）から明治43年（1910）までの13年間にわたって発行された金貨で、明治41年（1908）には1,160,674枚発行されている。直径は21.21mm、品位は金900／銅100で量目は8.33gである。桐1銭青銅貨は大正5年（1916）から昭和13年（1938）までの22年間にわたって発行された青銅貨である。直径は23.03mm、品位は銅950／錫40／亜鉛10で、量目は3.75gである。

（広田良成）



図V-1 表土出土の遺物

VI まとめ

1 NH-2 住居跡と埋設土器1について

(1) NH-2 住居跡について

本遺跡のNH-2は焼失住居で、時期は床面出土遺物から縄文時代晚期中葉大洞C₁式期に比定される。当該期の住居跡については北海道、特に道南地方においては類例が少ないため、不明な点が多い。そこで本遺跡のNH-2を含め、道南地方の大洞式期の住居の形態について若干の考察を行ってみたい。

道南地方における縄文時代晚期の住居跡の検出例としては、札刈遺跡(野村1974)、日ノ浜遺跡(伴1966)、豊崎N遺跡(阿部1994)が挙げられる。ただし、日ノ浜遺跡は正式な報告がされていないためここでは扱わないことにする。札刈遺跡では2軒の竪穴住居跡が検出されている。1号住居跡は焼失住居で、全体の約半分が壊されている。残存部は直径3.1mの半円形のプランを呈し、確認面から床面までは約10cmを測る。中央に土器埋設炉を有し、壁に沿って深さ約4~5cmの浅い周溝が検出された。また、周溝際には小ピットが2基検出された。時期は晚期中葉大洞C₁式期である。2号住居跡は4条の周溝が同心円状に検出され、4回の建て替えが考えられている。最も新しい時期のものが床面出土遺物から晚期中葉大洞C₂式期に比定されている。直径4.2mでほぼ円形のプランを呈し、確認面から床面までは約10~15cmを測る。炉は中央に位置し、石囲いの一部が検出されている。また、炉内に土器が埋設されていた可能性もある。豊崎N遺跡では竪穴住居跡(H-20)が1軒検出されている。H-20は平面形が直径約4mの円形を呈し、壁は急に立ち上がる。確認面から床面までは最も深い場所で約40cmを測る。床面中央よりやや北寄りに地床炉を有する。壁際には深さ・幅とも15~25cmの周溝が巡っている。柱穴は周溝沿いに、ほぼ等間隔で配列される。掘り込みは中央に向かって斜めに傾くものが多い。時期は床面出土の遺物から晚期中葉大洞C₂式期と考えられる。

次に本遺跡のNH-2と上記の2遺跡の検出例との比較を行い、道南地方の大洞C₁~C₂期の住居の特徴を考えてみたい。住居の時期はいずれも晚期中葉である。住居の形態としては3遺跡とも竪穴式住居で、本遺跡例と札刈遺跡の2軒は、堀込みが浅く、豊崎N遺跡はやや深い。プランは、上記の3軒はほぼ円形で、本遺跡例は不整の長楕円形であり、およそ円ないし楕円の範疇で捉えられる。規模は、3~7mと住居によってばらつきがみられる。炉は、どの住居でもほぼ中央に設置されている。ただし、炉の形態は、本遺跡例と札刈遺跡1号住居跡が土器埋設炉、札刈遺跡2号住居跡が石囲い炉と土器埋設炉の併用、豊崎N遺跡例が地床炉で、土器埋設炉が比較的多い。土器埋設炉に関しては、札刈遺跡1号住居跡の例は土器の内側に粘土をつめて固定し、本遺跡例は粘土を使用していない点に違いがある。ピットは、札刈遺跡1号住居跡では周溝際に2基確認された。2号住居跡では重複のためピットの所属は不明だが、配置をみるとどの時期も壁柱穴としてピットが伴う可能性が高い。また、豊崎N遺跡例は柱穴が周溝沿いに規則的に配列されている。本遺跡例は壁際にピットが多く、いくつかは豊崎N遺跡例同様内傾することから、壁柱穴であったと考えられる。周溝については、札刈遺跡例、豊崎N遺跡例が周溝を明確に伴うのに対し、本遺跡例では確認されなかった。

以上道南地方の大洞C₁~C₂期の竪穴住居跡について比較を行った。その結論として、上記の4例の住居跡は以下に述べることについて共通性が高い。プランがほぼ円形ないし楕円形である。住居の堀込みが浅い例が多い。炉を有し、炉が住居のほぼ中央に設置される。土器埋設炉が多い。相違点としては、住居の規模、柱穴の配置、が挙げられる。

次に道南地方の大洞C₁～C₂式期の住居跡にみられる特徴を、晚期の堅穴住居跡の類例が比較的豊富な青森、岩手の両県の出土例と比較してみる。時期は今回取り上げた3遺跡の例が、大洞C₁ないしC₂期のためこの時期に限定する。青森、岩手県の大洞C₁～C₂期の住居跡の調査が行われている遺跡としては、青森県では牛ヶ沢(3)跡(青森県教委1983)、石ノ窪(2)遺跡(青森県教委1984)、松元遺跡(青森県教委1978)、右エ門次郎窪遺跡(青森県教委1982)等があり、岩手県では道地III遺跡(岩手県埋文センター1983)、滝谷III遺跡(岩手県埋文センター1983)、安堵屋敷遺跡(岩手県埋文センター1983)、吠屋敷Ia遺跡(岩手県埋文センター1983)等が挙げられる。時期別にみるとC₁期7軒、C₂期5軒、晚期中葉とされるもの4軒、計16軒を分析の対象とした。この地域の大洞C₁～C₂期の住居の傾向として、(1)規模は直径2～7mの範囲におさまり、3～4mのものが主である。(2)平面形は不整形もあるが、多くは円形か不整の円形、橢円形である。(3)住居跡の堀込みは比較的深いものが多い。(4)全ての住居跡に炉があり、中央ないし中央からややずれる場所に位置する。(5)炉の形態としては土器埋設炉、石囲い土器埋設炉もみられるが、地床炉、石囲い炉がほとんどである。(6)周溝をもつ住居が非常に少ない。(7)柱穴はみられないか、もしくは壁または壁際近くに円形に配置されるものがほとんどである。(8)焼失住居が少ない。

という点が挙げられる。この傾向を本遺跡と札刈遺跡の住居にあてはめてみると、(1)、(2)、(4)、(7)については同様の傾向を指摘できる。(3)、(5)、(6)、(8)については青森、岩手県と道南部では違いがみられる。(3)については道南部のものは浅いものが多く、(5)は道南部の炉の形態は土器埋設炉ないし石囲いと土器埋設炉の併用が多い。(6)については道南地方の例では本遺跡N H-2以外は周溝を有し、傾向が異なる。(8)は道南地方では大洞C₁～C₂期の4例中2例が焼失住居であると考えられるのに対し、青森、岩手県では明らかに焼失住居であると考えられる住居は大洞C₁期の牛ヶ沢(3)遺跡第5号住居跡のみである。大洞C₁～C₂期の住居の全体的な特徴として、規模は3～4mのものが主体で、平面形は円形に近いものが多い。基本的に炉を住居の中央付近に設置する、ということが多い。また、道南部の地域的な特徴としては堀込みの浅い例が多いこと、土器埋設炉ないし石囲いと土器埋設炉の併用が多いこと、周溝を有するものが多いこと、焼失住居が多いこと、が挙げられる。これらを考慮に入れると先に道南部の住居の相違点として挙げた住居の規模、柱穴の配置については、それぞれ大洞C₁～C₂期の住居の全体的な範疇で捉えてよいと思われる。また、道南地方では日ノ浜遺跡例を除き、現在確認されている晚期の住居跡が大洞C₁～C₂式期のみであることも現時点での特徴と言える。

青森、岩手県の大洞C₁期とC₂期における住居のありかたの違いをみると、大洞C₁期には地床炉が最も多く、石囲い炉、土器埋設炉等が少ないのでに対し、大洞C₂期にはほとんどが石囲い炉である点が注目される。道南地方では大洞C₁期の2例が土器埋設炉、大洞C₂期の2例は石囲いと土器埋設炉の併用と地床炉であり、大洞C₁期からC₂期にかけての炉の形態の変遷も地域的な差を指摘できる。また、C₁期の住居跡がいずれも焼失住居であり、C₂期では焼失住居と考えられる例がない点も道南地方の特徴と言える。

以上大洞C₁～C₂式の住居に関して青森、岩手県との比較から道南地方の様相を考えてみた。今回は時期的には大洞C₁～C₂期の時期に、地域的には道南地方と青森、岩手県に限定している。亀ヶ岡文化全体の中における該期の位置付けを考えるには、時期、地域共により大きな視野から考える必要がある。

る。資料の絶対数が少ないこともあり、現時点では上記の傾向がみられるという指摘にとどめ、今後の良好な資料の蓄積を待ちたい。

北海道において晚期の焼失住居と考えられる例は非常に少なく(大島1994)、現在確認されているのは札刈遺跡1号住居跡と、本遺跡NH-2の2例のみである。前述のとおりNH-2と札刈遺跡1号住居跡はともに大洞C₁期の所産であり、形態、遺物出土状況等も共通する点が多い。これらを考慮に入れると、この2例の焼失住居は単なる偶発的な不慮の火災ではなく、意図的な放火の可能性も考えられる。また、住居構造に関しては、NH-2の炭化材は大きな焼土ブロックの直下から検出されており、竪穴住居跡の上屋の被覆土が焼け落ちたものである可能性が高い。類例としては登別市千歳6遺跡(瀬川1982)、函館市西桔梗E2遺跡(加藤1974)が挙げられ、これら同様土葺屋根であったと考えられる。

(2) 埋設土器1について

埋設土器1の掘り方はNH-2の覆土を掘り込んでおり、NH-2が埋まった後に作られている。位置はNH-2の南側にあたる。埋設土器1の時期はNH-2と同じ大洞C₁期と考えられ、埋まってからあまり時間差をおかずに土器が埋設されたと思われる。埋設土器内からはフレイクが6点出土しており、類例として栄町5遺跡(北海道埋文センター-1990)P-8が挙げられる。栄町5遺跡の報告ではP-8を墓としてとらえており、本遺跡例もその可能性がある。ただし、本遺跡の例と異なり、栄町5遺跡P-8は大洞A式期の所産で、土器に炭化物の付着はみられない。本遺跡のNH-2及び埋設土器1の出土状況からは、住居に意図的に火を放ち、焼け落ちた後に土器を埋設するという行為が想定される。行為の性格は不明だが、可能性としては住居の廃絶に伴う儀礼もしくは廃屋葬的なものが考えられる。類例が見当らないため、今回は可能性の指摘にとどめる。

(広田良成)

2 I群B×類土器について

今回の調査ではNP-7の覆土や遺構外の遺物包含層からやまとまって出土している。今回の資料の特徴は綾杉状の縄文が施されているものが少なく、口唇部に縄文や刺突をもつものが多い。1は唯一復元された個体である。口縁部が外反し、器面には単節の羽状文風の縄文が施される。縄文は口唇部にも施されている。胎土には砂粒と少量の纖維が含まれる。18は底部近くの破片で尖底、あるいは小型の平底になると考えられるもので表館VII群(青森県教委1988)に近いものである。1・14・15の羽状文風の縄文や17の平底で底端面に縄の圧痕が施されるものは東釧路III式に通じるものがある。

平成7年度の西桔梗1遺跡の資料は綾杉状の縄文が施されるものが多く、さらに胎土や口縁部・底部の特徴からみて表館VI群の一部にちかいものと考えられている(工藤1996)。今回の資料との比較から時期差があるものと考えられる。

類似の資料は次の遺跡で出土している。函館市豊原2遺跡(中村・佐藤1994)では表館VI群からX群に相当するものがまとまって出土している。函館市西桔梗E1遺跡(岡島1974)では西桔梗式・早稻田5類が出土した。函館市石倉貝塚(越田・村田1996)では表館VIII群・IX群の一部に相当するものが出土している。

最近、この時期の北海道と青森県の資料に関する考え方は二つある。東釧路II式を表館VIII群に対比する考え方(西田1993)と東釧路II式を表館VI群に東釧路III式を表館VIII群・IX群に対比する考え方(熊谷1994)である。どちらが妥当な考え方かは、現在層位的に追及できる資料がないため示すことができない。ただし本遺跡の資料のうち平成7年度のものは東釧路II式に、今回出土の資料の一部は東釧路III式に相当するものと考えている。

(佐藤和雄)

引用・参考文献

- 青森県教育委員会 1977 「縄文時代晚期の住居址について」『源常平遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第39集
- 青森県教育委員会 1978 『松元遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第46集
- 青森県教育委員会 1981 『右エ門次郎窪遺跡 三合山遺跡 石ノ窪遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第69集
- 青森県教育委員会 1983 『牛ヶ沢(3)遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第86集
- 青森県教育委員会 1984 『石ノ窪(1)・石ノ窪(2)・古宮遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第92集
- 青森県教育委員会 1988 『表館(1)遺跡III』青森県埋蔵文化財調査報告書第120集
- 阿部千春 1994 「豊崎N遺跡」北海道南茅部町教育委員会
- 大島直行 1994 「縄文時代の火災住居－北海道を中心として－」『考古学雑誌』80巻1号
- 大沼忠春 1984 「道南の縄文前期土器群の編年について」『北海道考古学』第20号
- 大沼忠春 1986 「道南の縄文前期土器群の編年について(II)」『北海道考古学』第22号
- 熊谷仁志 1994 「縄文前半期 早期・前期・中期」『北海道考古学』第30号
- 児玉作左衛門他 1958 『サイベ沢遺跡』市立函館博物館
- (財)岩手県埋蔵文化財センター 1982 『川向III遺跡発掘調査報告書』 岩手県埋文センター文化財調査報告第26集
- (財)岩手県埋蔵文化財センター 1983 『滝田III遺跡発掘調査報告書』 岩手県埋文センター文化財調査報告第49集
- (財)岩手県埋蔵文化財センター 1983 『冴屋敷Ia遺跡発掘調査報告書』 岩手県埋文センター文化財調査報告第61集
- (財)岩手県埋蔵文化財センター 1983 『道地II遺跡・道地III遺跡発掘調査報告書』 岩手県埋文センター文化財調査報告第64集
- (財)岩手県埋蔵文化財センター 1983 『安堵屋敷遺跡』 岩手県埋文センター文化財調査報告第74集
- 佐藤達男他 1957 「青森県上北郡早稻田貝塚」『考古学雑誌』43巻2号
- 瀬川拓郎 1982 「千歳6遺跡における竪穴の構造と集落の変遷」『札内台地の縄文時代集落址 北海道登別市千歳6遺跡発掘調査報告書』
- 田原良信 1981 『権現台場遺跡』 函館市教育委員会
- 田原良信 1985 『サイベ沢遺跡』 函館市教育委員会
- 田原良信・鈴木正語 1985 『サイベ沢遺跡II』 函館市教育委員会
- 田原良信 1989 『陣川町遺跡』 函館市教育委員会
- 地学団体研究会道南班 編 1989 『道南の自然を歩く』
- 千代 肇 編 1974 『西桔梗』 函館圏開発事業団
- 中村公宣・佐藤智雄 1994 『豊原2遺跡』 函館市教育委員会
- 西田 茂 1993 「ふたたび東釧路II式について」 潮見浩先生退官記念論文『集考古論集』
- 日本貨幣商協同組合 編 1997 『日本貨幣カタログ 1997』
- 野村 崇 1974 『札刈』 木古内町教育委員会
- 伴 哲郎 1966 「日ノ浜遺跡発掘調査概報」『渡島』No.2 函館ラサール高校考古学部
- 深澤敦仁 1992 「竪穴住居の屋根葺代について－研究史を通じての「草葺屋根」への疑問－」『同志社大学考古学シリーズV考古学と生活文化』
- 森田和忠・高橋正勝 1967 『サイベ沢B遺跡調査報告』 市立函館博物館、亀田町教育委員会
- (財)北海道埋蔵文化財センター 1988 函館市 『石川1遺跡』 北埋調報45
- (財)北海道埋蔵文化財センター 1988 函館市 『桔梗2遺跡』 北埋調報46
- (財)北海道埋蔵文化財センター 1988 木古内町 『新道4遺跡』 北埋調報47
- (財)北海道埋蔵文化財センター 1990 余市町 『栄町5遺跡』 北埋調報66
- (財)北海道埋蔵文化財センター 1994 七飯町 『鳴川右岸遺跡』 北埋調報87
- (財)北海道埋蔵文化財センター 1996 函館市 『西桔梗1遺跡』 北埋調報99
- (財)北海道埋蔵文化財センター 1996 函館市 『石倉貝塚』 北埋調報109
- (財)北海道埋蔵文化財センター 1997 七飯町 『鳴川右岸遺跡・桜町遺跡』 北埋調報112

表4 遺構一覧(住居跡)

遺構番号	発掘区	規模(m)			確認面	長軸方向	備考
		確認面	床(底面)	深さ			
NH-1	D-3・4	2.78×2.12	2.70×1.96	0.12	V上面	N-22°-W	
2	M-5	(4.01)×(2.78)	(3.94)×(2.64)	0.56	III上面	N-17°-W	樹種同定・C14年代測定
3	M-5・6	—	—	—	V上面	—	床まで削平
4	N-6	—	—	—	〃	—	〃
5	M~O-11	(8.28)×(4.56)	(8.18)×(4.48)	0.17	〃	N-46°-W	N P-8と重複
6	D-1・2	(2.26)×(1.34)	(2.26)×(1.26)	0.22	〃	N-5°-W	

表5 遺構一覧(土壙)

遺構番号	発掘区	規模(m)			確認面	長軸方向	備考
		確認面	床(底面)	深さ			
NP-1	C-5	1.30×1.02	1.14×0.86	0.38	V上面	N-60°-W	
2	F-8	1.18×0.80	0.84×0.56	0.42	〃	N-88°-W	
3	M・N-8	1.22×1.04	0.90×0.70	0.30	〃	N-25°-E	
4	O・P-6・7	2.64×2.56	2.32×2.24	2.58	〃	N-24°-W	
5	O-6・7	0.80×0.72	1.58×1.62	0.78	〃	N-62°-E	TP-22と重複(新)
7	M-10	1.00×0.92	1.02×1.06	0.58	〃	N-38°-W	
8	N-11	1.42×1.38	1.14×0.98	1.04	〃	N-32°-W	NH-1と重複

表6 遺構一覧(Tピット)

遺構番号	発掘区	規模(m)			確認面	長軸方向	備考
		確認面	床(底面)	深さ			
TP-1	E-15	2.12×0.46	2.08×0.24	0.90	V上面	N-51°-W	
2	F-14	2.14×0.50	1.46×0.10	0.88	〃	N-74°-W	
3	G-13	3.00×0.60	3.04×0.10	1.00	〃	N-70°-W	
4	F・G-9	3.04×0.44	3.04×0.16	0.82	〃	N-57°-W	
5	D-13・14	1.10×0.48	1.16×0.12	0.94	〃	N-73°-W	
6	F-12・13	1.08×0.42	1.14×0.14	1.00	〃	N-61°-W	
7	G-11	1.18×0.32	1.10×0.18	0.98	〃	N-64°-W	
8	H-13・14	3.30×0.74	3.56×0.22	0.98	〃	N-84°-W	
9	E・F-10	2.16×0.32	2.12×0.12	1.06	〃	N-65°-W	
10	H-11・12	1.84×0.74	1.80×0.14	0.82	〃	N-69°-W	
11	E-10	1.84×0.42	1.62×0.10	0.88	〃	N-46°-W	
12	G・H-6	2.46×0.56	2.34×0.16	0.84	〃	N-17°-W	
13	E-6・7	1.88×0.46	1.90×0.46	0.86	〃	N-42°-W	
14	E-7	2.74×0.62	2.76×0.10	0.82	〃	N-47°-E	
15	I-7	2.72×0.40	2.50×0.16	0.80	〃	E-W	ND-1と重複(新)
16	H-4・5	3.36×0.88	3.26×0.20	1.02	〃	N-50°-W	
17	G-8	2.48×0.38	2.42×0.10	0.90	〃	N-52°-W	
18	G-8	2.30×0.52	2.44×0.22	0.90	〃	N-27°-W	
19	F-6	1.82×0.54	1.78×0.22	0.84	〃	N-28°-W	
20	L-6	2.00×0.70	1.88×0.24	0.98	〃	N-29°-W	
21	N-7・8	2.64×0.60	2.58×0.18	0.86	〃	N-51°-W	
22	O-6・7	(2.14)×(0.46)	(2.16)×(0.16)	0.86	〃	N-51°-W	NP-5と重複(旧)
23	K-8	1.82×0.46	1.56×0.14	0.88	〃	N-46°-W	
24	B-14	2.54×0.46	2.54×0.18	0.84	〃	N-52°-W	
25	B・C-13	2.54×0.40	2.12×0.10	0.84	〃	N-59°-W	
26	C-13	3.16×0.70	3.00×0.16	1.02	〃	N-62°-W	
27	C-8・9	1.66×0.54	1.84×0.24	1.06	〃	N-56°-W	
28	J-14・15	1.82×0.44	1.72×0.24	0.80	〃	N-71°-W	
29	J・K-9・10	3.08×0.80	1.86×0.14	1.00	〃	N-33°-W	
30	M-12	2.36×0.52	2.38×0.16	1.00	〃	N-87°-E	
31	H-4	2.20×0.30	2.32×0.12	1.02	〃	N-21°-W	
32	G-3	1.60×0.60	1.70×0.22	0.92	〃	N-25°-W	

表7 遺構一覧(溝跡)

遺構番号	深さ	確認面	備考
ND-1	0.08	V上面	TP-15と重複(旧)

表8 遺構一覧(埋設土器)

遺構番号	発掘区	確認面	備考
埋設土器1	M-5	NH-2覆土上面	NH-2と重複(新)

表9 遺構別出土遺物一覧（住居跡・土壙・Tピット）

遺構番号	名 称	分 類	数 量		遺構番号	名 称	分 類	数 量	
			覆 土	床 面				覆 土	床 面
NH-1	土 器	I B	2		TP-1	計		1	
		II B	11	56		礫		3	
		計	13	56		計		3	
	剝 石 片			14	TP-4	土 器	I B	4	
				1		計		4	
				1		剝 石 片		4	
				4		礫		3	
		円盤状土製品		1		計		7	
	計			21	TP-7	剝 石 片		1	
						計		1	
NH-2	土 器	II B	17		TP-9	土 器	I B	2	
		III A	1			計		2	
		V	12	43	TP-10	土 器	I B	1	
	計		30	43		計		1	
	スクレイパー		1			土 器	I B	2	
		剝 石 片	7	9		III A	5		
		礫	1	3		計		7	
	計		9	12	TP-12	剝 石 片 石 器 片		1	
NH-3	土 器	III A	1			計		1	
	計		1						
NH-5	土 器	I B	2		TP-15	土 器	I B	1	
		III A				V	5		
	計		2	22		計		6	
	スクレイパー		1			剝 石 片		2	
		R フレイク	1			計		2	
		剝 石 片	19		TP-16	土 器	I B	5	
		石 錐	1			計		5	
		礫	1	1		剝 石 片		2	
	計		23	1		礫		1	
NH-6	土 器	II B	10	130		計		3	
		V	1		TP-18	土 器	I B	3	
	計		11	130		計		3	
	剝 石 片 石 器 片		1			剝 石 片		1	
		輕 石	1			計		1	
	計		2		TP-19	土 器	II B	5	
NP-1	土 器	II A	3			計		5	
	計		3		TP-20	土 器	I B	1	
NP-2	剝 石 片		1			計		1	
	計		1		TP-21	剝 石 片		4	
NP-3	靴 形 石 器		1			原 石		1	
			1			計		5	
			1		TP-22	土 器	III B	1	
		磨 製 石 斧	1			計		1	
	石 盆	3				石 鏃		1	
	計		7			計		1	
NP-4	土 器	II A	10		TP-23	剝 石 片		1	
		計	10			計		1	
	R フレイク		1		TP-29	剝 石 片		3	
		剝 石 片	21			礫		1	
		た た き 石	1			計		4	
		礫	1		ND-1	土 器	I B	24	
	計		24			II B	1		
NP-5	土 器	I B	1			計		25	
	計		1			両面調整石器		1	
	剝 石 片 石 器 片		1			スクレイパー		1	
		剝 石 片	1			剝 石 片		138	
	計		2			礫		4	
NP-7	土 器	I B	30			石 製 品		1	
		III B	1			計		145	
	計		31		埋設土器	土 器	V		25
	剝 石 片		6			計			25
	計		6			剝 石 片			6(土器内)
TP-1	礫		1			計			6

表10 遺構出土掲載土器一覧（実測図）

遺構番号	挿 図	番 号	層 位	破 片 数	分 類	大きさ(cm)
NH-2	図III-5	1	床 (埋設)	29	V	口径 — 底径 — 器高(23.3)
NH-6	図III-10	1	床	117	II B	口径 32.7 底径 15.9 器高 47.3
埋設土器1	図III-29	1	NH-2 覆土	25	V	口径 — 底径 11.4 器高(18.2)

表11 遺構出土掲載土器一覧（拓影）

遺構番号	挿 図	番 号	分 類	層 位	遺構番号	挿 図	番 号	分 類	層 位
NH-1	図III-2	1	II B	床	N P-7	図III-14	5	〃	〃
		2	〃	〃	T P-5	図III-16	1	III A	覆土
		3	〃	〃	T P-9	図III-18	1	I B	覆土
NH-2	図III-5	2	V	床			2	〃	〃
		3	〃	覆土	T P-10	図III-18	1	I B	覆土
		4	〃	床	T P-12	図III-19	1	I B	覆土
NH-5	図III-9	1	III A	床			2	III A	〃
N P-1	図III-12	1	II A	覆土			3	〃	〃
		2	〃	〃			4	〃	〃
N P-4	図III-13	1	II A	覆土	T P-15	図III-20	1	I B	覆土
		2	〃	〃			2	V	〃
		3	〃	〃	T P-16	図III-21	1	I B	覆土
N P-7	図III-14	1	III B	覆土			2	〃	〃
		2	I B	〃	T P-18	図III-22	1	I B	覆土
		3	〃	〃	T P-19	図III-22	1	II B	覆土
		4	〃	〃			2	〃	〃

表12 遺構出土掲載石器一覧

遺構番号	挿 図	番 号	名 称	長さ×幅×厚さ(cm)	重さ(g)	石 材	層 位
NH-1	図III-2	4	石 皿	34.1 × 17.2 × 9.2	14000.0	安山岩	床
		5	円盤状土製品	5.0 × 5.2 × 0.4	27.8		床
NH-2	図III-5	5	スクレイパー	8.5 × 5.5 × 1.8	82.7	珪質頁岩	覆土
		2	〃	7.6 × 3.5 × 0.6	20.4		攪乱
NH-5	図III-9	3	Rフレイク	7.2 × 3.6 × 1.5	20.0		覆土
		4	石 錘	6.8 × 8.2 × 2.8	169.7	安山岩	覆土
N P-3	図III-11	1	靴形石器	8.8 × 3.4 × 1.2	36.6	珪質頁岩	覆土
		2	スクレイパー	(6.5) × 4.0 × 1.3	35.0		覆土
		3	フレイク	3.9 × 2.6 × 1.0	8.0	黒曜石	覆土
		4	磨製石斧	10.9 × 4.7 × 1.8	133.7	蛇紋岩	覆土
		5	石 皿	22.4 × (16.7) × 4.2	2350.0	安山岩	覆土
N P-4	図III-13	4	Rフレイク	6.0 × 3.7 × 2.3	28.6	珪質頁岩	覆土
		5	たたき石	11.9 × 9.2 × 4.7	869.6	安山岩	覆土
N P-22	図III-23	1	石 鏃	2.3 × 1.9 × 0.4	1.1	珪質頁岩	覆土
N D-1	図III-28	1	スクレイパー	4.9 × 4.6 × 1.2	27.1		覆土

表13 包含層出土揭露土器一覧（実測図）

挿図	番号	発掘区	層位	破片数	分類	大きさ(cm)
図IV-8	1	J-12-A O-12	木根 風倒木	79	I B	口径 33.6 底径 - 器高(20.7)
図IV-10	28	L-5-B	III上	49	V	口径 17.8 底径 7.7 器高 11.4
図IV-10	29	L-4-C -D	II II・III	40	V	口径 9.6 底径 - 器高(16.5)

表14 包含層出土揭露土器一覧（拓影）

挿図	番号	発掘区	層位	分類	挿図	番号	発掘区	層位	分類
図IV-8	2	L-5-A	III	I B	図IV-10	23	H-3-B	III	III A
	3	L-5	トレンチ	〃		24	I-3-D	II	〃
	4	L-5	I	〃		25	N-5	I	〃
	5	O-9-C	III	〃		26	I-3-A	III	IV C
	6	H-5	風倒木	〃		30	N-5-B	II	V
	7	H-3-B	III	〃		31	O-5	I	〃
		I-3-D	〃	〃		32	L-3	〃	〃
	8	O-10	I	〃		33	H-3-B	III	〃
	9	I-3-B	II	〃		34	H-4-A	〃	〃
	10	H-11-C	III	〃		35	H-5-A	II	〃
	11	H-11-B	III・IV	〃		36	M-5-B	〃	〃
	12	O-12	風倒木	〃		37	L-5	I	〃
	13	H-11-A	IV	〃		38	N-5-B	II	〃
	14	I-11-A	III・IV	〃		39	N-5-B	〃	〃
図IV-9	15	P-8-A	III	〃	図IV-12	40	P-8	I	V
	16	H-9	I	〃		41	J-9	〃	〃
	17	M-5	I	〃		42	O-5-C	III	〃
		L-5-C	III	〃		43	O-7	〃	〃
	18	K-5-C	IV	〃		44	H-3-B	II	VI
	19	P-5-D	II	III B		45	H-4-A	〃	〃
図IV-10	20	O-10-B	III	II A		46	H-4-A	〃	〃
	21	H-4-B	III	〃		47	H-3	I	〃
	22	D-3	I・II	II B					

表15 包含層出土揭露石器一覧

挿図	番号	名 称	長さ×幅×厚さ(cm)	重さ(g)	石 材	発掘区	層 位
図IV-14	1	石 鏃	3.8 × 1.1 × 0.5	1.7	珪質頁岩	J-5	I
	2	〃	3.1 × 1.5 × 0.3	1.4	〃	N-11-D	風倒木
	3	〃	3.4 × 1.5 × 0.5	1.6	〃	I-4-D	III
	4	〃	(2.8) × 1.7 × 0.6	2.1	〃	L-6	I
	5	〃	4.8 × 3.0 × 0.6	8.7	〃	P-6-A	II
	6	〃	(3.0) × 1.7 × 0.5	2.3	〃	H-3-B	II
	7	〃	3.4 × (2.1) × 0.5	3.2	〃	J-5	I
	8	〃	2.1 × 1.0 × 0.5	0.6	〃	N-9	I
	9	〃	2.5 × 1.5 × 0.7	2.2	〃	E-15	I
	10	〃	(2.9) × 1.2 × 0.5	1.3	〃	D-12	I
	11	石 錘	2.9 × 1.6 × 0.4	1.9	〃	M-5-A	III
	12	〃	2.2 × 1.8 × 0.6	2.5	〃	N-12	I
	13	石 槍	8.2 × 2.2 × 0.8	14.4	〃	I-3-B	III
	14	つまみ付ナイフ	6.4 × 3.3 × 1.0	14.7	〃	K-5-A	III
	15	〃	4.7 × 3.9 × 0.9	11.3	〃	P-6-A	II
	16	籠状石器	5.5 × 3.6 × 1.2	19.9	〃	J-5	I
	17	〃	6.4 × 3.1 × 1.0	21.3	〃	O-10	I
	18	〃	7.1 × 5.0 × 1.3	49.8	〃	B-3	I
	19	〃	4.1 × 2.3 × 0.7	7.6	〃	B-8	I
	20	スクレイパー	3.7 × 1.5 × 0.8	4.9	めのう質頁岩	D-12	I
	21	〃	4.6 × 3.2 × 0.6	8.8	珪質頁岩	C-10	I
	22	〃	2.7 × 4.2 × 0.7	6.8	〃	K-5	I
	23	〃	2.3 × 1.3 × 0.5	1.5	めのう	H-7	I
	24	〃	4.8 × 4.2 × 1.1	19.8	珪質頁岩	J-13	I
	25	〃	5.7 × 3.8 × 1.3	20.7	〃	M-5-A	II
図IV-15	26	〃	6.3 × 3.9 × 1.8	44.7	〃	O-11	I
	27	〃	8.0 × 4.6 × 1.3	40.5	〃	N-6	攪乱
	28	抉入石器	5.3 × 1.9 × 0.9	10.7	〃	I-8	I
	29	〃	5.8 × 3.6 × 1.3	20.6	〃	I-5	I
	30	両面調整石器	4.9 × 2.5 × 0.9	8.8	〃	O-5-C	III
図IV-16	31	〃	5.6 × 2.2 × 1.0	11.2	〃	P-9-D	II
	32	たたき石	14.0 × 7.5 × 4.0	373.4	凝灰岩	M-5-B	II
	33	〃	14.9 × 7.7 × 2.7	490.0	安山岩	C-4	I
	34	〃	8.9 × 4.0 × 3.3	115.0	〃	L-5-B	III
	35	〃	7.5 × 5.3 × 2.1	112.9	〃	J-5	I
	36	〃	8.3 × 7.5 × 4.7	400.0	チャート	N-11-A	風倒木
	37	すり石	15.6 × 10.7 × 7.9	17.7	安山岩	P-7-D	II
	38	〃	13.7 × 6.1 × 1.9	200.0	〃	K-4	I
	39	〃	11.0 × 7.4 × 2.3	255.0	〃	I-4	I
	40	〃	8.9 × 9.1 × 2.5	250.0	〃	G-3	I
図IV-17	41	〃	18.1 × 8.2 × 5.3	1076.0	砂岩	L-5-D	III
	42	〃	15.0 × 8.5 × 6.8	1098.0	安山岩	P-7-A	風倒木
	43	〃	16.1 × 8.4 × 5.9	932.4	〃	P-7-D	III
	44	砥石	12.0 × 9.2 × 4.2	350.0	〃	M-5	I
	45	〃	(10.6) × (10.1) × 2.4	260.0	〃	P-5	I
図IV-18	46	石 錘	9.5 × 8.7 × 2.5	200.0	〃	N-12	I
	47	〃	10.8 × 9.8 × 3.7	350.0	〃	K-4	I
	48	〃	9.9 × 9.0 × 3.0	270.0	凝灰岩	O-11	I
	49	〃	12.0 × 9.4 × 3.2	340.0	安山岩	J-5-B	III
	50	〃	15.5 × 13.2 × 2.7	675.0	〃	I-4-D	I
	51	石 盤	40.7 × 38.2 × 9.7	18200.0	〃	表採	
	52	〃	38.1 × 28.9 × 4.5	8720.0	〃	P-5	I
	53	異形石器	6.6 × 3.9 × 1.1	21.2	珪質頁岩	O-6	I

表16 表土出土掲載遺物一覧

挿図	番号	名称	直径(cm)	重さ(g)	発掘区
図V-1	1	新十円金貨	21.21	8.33	D-6
	2	桐一錢青銅貨	23.03	3.75	H-16

VII 自然科学的手法による分析結果

1 函館市西桔梗1遺跡出土の炭化した木材

三野 紀雄（北海道開拓記念館）

函館市西桔梗1遺跡の縄文晚期の住居跡から出土した炭化した木材について樹種の同定を行った。

1 試料及び方法

函館市西桔梗1遺跡の発掘調査で7軒の竪穴住居が検出され、そのうちの縄文晚期の住居1軒は焼失家屋で、その住居跡から炭化した木材が多量に出土した。出土した木材のうち21点について、樹種同定を行った。

試料は、風乾の後に3個の小片に分割し、それぞれの小片を木材組織の木口面、板目面、柾目面の3方向を観察できるように安行剃刀で削り、試料台にドウタイトD-550で接着し金蒸着の後、走査電子顕微鏡(JEOL-JSM-5200)で木材組織を観察し樹種を同定した。同定にあたっては、記載文献及び現生樹木の組織標本を参照した。

2 結果と若干の考察

炭化した木材の樹種同定の結果は、表1に示したとおり、樹種不明の1点を除き他のすべてはクリ(*Castanea crenata*)材であった。試料をクリ材とした根拠は次の木材組織の特徴によった。広葉樹環孔材、孔圈内の導管の配列は1ないし多列、孔圈外では小導管が火焰状に配列する、導管は单穿孔、射出線の細胞幅は1あるいは2列、集合射出線を有さない。

上記のとおり住居の材料として使用されていた樹木のほとんどがクリ材であったが、これは樹幹が直ぐに伸び、材の割裂きなど加工が容易であること、さらに耐久性のあることなどクリ材のもつ有益な特徴によるものと思われる。先史時代の本州各地で、クリ材は広い地域や時代を通して建築材、土木用材、道具・用具類の材料そして薪炭材として用いられることが多い³⁾。本道では、これまでの発掘調査からクリ材は、擦文時代の蘭島遺跡⁷⁾の鍛冶遺構での例を除き、主として縄文中期中葉から後期後葉さらに晩期にかけての道南地域の遺跡から検出され、住居の材料あるいは薪炭材として多用される例が多い^{2),4),5),6),7),8),9),10)}。

クリ材は上記のとおり道南地域の縄文中期中葉から晩期にかけて多用される例が多いが、クリが後氷期のいつ頃から道南地域に分布し、そして用材として活用できるほどの樹林をいつ頃形成したのか、またこのクリ材が住居などの材料として「いつ頃から使われ始め」「いつ頃まで多用され」そして「主役の座をいつ頃、どの樹種に譲ったのか」、さらには「その譲った理由は何か」を考古学的にまた植物学的に明らかにすることが、当面する道南地域での先史時代の木材利用に関する調査・研究課題といえる。

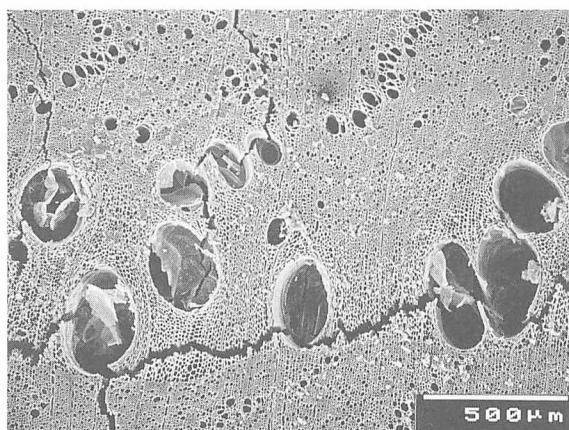
文 献

- 1) 須藤彰司 (1959) 本邦広葉樹材の識別 林業試験場報告 第118号
- 2) 石田茂男 (1974) 縄文時代住居址内発見の炭化材について 西桔梗一函館圏流通センター建築用地内遺跡調査報告書 北海道教育委員会
- 3) 千野裕道 (1984) 縄文時代のクリー炭化木材の樹種を中心にして一 歴史公論10巻6号
- 4) 三野紀雄 (1988) 新道4遺跡CH-2住居址から出土した炭化木材の樹種同定 新道4遺跡一津

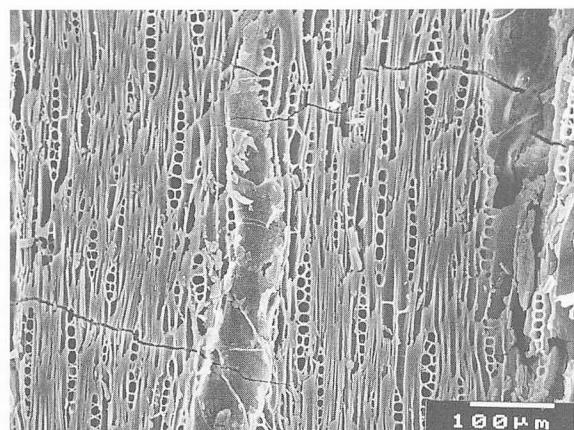
1 函館市西桔梗 1 遺跡出土の炭化した木材

軽海峡線（北海道方）建設工事埋蔵文化財発掘調査報告書(5) 北埋調報52

- 5) 三野紀雄 (1988) 石川 1 遺跡H—2 住居址から出土した炭化木材の樹種同定 石川 1 遺跡—一般国道 5 号線函館新道道路改良用地内埋蔵文化財発掘調査報告書 北埋調報45
- 6) 三野紀雄 (1988) 函館市桔梗 2 遺跡より得た炭化木片について 函館市桔梗 2 遺跡—一般国道 5 号線函館新道道路改良用地内埋蔵文化財発掘調査報告書 北埋調報46
- 7) 三野紀雄 (1989) 蘭島遺跡B地点鍛冶遺構出土の木炭片について 蘭島遺跡 小樽市教育委員会
- 8) 三野紀雄 (1991) 上藤城 7 遺跡出土の炭化木片について 上藤城 7 遺跡跡 七飯町教育委員会
- 9) 三野紀雄 (1996) 川汲遺跡出土の炭化木材 川汲遺跡 南茅部町教育委員会
- 10) 三野紀雄 (1997) 先史時代における木材の利用(2) 北海道開拓記念館研究紀要 第24号



試料No.2 クリ (*Castanea crenata*) 木口面



板目面

図1 炭化した木材の木材組織写真

表1 炭化した木材の樹種同定結果

No.	樹種
1	クリ (<i>Castanea crenata</i>)
2	クリ (<i>Castanea crenata</i>)
3	広葉樹環孔材
4	クリ (<i>Castanea crenata</i>)
5	クリ (<i>Castanea crenata</i>)
6	クリ (<i>Castanea crenata</i>)
7	クリ (<i>Castanea crenata</i>)
8	クリ (<i>Castanea crenata</i>)
9	クリ (<i>Castanea crenata</i>)
10	クリ (<i>Castanea crenata</i>)

No.	樹種
11	クリ (<i>Castanea crenata</i>)
12	クリ (<i>Castanea crenata</i>)
13	クリ (<i>Castanea crenata</i>)
14	クリ (<i>Castanea crenata</i>)
15	クリ (<i>Castanea crenata</i>)
16	クリ (<i>Castanea crenata</i>)
17	クリ (<i>Castanea crenata</i>)
18	クリ (<i>Castanea crenata</i>)
19	クリ (<i>Castanea crenata</i>)
20	クリ (<i>Castanea crenata</i>)
21	クリ (<i>Castanea crenata</i>)

2 西桔梗1遺跡のテフラ

花 岡 正 光

1 はじめに

本遺跡で認められたテフラについて記載する。テフラは、野外観察と鏡下観察のほか、鉱物の屈折率と化学組成を測定した。屈折率測定は(株)古環境研究所、化学組成測定はジオサイエンス(株)に依頼した。鉱物化学組成は別稿で報告する。

2 テフラの特徴

テフラ柱状図を図1、鉱物屈折率を表1、顕微鏡写真1に示す。本遺跡では四種類のテフラが認められた。

試料1とこれに対比されるテフラは、10YR7/4(にぶい黄橙色)のシルト質降下テフラで、局所的に旧地表の凹地にレンズ状に堆積したり、黒ボク土中に斑状に産出する。主に火山ガラスと斜長石から成り、少量の斜方輝石を含んでいる。火山ガラスは、泡壁がつくる模様が網目様を呈する軽石型で、屈折率は1.501-1.510である。斜方輝石の屈折率は1.711-1.713である。

試料2(試料4)とこれに対比されるテフラは、2.5Y6/4(にぶい黄色)-これよりやや黄色味強い-の砂質降下テフラで、ローム層のほぼ最上部、腐植土との境付近に産出する。層厚約6cmで、主に斜長石と角閃石から成り、少量の斜方輝石・单斜輝石を含んでいる。火山ガラスは軽石型で、屈折率は1.502-1.508である。角閃石の屈折率は1.670-1.675、斜方輝石の屈折率は1.708-1.713である。

試料3(試料6・試料7)とこれに対比されるテフラは、10YR4/4(褐色)、10YR6/6(明黄褐色)のシルト質降下テフラで、層厚10cmで断続的に産出し、やや土壤化している。本テフラは火山ガラスに頗る富み、アルカリ長石を含む。火山ガラスは、泡壁が纖維状に伸長した軽石型とバブルウォール型から成り、屈折率は1.514-1.523である。アルカリ長石の屈折率は1.523±である。

試料5は砂質の降下テフラで、試料1のテフラと試料3(試料6・試料7)のテフラとの間の層準に産出する。層厚約5mmで発達が悪い。本テフラは主に斜長石と軽石から成り、角閃石も比較的多い。火山ガラスは軽石型で屈折率は1.504-1.508である。角閃石の屈折率は1.683-1.689である。

3 テフラの対比

各テフラは、産出層準、鉱物組み合わせ、鉱物屈折率から、既知のテフラと次のように対比される。

試料1のテフラは駒ヶ岳起源の Ko-d(A.D. 1640。勝井ほか、1976。町田・新井、1992。)、試料2(試料4)のテフラは濁川カルデラ起源の Ng(約12000年前。柳井ほか、1992。)、試料3(試料6・試料7)は白頭山起源の B-Tm(約1000年前。町田・新井、1992。)に対比される。

試料5のテフラは現在未対比のテフラである。

引用文献

- 勝井義雄・横山 泉・藤田隆男・江原幸雄(19975)：「駒ヶ岳」。北海道防災会議。194pp。
 町田 洋・新井房夫(1992)：「火山灰アトラス」。東京大学出版会。276pp。
 柳井清治・鷹澤好博・森康晴(1992)：最終氷期末期に噴出した濁川テフラの層序と分布。地質学雑誌、98, pp. 125-136.

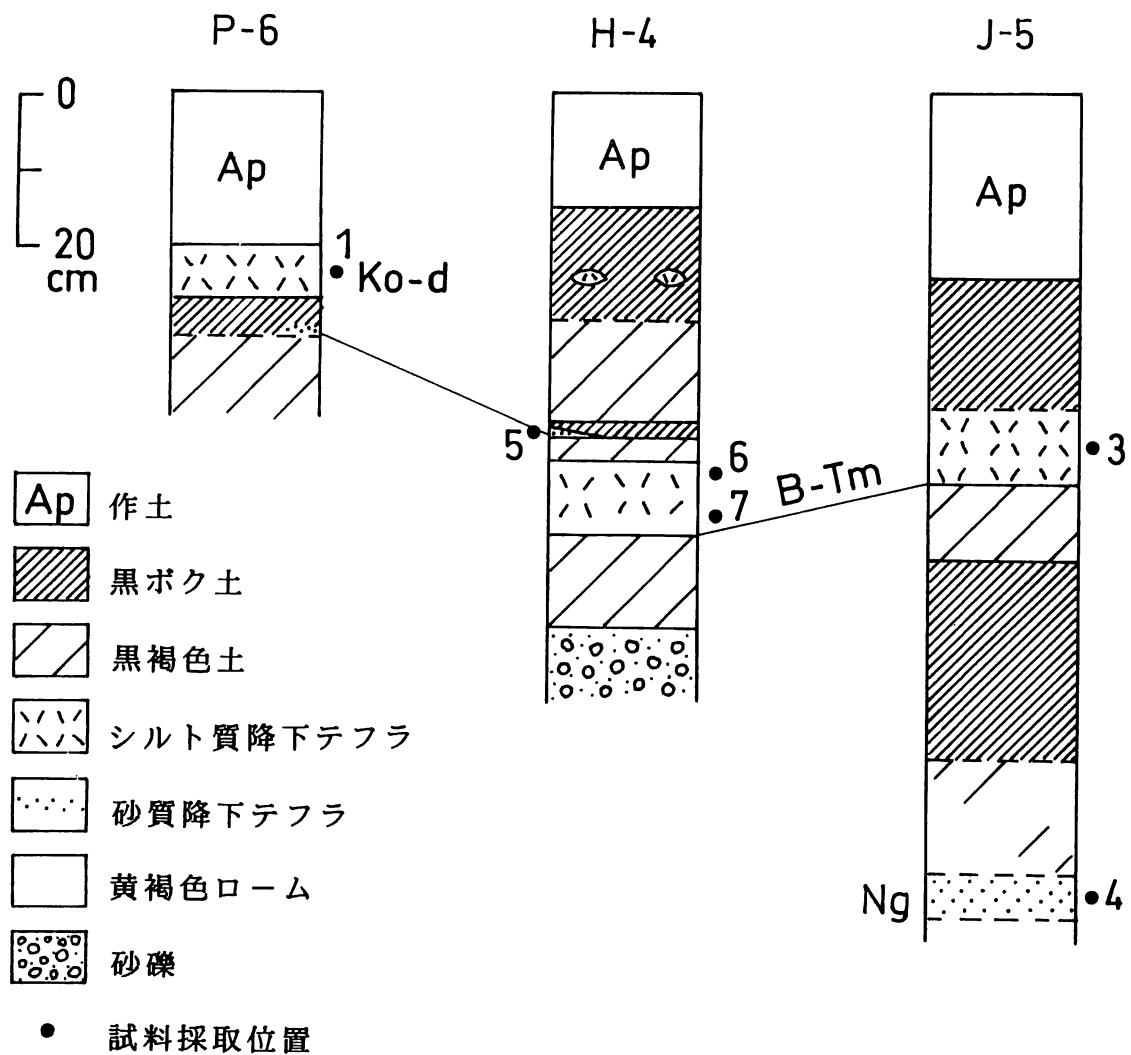


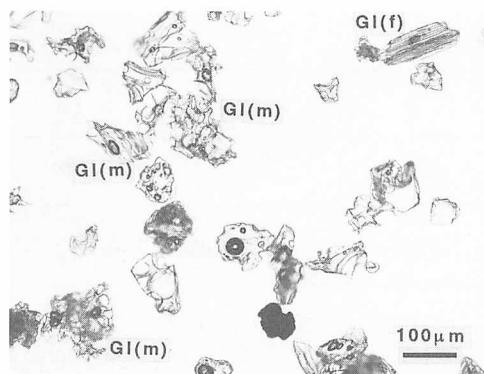
図1 テフラ柱状図

表1 テフラ中の鉱物屈折率

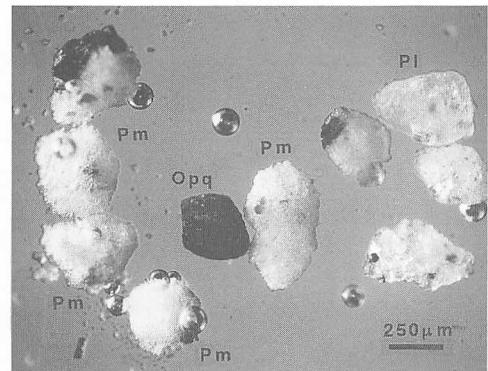
試料	地点	火山ガラス				鉱物	
		量	形態	色調	屈折率	組成	屈折率
1	P-6	++	pm	wh	1.501-1.510	opx>cpx	opx:1.711-1.713
2	L-9	+	pm	tr	1.502-1.508	ho>opx(cpx)	opx:1.708-1.713 ho:1.670-1.675
3	J-5	+	pm>bw	tr, pb	1.517-1.522	(ho, opx, cpx)	af:1.523±
4	J-5	+	pm	tr	1.503-1.508	ho>opx	opx:1.708-1.713 (1.709-1.712) ho:1.670-1.675
5	H-4	++	pm	pb	1.504-1.508	ho(opx, cpx, bi)	ho:1.683-1.689
6	H-4	+++	pm>bw	tr, pb	1.517-1.523	-	af:1.523±
7	H-4	+++	pm>bw	tr, pb	1.514-1.522	-	af:1.523±

+++：多い， ++：中程度， +：少ない， -：認められない。bw：バブル型， pm：軽石型。tr：透明， wh：白色， pb：淡褐色。opx：斜方輝石， cpx：単斜輝石， ho：角閃石， bi：黒雲母， af：アルカリ長石。屈折率の測定は、位相差法（新井， 1972）による。火山ガラスはn，斜方輝石はγ，角閃石はn2，アルカリ長石はn1を測定。()：modal range。

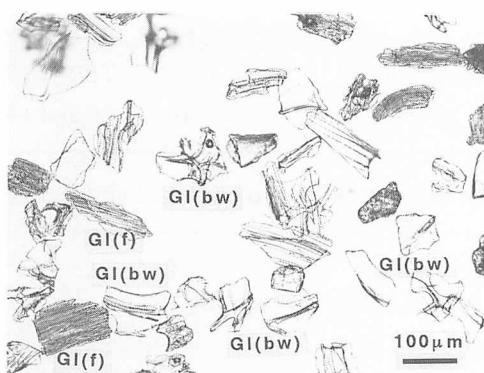
測定：(株)古環境研究所



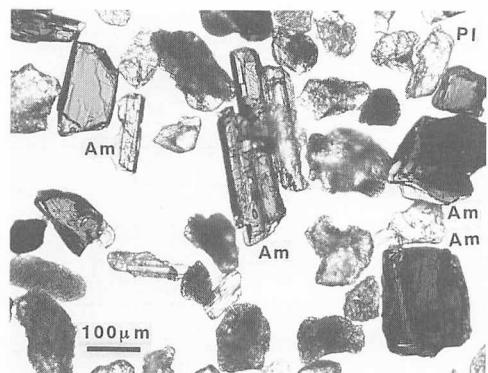
1：試料 1 (Ko-d)



2：試料 5 (砂質降下テフラ)



3：試料 7 (B-Tm)



4：試料 4 (Ng)

Am：角閃石 Bl(bw)：バブルウォール型火山ガラス Gl(f)：纖維状火山ガラス
 Gl(cm)：網目状火山ガラス Opq：不透明鉱物 Pl：斜長石 Pm：軽石
 すべて下方ポーラーのみ、2 は落射照明併用。

図 2 テフラの顕微鏡写真

写 真 図 版



1 遺跡遠景（西から）



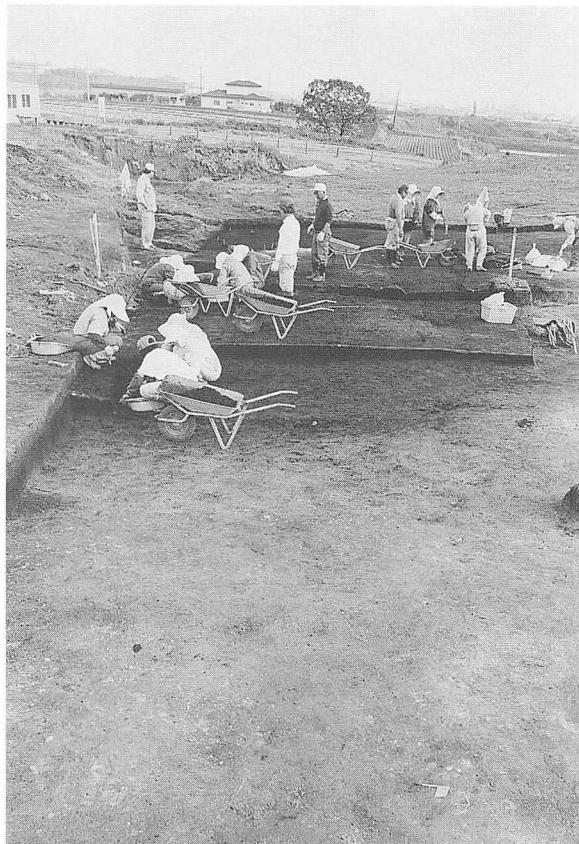
1 遺跡遠景（西から）



2 調査区全景（東から）



1 調査風景（北から）



2 調査風景（北から）



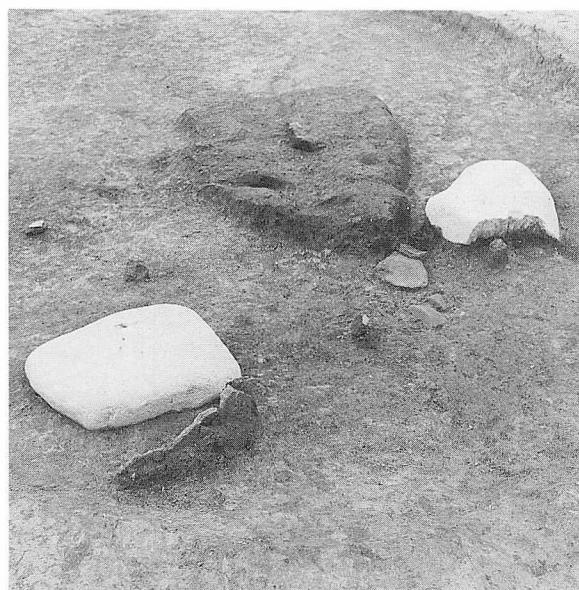
3 調査風景（北東から）



1 NH-1 全景 (南西から)



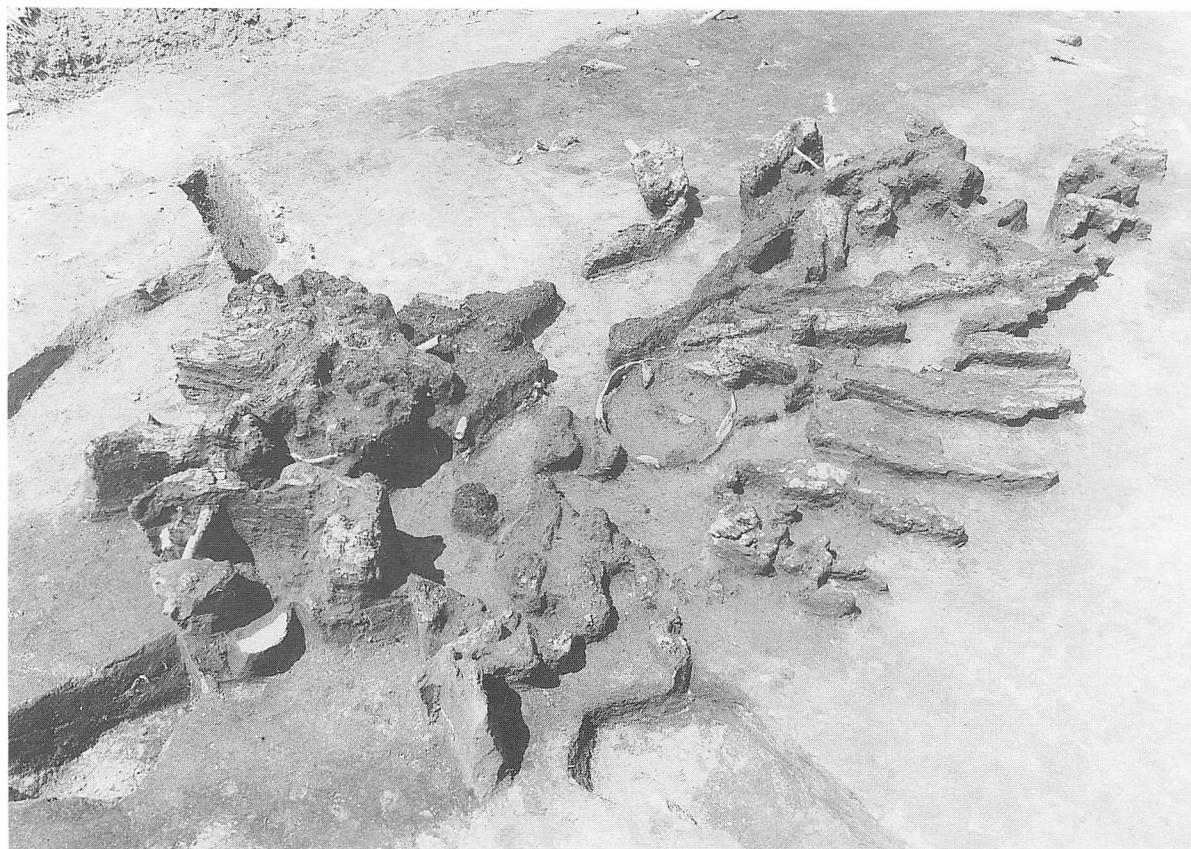
2 NH-1 遺物出土状況 (南から)



3 NH-1 遺物出土状況 (南から)



1 NH-2 全景（東から）



2 NH-2 炭化材出土状況（東から）



1 NH-2 焼土確認状況（東から）



2 NH-2 焼土断面（東から）



3 NH-2 土器埋設炉（北東から）



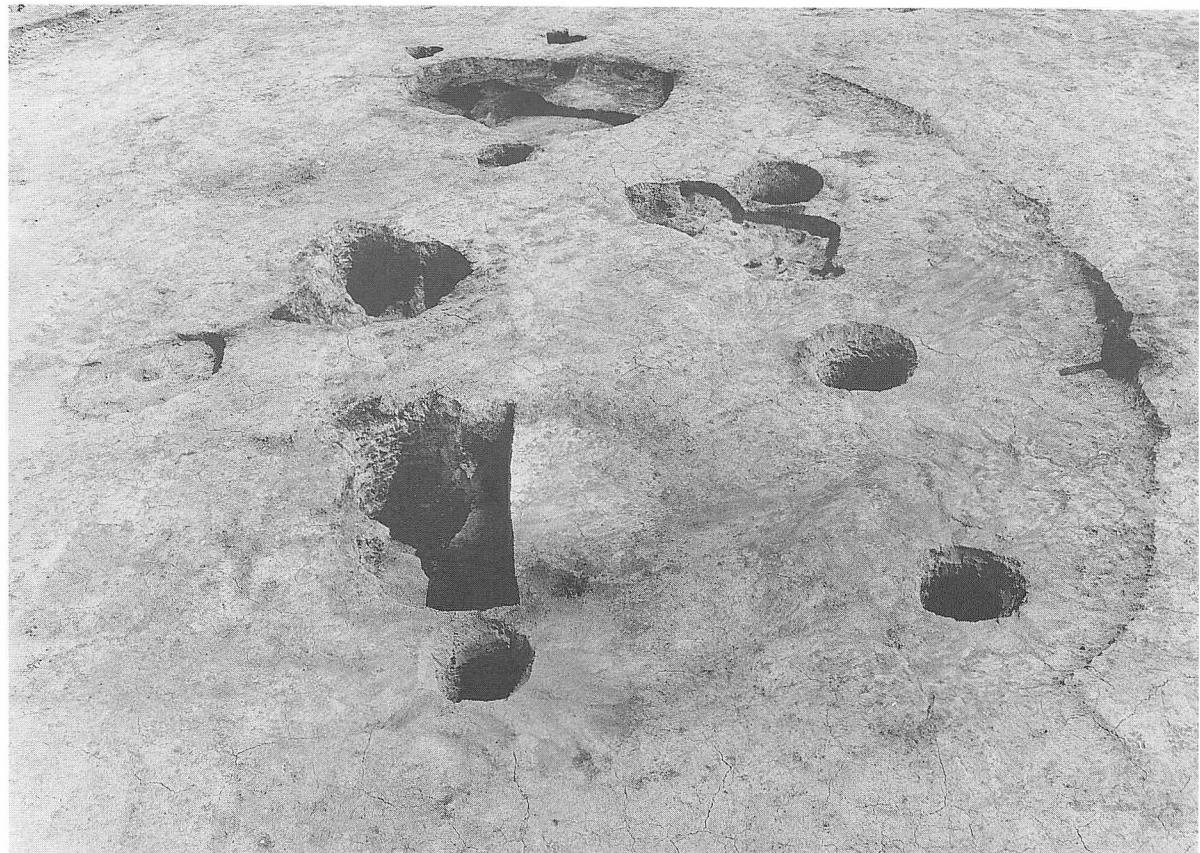
4 NH-2 土器埋設炉断面（東から）



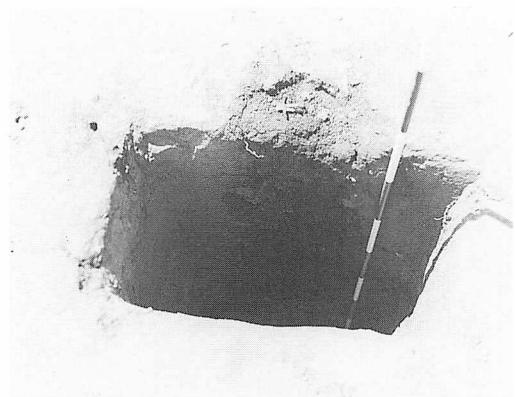
1 NH-2・3 全景（南東から）



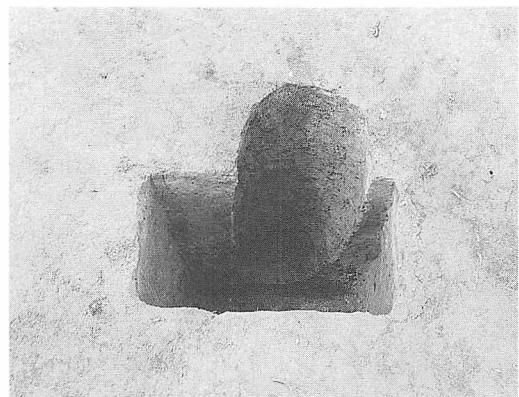
2 NH-4 全景（北から）



1 NH-5 全景 (北から)



2 HP-5 断面 (東から)



3 HP-5 全景 (東から)



4 HP-1 全景 (南から)



5 NH-5 遺物出土状況 (東から)



1 NH-6 全景（南東から）



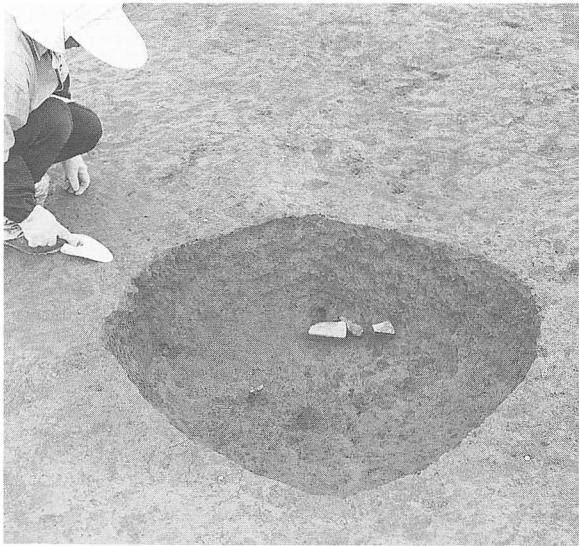
2 NH-6 土器出土状況（北から）



3 NH-6 土器出土状況（東から）



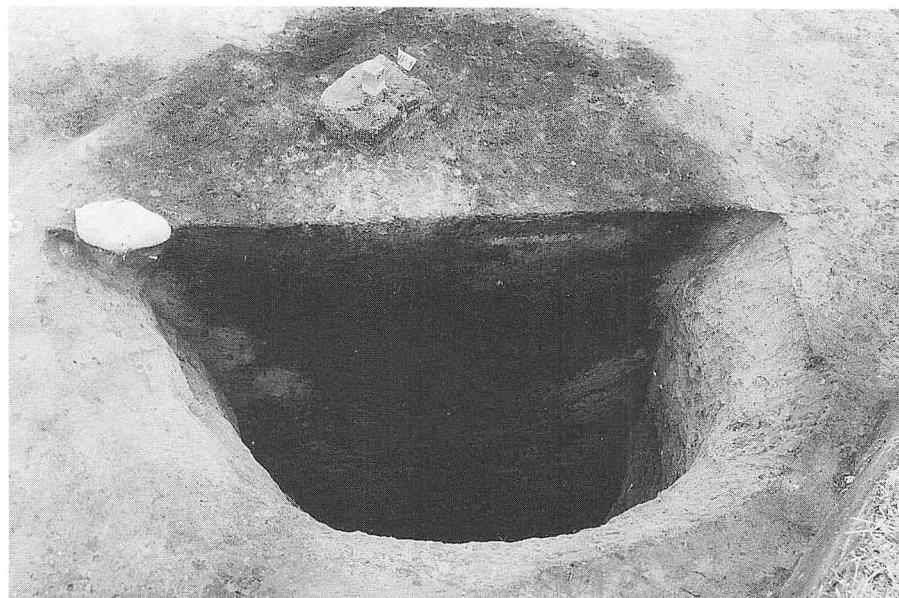
4 NH-6 土器出土状況（南から）



5 NP-3 遺物出土状況全景（西から）



6 NP-3 遺物出土状況（南から）



1 NP-4 土層断面 (東から)



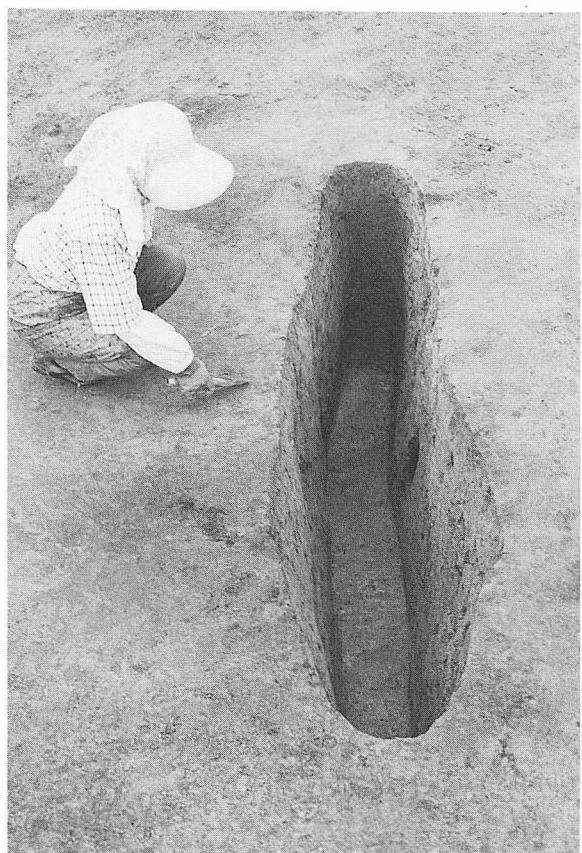
2 NP-4 全景 (南西から)



3 NP-5・TP-22土層断面 (南西から)



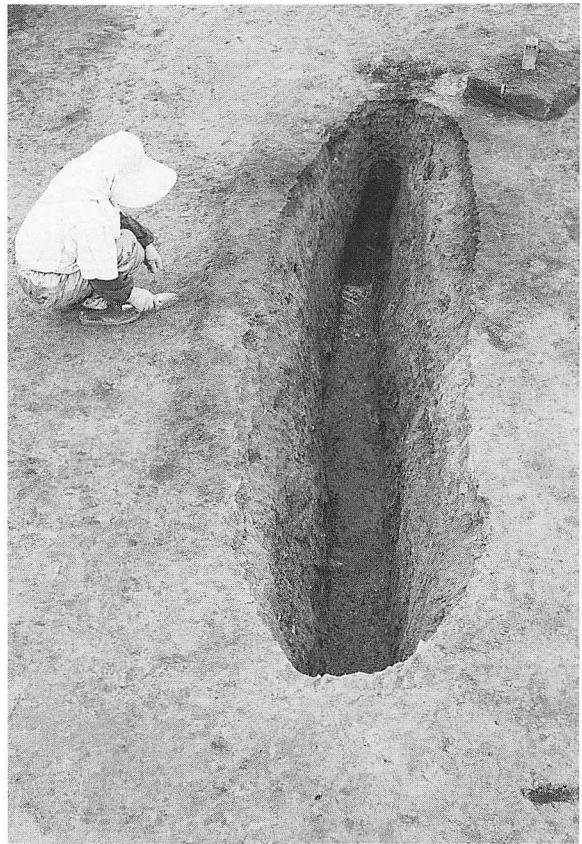
1 TP-12土層断面（北から）



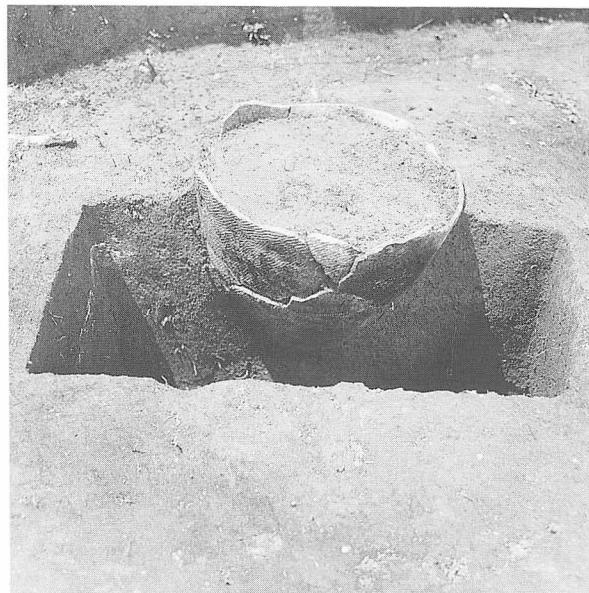
2 TP-12全景（南から）



3 TP-16土層断面（南東から）



4 TP-16全景（南から）



1 埋設土器 1 土層断面（東から）



2 土器 2 出土状況（南から）



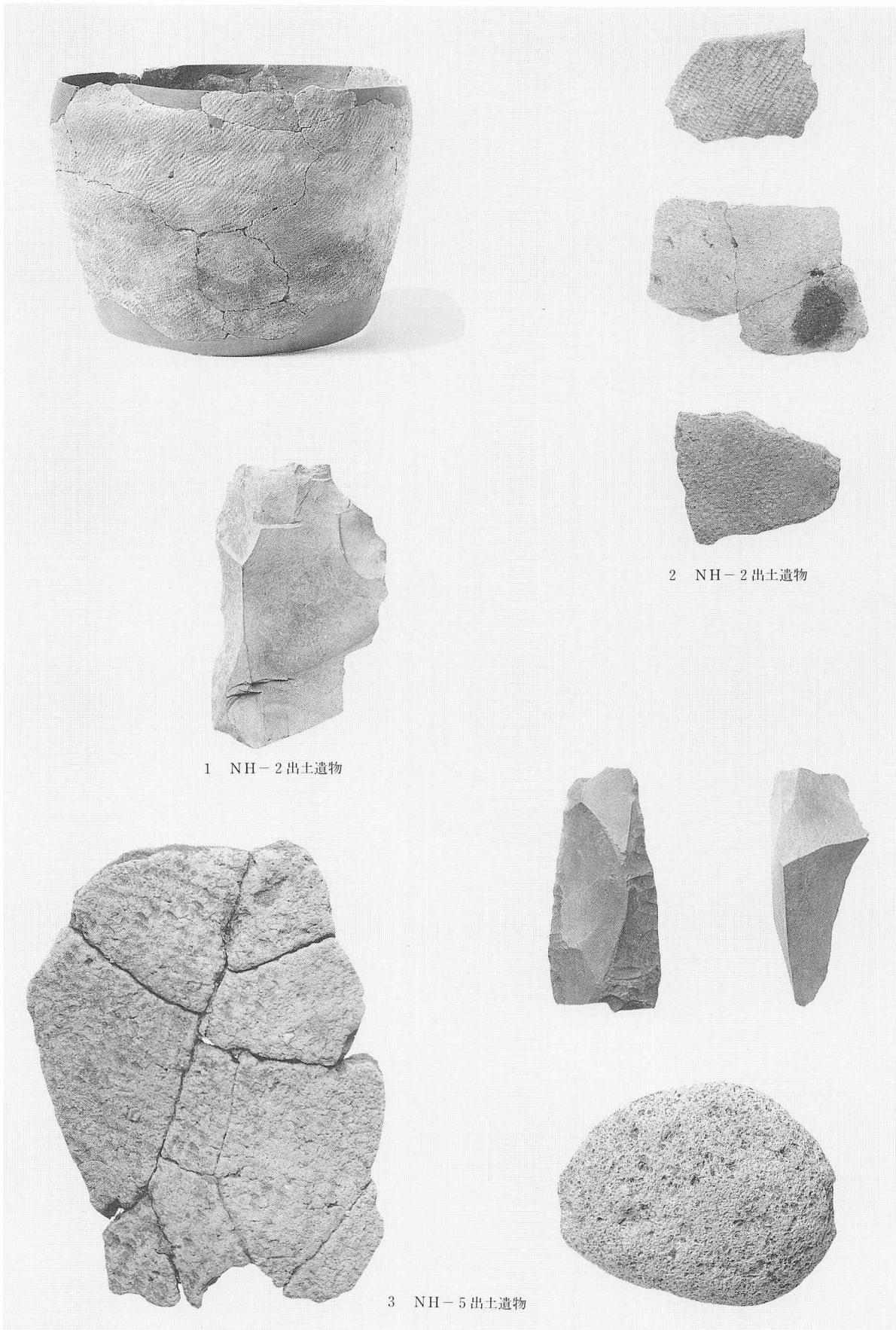
3 土器 3 出土状況（南から）



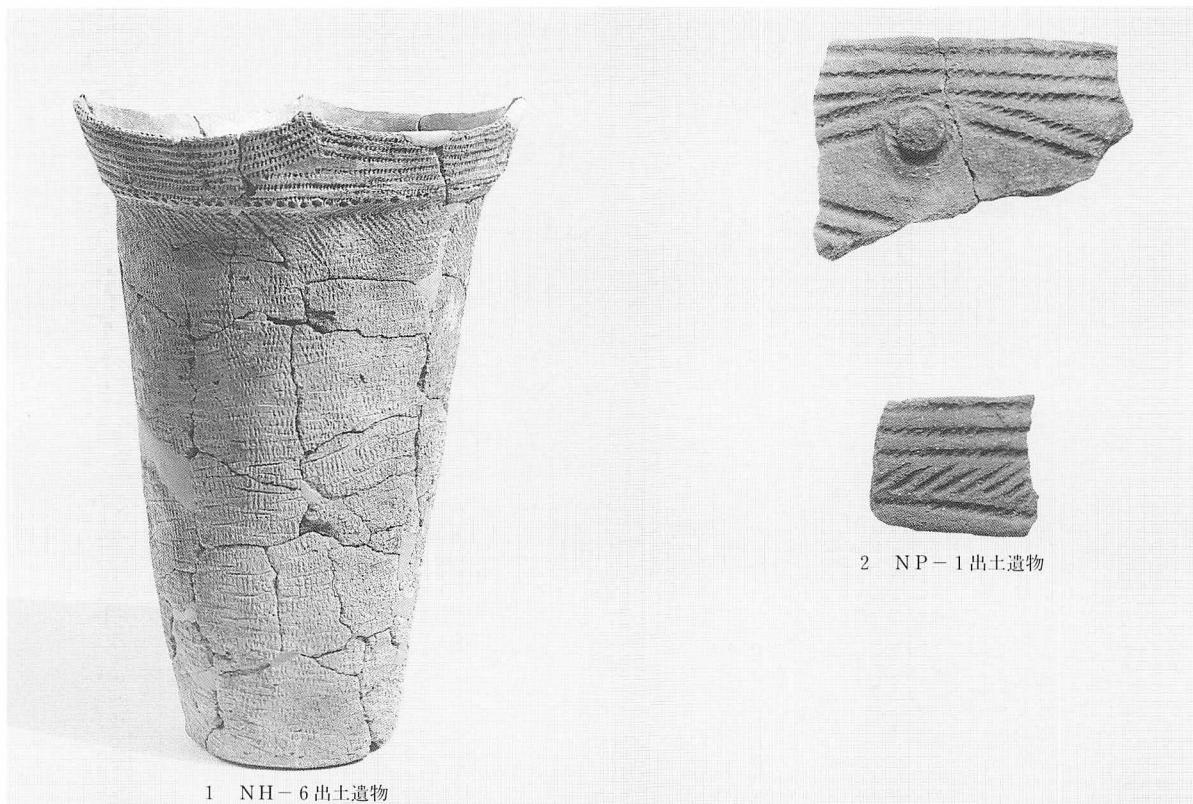
4 ND-1 確認状況（南東から）



1 NH-1 出土の土器・石器・土製品

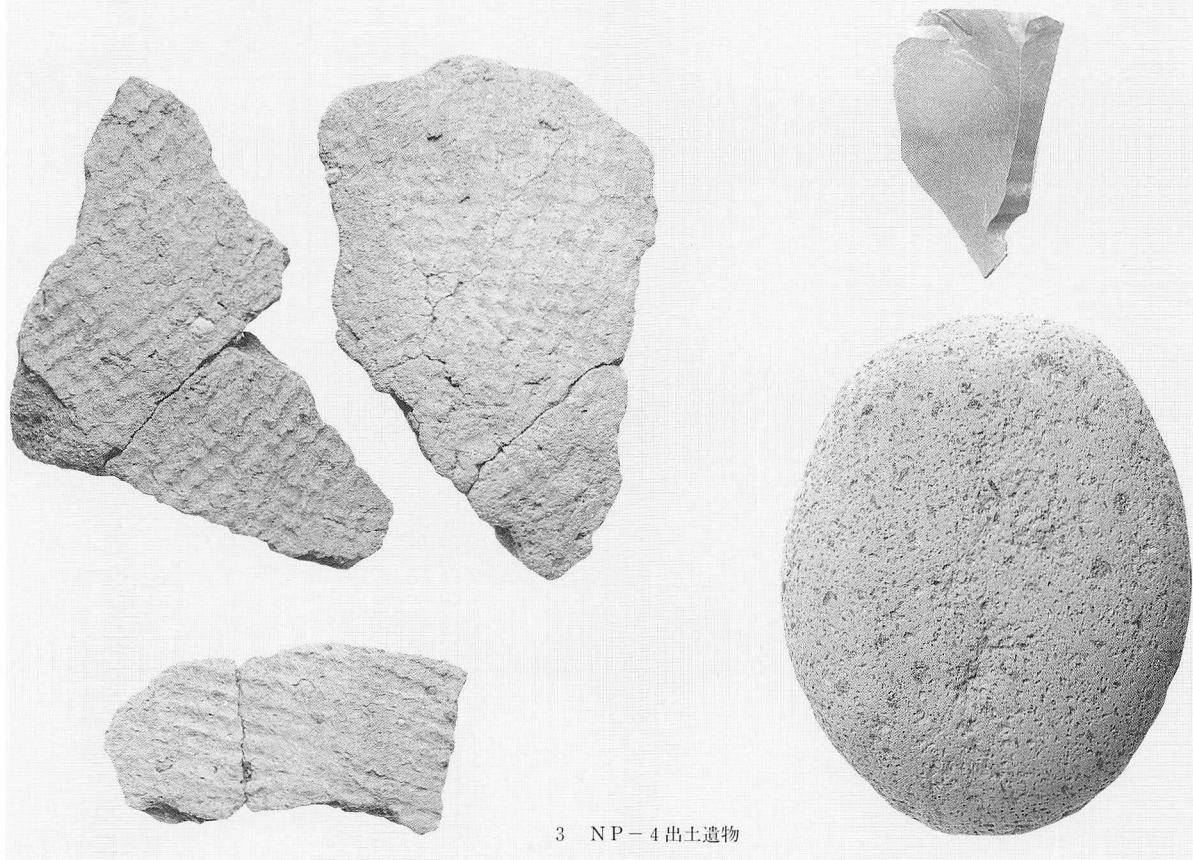


1 遺構出土の土器・石器



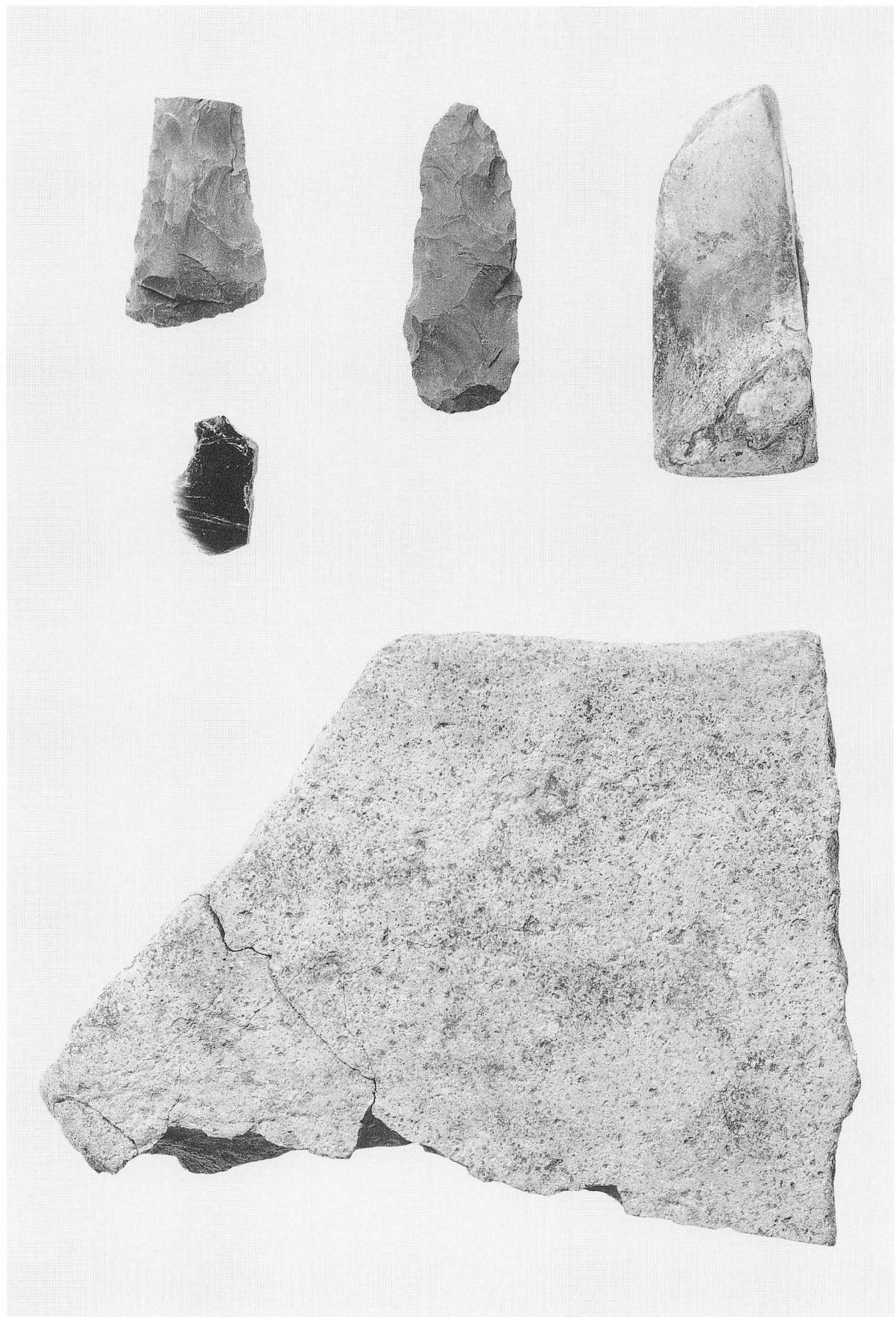
1 NH-6 出土遺物

2 NP-1 出土遺物

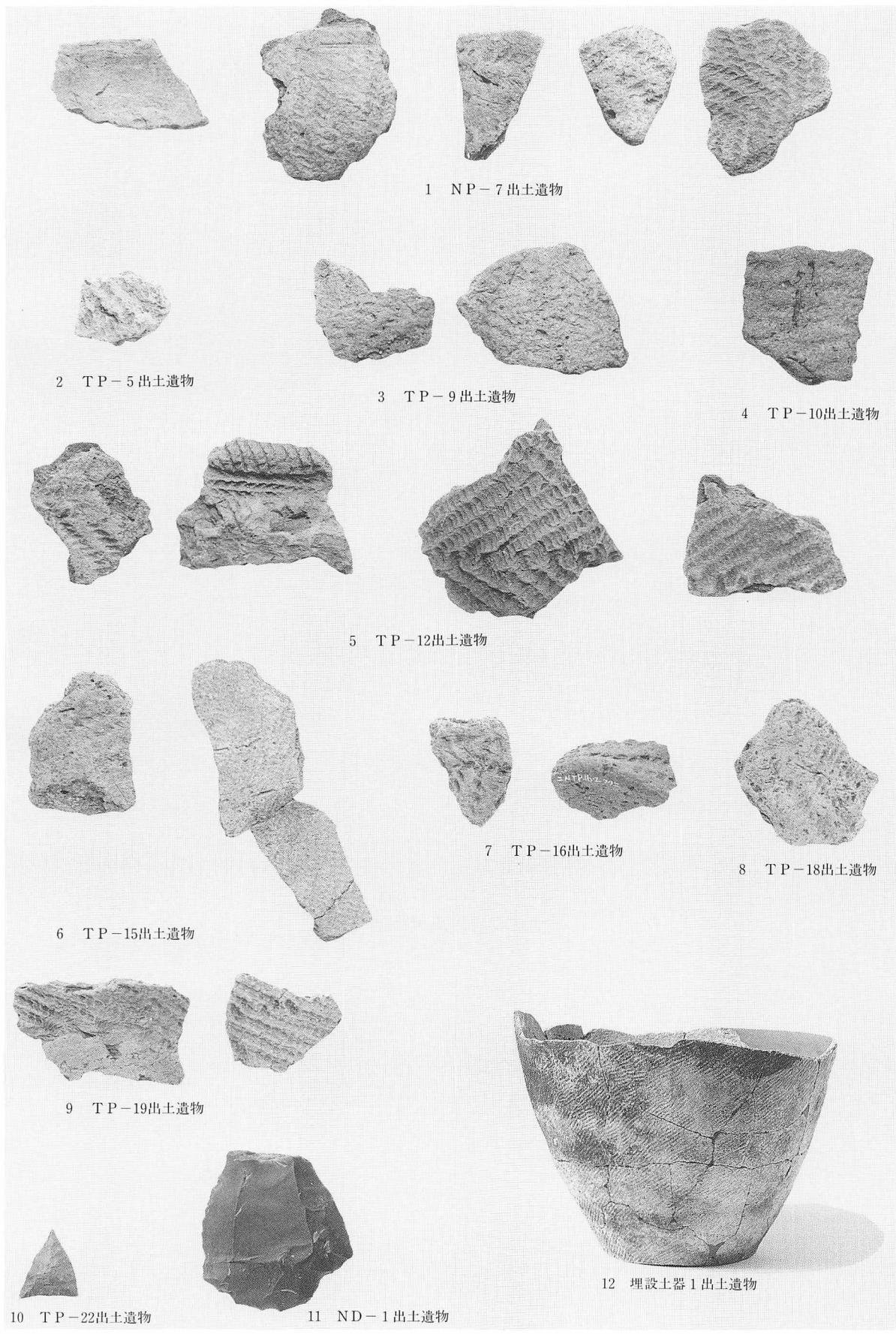


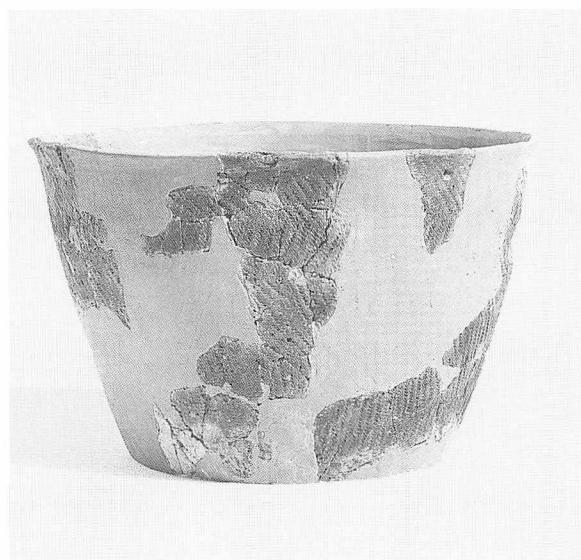
3 NP-4 出土遺物

1 遺構出土の土器・石器

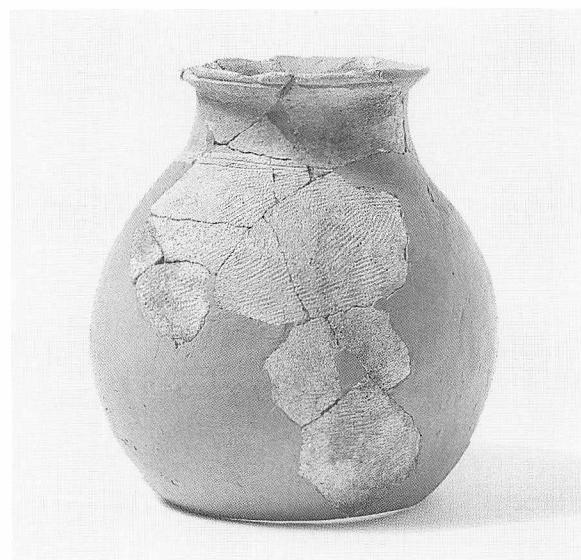


1 N P - 3 出土の石器





1 I群B類



2 V群



3 V群



4 左と同じ
包含層出土の土器



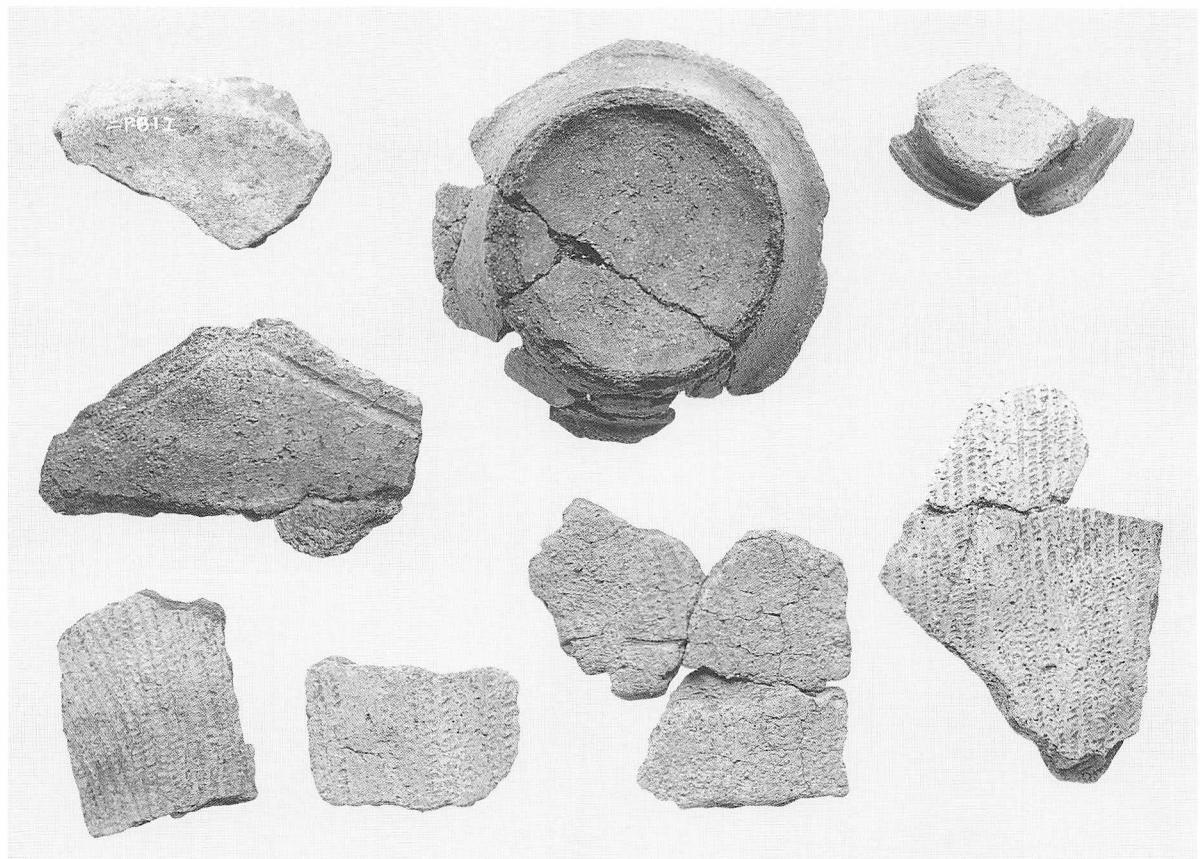
1 包含層出土の土器（I群B類）



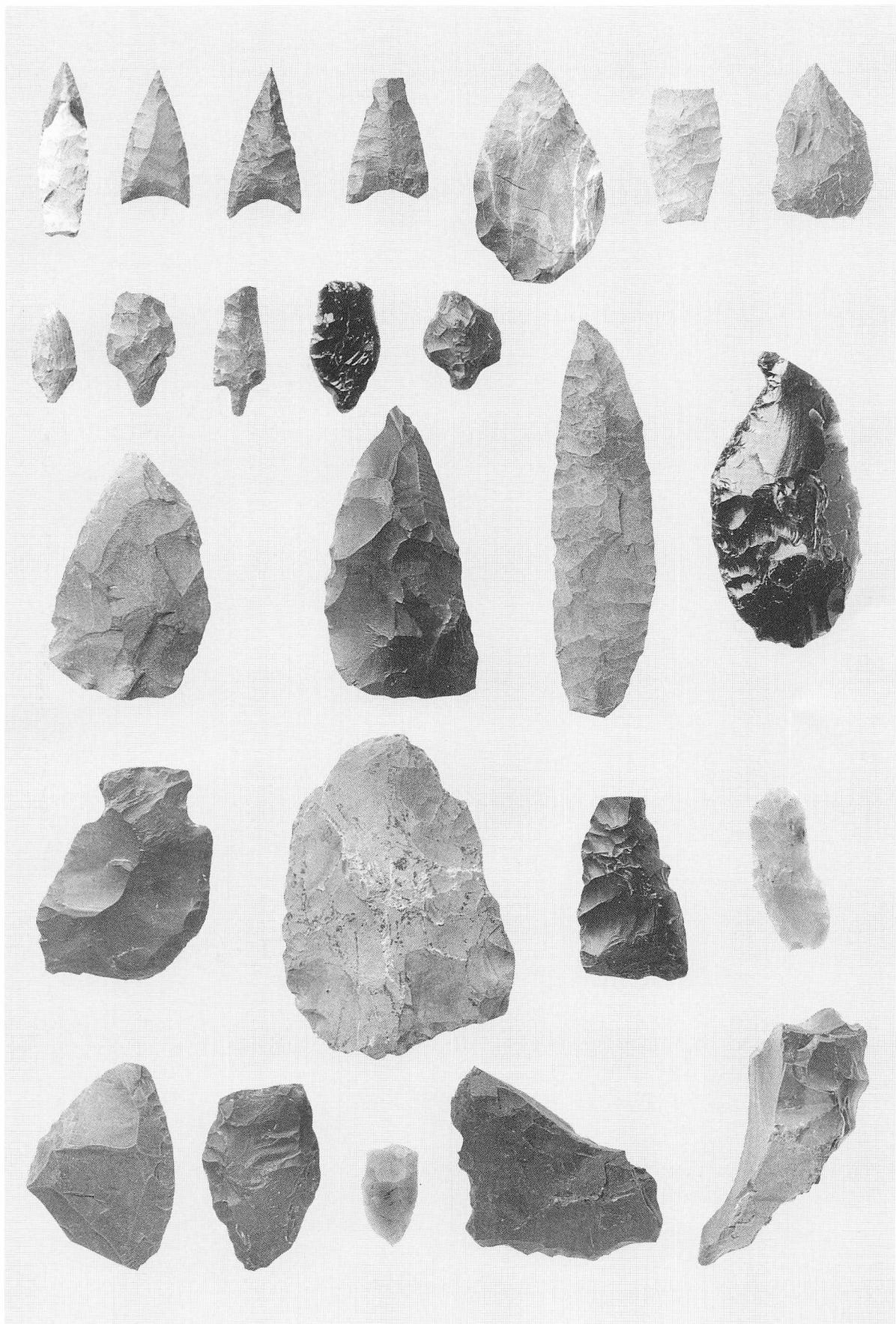
1 包含層出土の土器 (II群・III群・IV群)



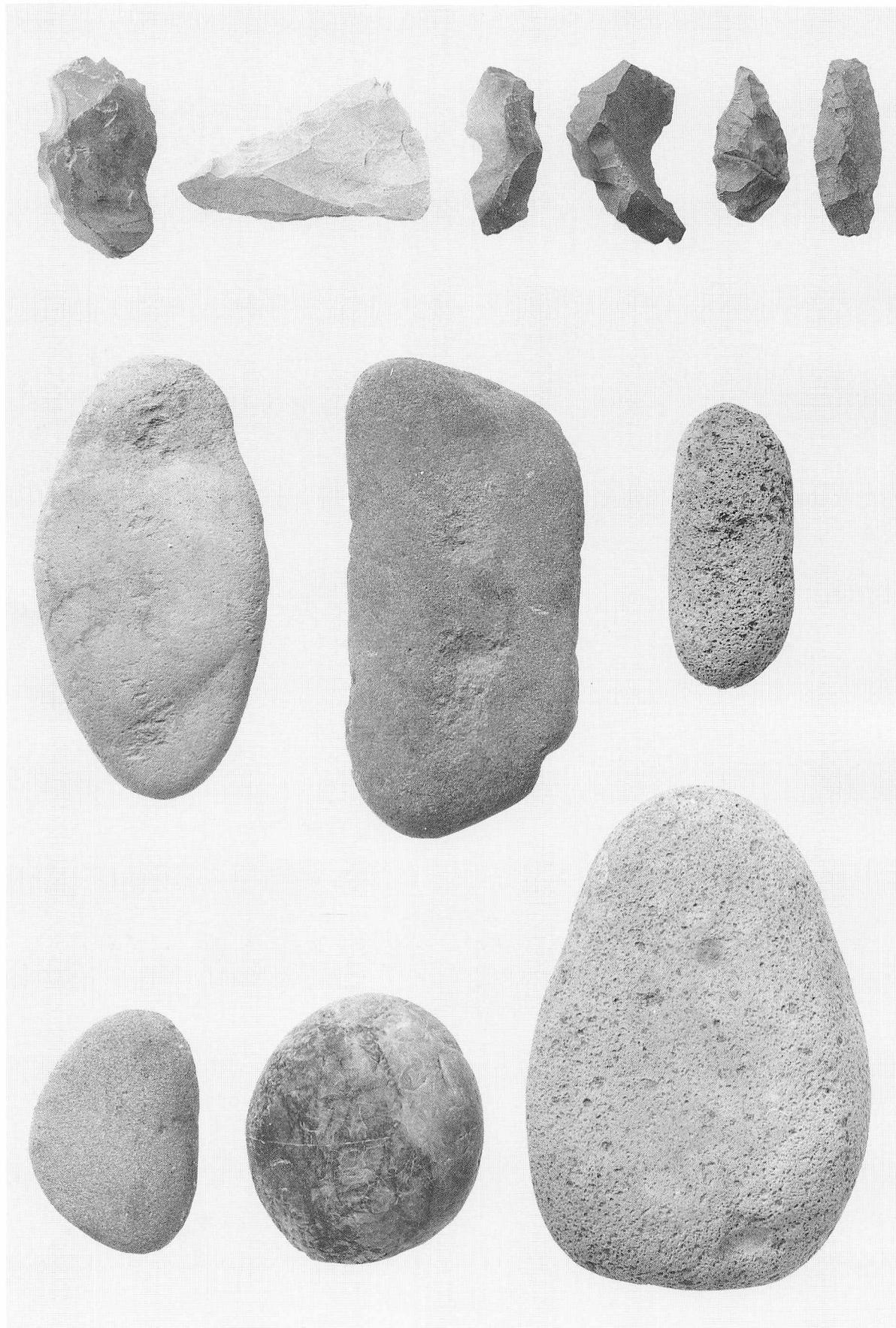
1 包含層出土の土器（V群）



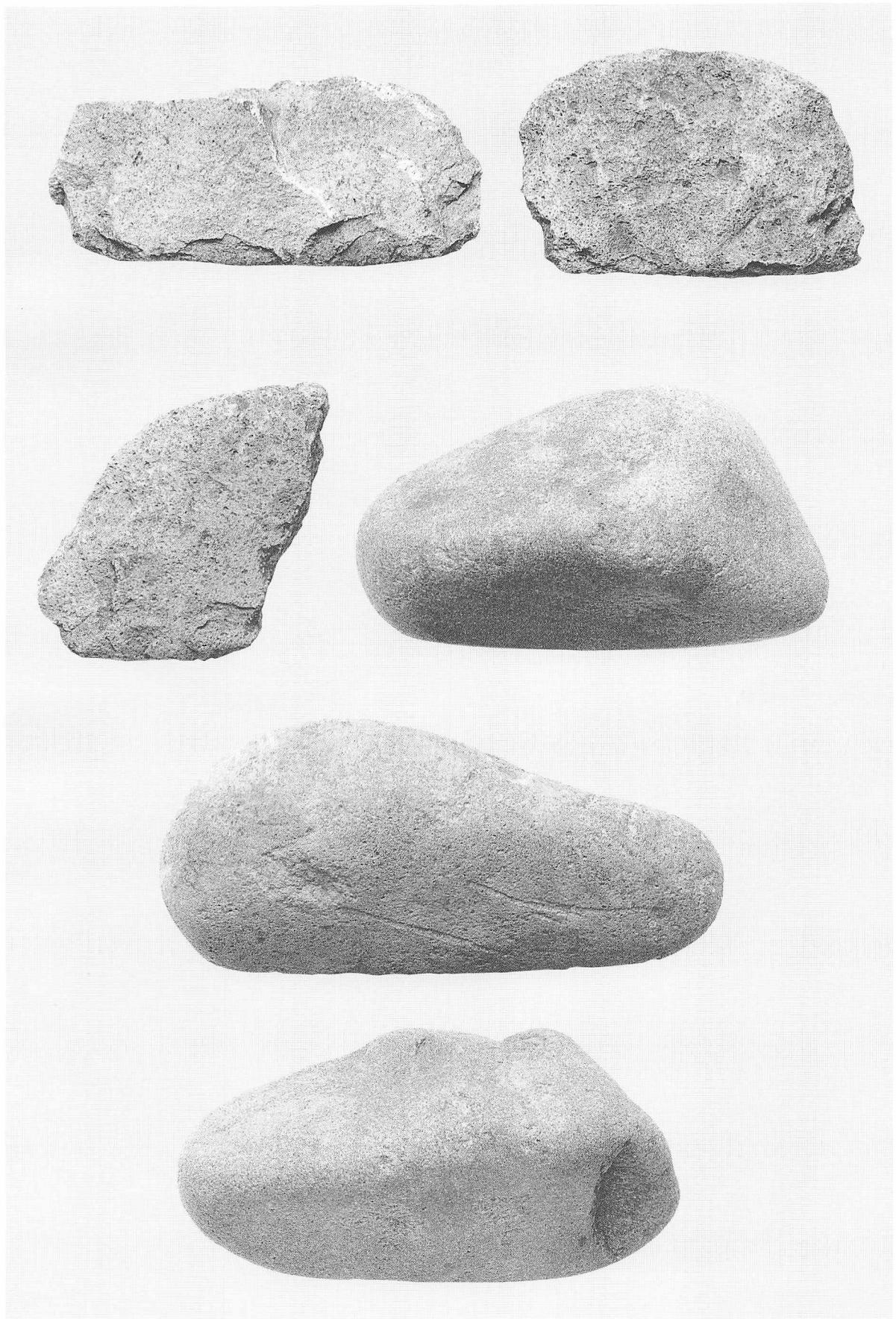
1 包含層出土の土器（VI群）



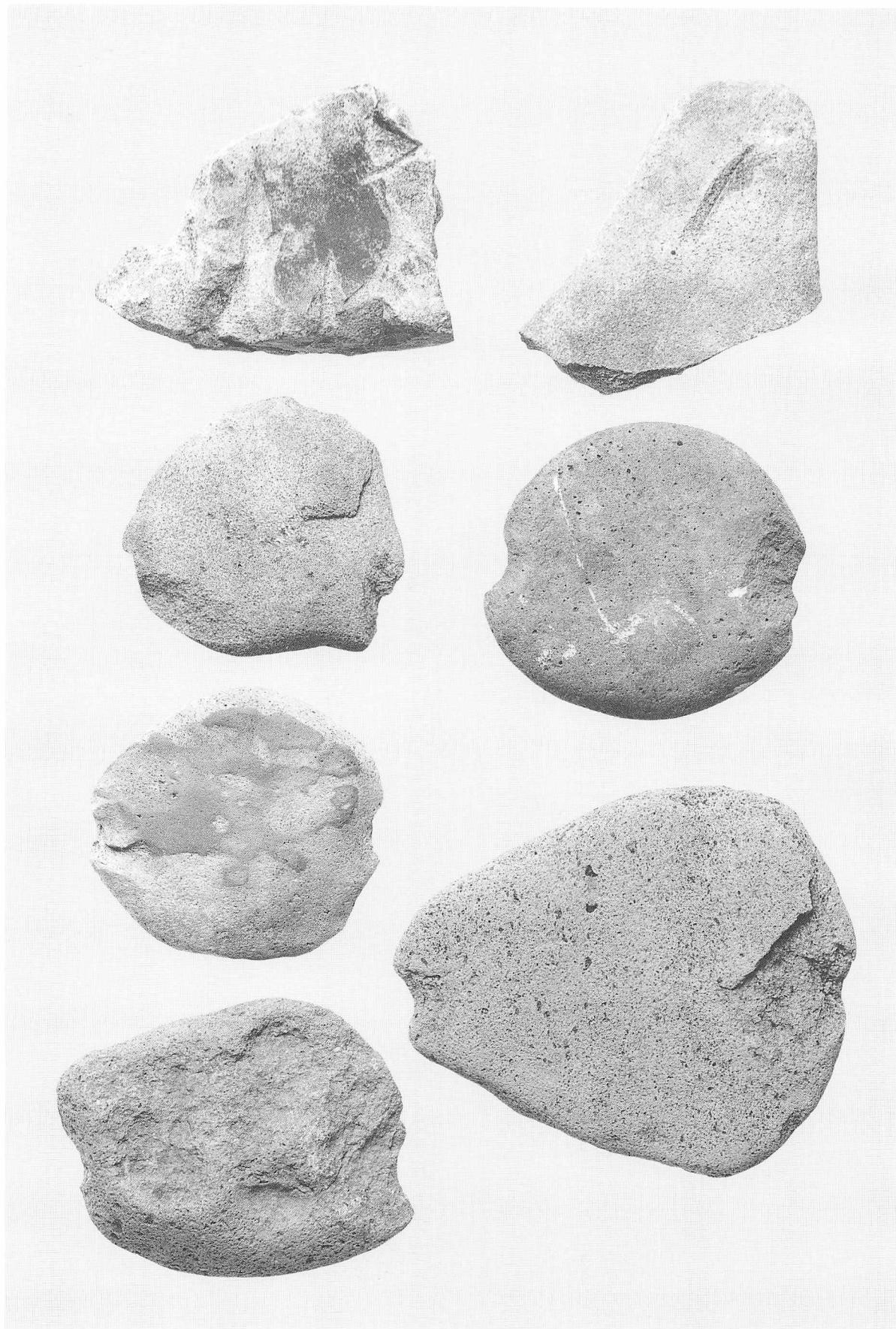
1 包含層出土の石器



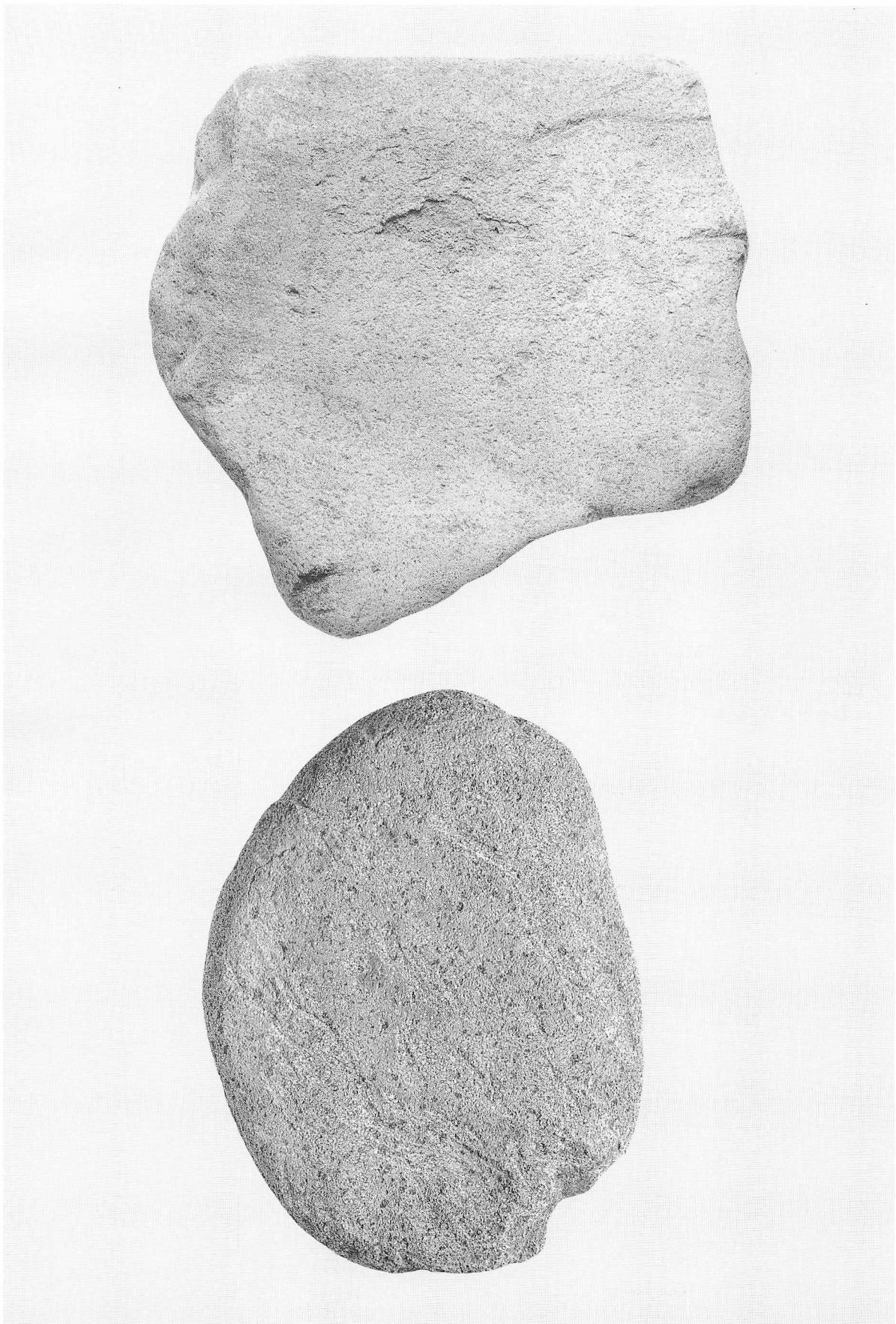
1 包含層出土の石器



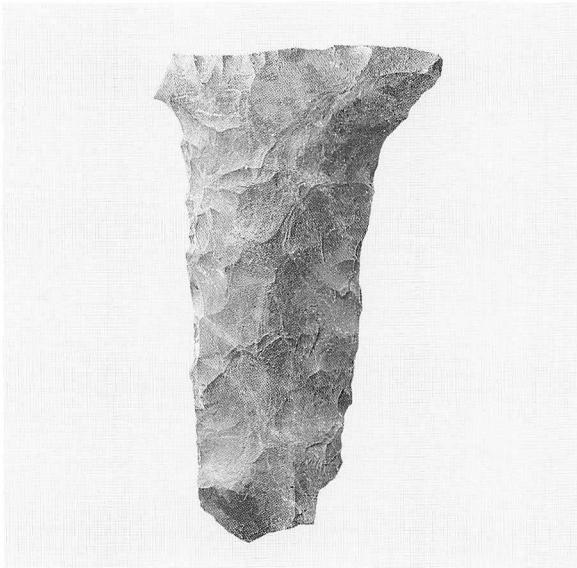
1 包含層出土の石器



1 包含層出土の石器



1 包含層出土の石器



1 包含層出土の石製品



2 表土出土の遺物

報告書抄録

ふりがな	はこだてし にしききょう いせき							
書名	函館市西桔梗1遺跡(2)							
副書名	一般国道228号函館江差自動車道函館茂辺地道路工事用地内埋蔵文化財発掘調査報告書							
卷次								
シリーズ名	財北海道埋蔵文化財センター調査報告書							
シリーズ番号	第122集							
編著者名	佐藤和雄・広田良成							
編集機関	財北海道埋蔵文化財センター							
所在地	〒064-0926 北海道札幌市中央区南26条西11丁目						Tel 011-561-3131	
発行年月日	西暦1998年3月23日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 遺跡番号	東経 °' "	調査期間	調査面積 m ²	調査原因	
にしききょう 西桔梗 1遺跡	ほっかいどうはこだてし 北海道 函館市	01202	130	41度 50分 26秒	140度 43分 2秒	19970506- 19970809	5,000	道路（函館江差 自動車道）建設 に伴う事前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
西桔梗 1遺跡	集落跡 散布地 その他 散布地	縄文時代 早期～ 中期 晩期 縄繩文時代	住居跡 土壙 溝跡 埋設土器 Tピット 墓	6 7 1 1 32 1	縄文土器 石器 縄繩文土器 石器			

(財)北海道埋蔵文化財センター調査報告書 第122集

函館市 西桔梗1遺跡(2)

一般国道228号函館江差自動車道函館茂辺地
道路改良工事用地内埋蔵文化財発掘調査報告書

平成10年3月23日

編集・発行 財団法人 北海道埋蔵文化財センター

〒064-0926 札幌市中央区南26条西11丁目

Tel (011)561-3131

印 刷 北海道印刷企画株式会社

〒064-0811 札幌市中央区南11条西9丁目3番35号

Tel (011)562-0075